

「われ／＼があらゆる政治機關に人民代表を参加せしめよといふとき、これを今日の全階級關係、政治支配關係の全圖から抽象し従つて又これを當面の實現可能の問題としてわが専制國家から期待するならば、それは專制的ブルジョア國家機關における支配階級と労働階級並に被支配全層との機會均等、兩者の協働を要求することとなり、支配階級のために國家機關の專制的性質を隠蔽してやることになるのだ。」

「政治的機關の外部からのみでなく、その内部からも専制機關の全圖、一切の政治關係、當面の全政治情勢の全圖＝總形像を與へ、かくしてその闘争に労働者大衆を動員し闘争せしむることによつて彼等が人民の先頭に立つて政治的自由獲得の闘争を闘争すべきことに習慣づけ理解せしめる……ために吾々は政治的曝露の戦野を政治機關の全面に擴大すべく、あらゆる政治機關への人民代表の参加を要求し、あらゆる政治機關の民主化を要求し闘争せねばならぬ。」

あらゆる政治機關に人民代表を参加せしめよといふ言葉だけならば、單純な民主主義者も賛同するであらうし、模倣好きの日労働幹部諸君も早速、採り入れるであらう、問題はいかなる觀點から如何にして戦ふかだ。この新しい政治的形式的階級性、戦術としての限界性、プロレタリア、デモクラシーへの發展性は、非プロレタリア的諸黨及び諸流派との對立において先づ明確に認識

されてるなければならぬ。

こゝに「あらゆる政治機關」といふ言葉は適當に制限された意味を有してゐる。それは通常のプロレタリア國家に通有する立法、司法、行政の諸機關を指すのであつて、人民代表の觀念と全く相容れない絶對主義的遺制そのものをふくまない。労働民衆は樞密院の如き專制的機構を對象とすることはできない。これらのものに對しては廢除を要求するのみ。人民代表の觀念は通常、立法機關のみに結びついてゐる。事實上、わが在來のプロレタリアートの闘争は主として立法機關のみに向けられてゐた。しかし通常のブルジョア國家内においても、行政機關については官吏公選、民警、自治、重要政務人民投票の如き、司法機關については陪審官の如き、人民代表の觀念の具體化されてゐるものが多々あるのである。

繰返しておく。プロレタリアートは國家事務をブルジョアジーと共同で處理するといふ意味から、立法、行政、司法の各機關への参加を要求するのでない。それは、第一にかゝる参加要求の闘争がプロレタリアートの歩いてゐる歴史的必然の方向の一過程に外ならず、當面の政治情勢はかゝる闘争を展開することに依つてのみ階級闘争の廣汎な發展が約束されるに至つたからである。第二にかゝる闘争は全労働民衆の自主的啓蒙のために戦はれるのであり、彼等がかゝる闘争

を通じて不可避に國家の本質を學ぶに至る。第三にこの闘争は各政治機關を曝露の戰場として利用するにほかならず、階級對立の全體の姿像を如實に労働民衆の眼前に描出することは、かゝる機關内部の闘争を通じて可能である。この闘争においてプロレタリアートの階級的自立性は特に確保されてゆかねばならぬ。そうしてこそ、獨立の階級的政黨を發達させ、これを階級的政治闘争の動かすべからざる司令部たらしめ得る。

この小論文は、プロレタリアートが今日新に着眼せざるを得なくなつた國家行政機關がいかなる性質を有するものであるか、全闘争との連關において如何なる地位を占むるのであるか、等々を考へてみるのである。

先づブルジョア國家一般における行政機關の諸性質を明かにする。

三 政治機關の全體系における行政機關及び官吏の地位

ブルジョア國家學の基礎概念の一つは三權分立論である。ブルジョア國家の政治機構はこの思想の上に組み立てられてゐる。三權分立とは國家權力の作用を立法、行政、司法の三に分ち、各々獨立の機關をして當らしめ、互に侵襲せしめまいといふことを謂ふ。簡單に言へば立法權は議

會に、司法權は裁判所に、行政權は國家的地方的行政機關に行使せしめると稱するのである。しかし××××はそれ自體、統一的なものであるから、三權分立は論理的にも事實的にも擬制に過ぎぬ。だが、もと三權分立の思想は絶對主義政治の專斷に對するブルジョアジエの反抗的要求に出たものであるから、ブルジョア民主主義的に進んだ國ほど、三權分立は形式的に鮮明であり、之に反し、絶對主義的要素の殘存してゐる國ほど、その形式的鮮明を缺いてゐる。わが憲法は三權分立の思想に立つてゐるが、形式的になほアイマイなことが少からず存してゐる。

マルクス及びエンゲルスは、國家とは一階級が他階級を壓服する機關に外ならずと定義する。古代國家は奴隸所有者の國家、中世國家は農奴所有者の國家、近世國家は資本家階級の國家である。問題は、今日の國家權力の中樞的機關は何か、國家的政府的事務を執行する中心機關は何か、である。ブルジョアジエはその階級支配のためにいかなる政治機關に最も重きをおくのであるか。ブルジョア民主主義者は人民代民者を以て形成される議會こそ國家權力の中樞だと考へる。マルクス主義者は之を否認する。レーニンは次の如く斷定する。

「議會主義を以て統治されてゐる何れの國家をとつてみても——アメリカから瑞西に至るまで、フランスからイギリス、諾威等々にいたるまで——本來の「國家的、政府的」仕事は省、内閣、

參謀本部の小部屋のなかで行はれてゐる。議會は單に饒舌の場所にすぎぬ、しかり、「無知な人民」を欺瞞するといふ明白な目的を以て。」

支配階級は行政機關を中心として、立法、司法の諸機關を左右し、これらを通じてその對外的及び對內的階級政策を指導する。

註（司法權が獨立したものでない事について、マルクスは「裁判官の見せかけの獨立は歴代政府の下における彼等の卑屈な屈從を隱蔽するに役立つのみで、彼等は之等の政府に對し順番に忠誠の誓を立てたり破つたりする」と言つてゐる。「フランスの内亂」第三章階級裁判が原因となつて、プロレタリアートの反抗を激發した最近の國際的な事例は墺國ウキーンの七月暴動であらう。

ブルジョアジーはあらゆる實際的方法を以て民衆を政治生活から遠ざけようとする。彼等は一切の事柄の決定されるかに裝ふ議會すらあらゆる方法を以て民衆を近付けまいとしてゐる。泥んや行政機關に對してはなほ然り、彼等はこの行政機關を動かすに、人民から遊離した老大な官吏の隊伍を以てしてゐる。

國庫から俸給を得る官吏は、自ら階級闘争の外に立つと考へるが、しかし彼等は階級意識を持たない抽象人であり得ない。官吏の性質についてはレーニン¹は次の如く言ふ。

「ブルジョア議會的の、特にまたブルジョアの立憲的の諸國家の全歴史は、事實上の行政活動が官吏といふ巨大な隊伍によりて行はれてゐることを示す。しかし此隊伍は、民主々義的精神を満喫してゐる。そして大地主とブルジョアジーに對する無數の糸を以て結ばれてゐる。この隊伍は絶え間なしにブルジョアの諸關係の大氣の中に包まれ、その中に呼吸して居り、洞み切つて居り、骨ばかりになつて居り、凍えて居り、この空氣の中から脱出することができず、杓子定規の型にハマり、千偏一律のまゝに何等考ふることも感ずることも泥んや行動することもできない。この隊伍の内部は位階制や「國家」政務に與へられた特權に依つて結合してゐるが、その上級のものは株券の所有や銀行を通じて全金融資本に隸屬してゐる。」（レーニン著作集第四卷二三九頁以下）

「この機關（官吏）は共和主義ブルジョアのために「 $\times\times$ なき $\times\times$ 政治」即ち例へばフランスの第三共和國の如き型を作りあげる奉仕をすることがある。しかし資本の除去といふことでないし、少くとも資本の權利、「神聖なる私有財産」の權利を制限し制御する眞面目な第一歩を意味する改革はこの機關に依つて絶対に實行されない。」（同上）

以上述べたブルジョア國家一般に通有する特徴——階級政治の中心機關としての行政機關、人

民と官吏との遊離——は、わが國における行政機關の本質を理解する上にも缺くことができない。問題はわが國の行政機關がブルジョア國家一般のそれに比して如何なる特殊性を有するかにある。

四 わが行政機關の特質

わが資本主義の發達過程の特殊な歴史的事情、この間の階級關係の複雑な交錯作用は、わが國の近代國家としての發展過程に、その國家機關の形式の上に、必然に反映せざるを得なかつた。絶對主義的遺制の問題はわが行政機關の構成及び性質のなかに最もよく現れてくる。わが行政機關の根本特徴は、それが純粹のブルジョアの形態に到達しないに拘らず、ブルジョアの階級支配の要具となり、絶對主義勢力と帝國主義大資本との抱合を最も具體的に實現してゐる事に在る。ブルジョア國家の政治機關がブルジョアの階級支配の機關であることは自然の事柄であつて、何等の疑ひがない。しかし、わがブルジョア階級は經濟上の支配者である、故にまた政治上の支配者である、故に労働者の敵はブルジョア階級である、故に絶對主義的遺制の問題は労働者の問題たり得ない、といふが如き政治批判の方法論に立つ人々は、ブルジョア化されない政治機關が帝

國主義ブルジョアの階級のために演ずる役割、かゝる政治機關が労働者に加ふる壓力の二重の反動性、労働者がかゝる機關の徹底的民主化のために闘争することの強烈な變革的意義を、終に汲みとることができぬ。勿論、労働者は資本との闘争を通せずして絶對主義的遺制の清掃即ち政治の徹底的民主化を完くすることができぬ。何となれば、わが今日の帝國主義ブルジョアはかゝる非民主的政治機構の最大の欲求者であるのだから。非民主的政治機構の徹底的民主化、この點に正に當面の歴史的段階におけるプロレタリアートの政治的闘争の焦點があり、ブルジョア階級はこの點に於て最大の攻撃を被るのであり、従つてこの闘争はプロレタリアートのブルジョア階級に對する決定的闘争の必然的な一過程である。

以上の如き觀點からわが行政機關の特質を數へてみる。

(1) 官吏の××に毫も人民の意思が参加しないこと。わが官吏の××はいはゆる天下り的であつて、アメリカ、スイス等々に見るが如き官吏××はわが行政法上、想像することだに許されない。プロレタリアートは結局に於て官吏が人民から選舉されること、官吏が人民に責任を負ふこと、人民がいつでも官吏を××し得ること、官吏の俸給が熟練労働者のそれと同一であるべきこと等々を要求するのであるが、わが今日の官吏は、上述の如きプロレタリア・デモクラシー

の下においてのみ存在し得る「官吏」と正反對の對照物を成してゐる。わが官吏が人民から遊離してゐる程度は、いかなるブルジョア國家の官吏よりも甚しい。過般の府縣會選舉以來、「天下り知事排撃」「知事公選」の如き要求が掲げられてきたのは、官吏××といふ民主的要求の端初形態にほかならぬ。

(2) 官吏の自恣と資本の利益とが結び合つてゐること。ブルジョア國家の行政は法規に依らずして人民の權利義務に干渉しないことを第一條件としてゐる。官吏の自恣を制御する此法治國主義は專制政治と憲法政治とを區別立てる標識である。わが行政は形式的に法治國主義に遵據してゐるが、法律自體に多くの專制的痕迹を止めてゐるのみならず、之を執行する行政官吏殊に警察官吏が法規に依らざる自恣的政治を執ることは頻繁に目撃される。そして彼等の擁護するのは資本の利益である。專制官吏一般と人民一般とが對立抗争した時代は既に過ぎた。今日の行政機關は、ブルジョアジー及びプロレタリアートの基本的對立を反映する階級支配の要具である。しかもわが官吏は前代的自恣の續行者であり、かゝる自恣と資本の利益とが結合する場合、勞働民衆の被る壓服は頗る痛烈である。

(3) この人民から遊離してゐる官吏の隊伍が官僚的中央集權の下に統括されてゐること。こ

の官僚的中央集權はブルジョアの地方自治の發展を全く壓殺してゐる。公共團體としての道、府縣、市町村の自治行政は中央權力からの官僚的知事のために骨抜にされてゐる。府縣會は自治機關の實質がなく、事實上、專制的政治機構の一環である。市町村會は警察官吏の指揮にすら從はねばならぬ。道府縣知事は原案執行權、出兵請求權の如き過大な權力を擁してゐる。——マルクス主義者は中央集權主義者である。だが、國家に對する迷信に充ちてゐる小ブルジョア社會主義者の如く、官僚的中央集權との抗争を以て專權主義一般の破壊と考へない。故にわがプロレタリアートは過般の府縣會選舉において專制的中央權力と戦つて政治的自由を獲得するための一過程として、地方自治を主張した。それは中央對地方の政治的對立といふ疾くに過去に葬り去られてゐる空虚な觀念や、地方分權といふデモクラットの要求や、純粹の地方自治並にその聯合を幻想するブルードン主義からでない。今日の地方議會は中央權力に對立するものでなく、それは既に中央權力の一機構として、資本家地主の一機構として、全勞働民衆にこそ對立してゐる。——官僚的中央集權といふ言葉は單に行政機關の集中のみを指すのでなく、全ての政治機關の集中された状態といふのであるが、行政機關の集中がその核心を形成してゐる。

(4) 行政機關が立法機關の機能を侵してゐる程度の甚しいこと。いわゆる××××の問題が

それである。知事が選舉事務について過大な権能を持つこともそれである。(府縣會選舉における知事の干渉や秋田、青森、宮崎等において知事が無投票當選の取持をやつたことなどを考へ合はすべし。)プロレタリア・デモクラシーの政治形態の下においては、三權分立の擬制が消滅し、「立法行政を同時に執り行ふ活動體」(マルクス)……………今日、わが行政機關が立法機關の機能を侵すのは、人民代表の参加を許されてゐる立法機關の活動範圍を縮小し、結局、人民を政治生活より出来る限り遠ざけようとの意圖に出るものであるが故に、すべての立法機能を行政機關から立法機關へ還元することが當然の要求となる。

(5) 通常のブルジョア國家に見る能はざる專制的行政機關の殘存してゐること。(×××、××××、×××××)

(6) 大官吏が現實の政治勢力として結成してゐること。以上の如き行政組織は最も人民からかけ放れた官僚(この言葉はわが明治以來の政治上特別の意味を持つてゐる)と呼ばれる、大官吏團の存続條件となり、彼等は貴族及び軍閥と結んで現實の一政治勢力を形成し、そしてブルジョアジーのための最も反動的な柱となつてゐる。

X X X X X X X X X X

わが行政機關はブルジョア國家一般のそれと同じく、ブルジョアの階級支配の最も重大な最も必要な要具となつてゐる。

だが當面において吾が労働民衆の直接の闘争は直ちに行政機關そのものに向ふのでなく、最大の精力は立法機關の徹底的な民主化の方へ向けられねばならぬ。行政及び司法の諸機關の民主化は、當面の政治的段階の下においては、立法機關に主要××を集中する事によつてなされる。労働民衆の闘争対象としての立法、行政、司法の諸機關の交互關係、労働民衆が主要××を立法機關に集中せねばならぬ理由、等については充分、論議をつくしておかねばならぬ事柄であるが、それは他日に譲りこゝには行政機關をプロレタリア的闘争の全體との連關について考究するわけである。

X X X X X X X X X X

私は次いで人民代表の行政機關への参加の諸形態、地方自治、また××運動や××運動等が持つ政治的意義などを論じてみる。(一九二七年十一月「マルクス主義」第四十三號)

戰 爭 論

目次

第一章	マルクス主義者は戦争をいかに理解するか……………	二〇九
第二章	マルクス及びエンゲルスと戦争問題……………	二二四
一	マルクス政治理論と戦争……………	
二	新ライン新聞におけるマルクスの戦争観……………	二三〇
三	マルクスと普佛戦争……………	二三〇
第三章	レーニンの戦争論……………	二三八
一	レーニン主義の全體系における戦争論の地位……………	
二	近代の戦争の歴史性と類型……………	二三三
三	帝國主義戦争の不可避性……………	二三五
四	帝國主義戦争の反動性……………	二三九
五	民族戦争……………	二四二
六	日和見主義と排外社会主義……………	二四五
七	プロレタリア國家と戦争……………	二五二
八	いかにして帝國主義戦争を克服するか……………	二五五
目次		二〇七

九 平和の問題 (二五八)

第四章 軍備問題について……………二六三

- 一 軍備問題についての基礎的觀點 (二六三)
- 二 軍備撤廢の標語について (二六六)
- 三 マルクス主義者の軍備問題に對する標語 (二七〇)

第五章 新帝國主義戦争の危機とプロレタリアートの任務……………二七三

- 一 新帝國主義戦争の諸要因 (二七三)
- 二 新帝國主義戦争の性質 (二七五)
- 三 新帝國主義戦争はいかに準備されつつあるか (二七八)
- 四 新帝國主義戦争に對する闘争 (二八〇)

第一章 マルクス主義者は

戦争をいかに理解するか

戦争論は、マルクス主義の、特に帝國主義時代のマルクス主義たるレーニン主義の、最も重要な構成成分の一つである。先づ私はマルクス主義者が戦争を理解するにいかなる態度を持つかといふことから此の稿を始めよう。一定の問題について其方法論的基礎を明かにすることは、問題自体を精確に理解する上に缺くことができない。

第一、マルクス主義者は各個の戦争又は各個の戦争時代を其歴史的性質に於て、その特殊的具體的性質に於て理解するのである。軍事上の利用、占領、攻撃、防禦、國境侵入等はあらゆる戦争に付き物であるが、現實の戦争は一定の特殊な歴史的な原因と條件と形態とを有してゐる。成吉思汗の戦争とナポレオンの戦争、ガリバルデイの戦争とフォツシユの戦争とは各々異つた歴史的性質を持つてゐる。プロレタリア國家の赤軍の戦争と帝國主義國家の軍隊の戦争とは各々異つた歴史性を表現する。「吾々はあらゆる戦争を、その特殊性に於て、歴史的に（即ちマルクスの辯

證唯物方法の立場から) 評價する必要を理解してゐる點に於て、ブルジョアの平和主義者や無政府主義者と異つてゐる。」「レーニン「社會主義と戦争」邦譯「戦争と社會主義」四一二頁)

第二、マルクス主義者は戦争一般を否定しない。戦争は悲惨であり、同胞殺害であり、人類文化の損害であり、また巨大な物質的損害であるといふ理由に依つてのみ、戦争を判断することはできない。戦争には人類の進歩に貢献するものがある。「あらゆる戦争には殘虐や獸行や苦惱が付き物であるに拘らず、然も進歩的だつた戦争が、言ひ換ふれば、有害且つ反動的な制度(専制主義と農奴制度の如き、またはトルコやロシアの野蠻な壓制政治の如き)の撤廢に力を籍することに依つて人類の發達に資した戦争が歴史上に存してゐる。」「レーニン、上掲書四一二頁)

第三、マルクス主義者は、經濟、政治、戦争の三つを、一つの鎖の異なる環として觀察する。戦争は帝王の野心、人種の國民的憎惡心、宗教的反感の如き原因から説明さるべきでない。その根本的原因是社會の物質的生產過程に求められねばならぬ。政治は經濟を集中的に表現したものである。そして戦争は政治の一形態に外ならない。ドイツの軍學者クラウゼウィッチの「戦争は他の(暴力的な)手段を以てせられたる、政治の繼續である」といふ言葉は、レーニンの屢々引用してゐるところである。例へば帝國主義の政治は金融資本の經濟の集中的表現であると共に、

帝國主義的平和と帝國主義的戦争との間には何等本質上の差異はない。

第四、マルクス主義者は戦争を階級闘争との因果的連關に於て理解する。戦争は徹底した階級的觀點から理解されねばならぬ。マルクス主義者は他のあらゆるブルジョア的小ブルジョアの戦争理論に反對して此見地を採る。いかなる階級が戦争を行つてゐるか重要である。戦争を階級の外に抽象して、單に、防禦戦争と攻撃戦争、正當若くは不正當の戦争、文明的又は野蠻的戦争といふ區別を立てることは、プロレタリアートを誤導するものであり、現に諸國の日和見主義者が世界戦争に際して行つたところである。戦争と階級闘争の關係が最も鮮明な最も高潮に達した姿は戦争と革命との連關である。

第五、マルクス主義者は進歩的階級が反動的階級に對して行ふ戦争のみを進歩的と解する。反動的階級相互の間の戦争又は反動的階級が進歩的階級に對する戦争は反動的戦争である。ヨウロツパに於てブルジョアジーが進歩的であつた時代、即ち中世的封建的殘物を除去する社會的役割を果した一七八九年乃至一八七一年の時代に於て、彼等の行ふた戦争は進歩的性質を有してゐた。だが今日、既に反動化したブルジョアジーの行ふ戦争は反動的戦争以外のものであり得ない。今日、進歩的戦争たり得るものは、第一にプロレタリアートのブルジョアジーに對する戦争、第二に

何? 何? 何?

反動的階級相互の間の戦争又は反動的階級が進歩的階級に對する戦争は反動的戦争である。ヨウロツパに於てブルジョアジーが進歩的であつた時代、即ち中世的封建的殘物を除去する社會的役割を果した一七八九年乃至一八七一年の時代に於て、彼等の行ふた戦争は進歩的性質を有してゐた。だが今日、既に反動化したブルジョアジーの行ふ戦争は反動的戦争以外のものであり得ない。今日、進歩的戦争たり得るものは、第一にプロレタリアートのブルジョアジーに對する戦争、第二に

に施民地民族の反帝國主義的民族戦争。第三にプロレタリア國家の資本主義國家に對する戦争である。

第六、マルクス主義者は攻撃戦争及び防禦戦争の區別をその歴史的性質に於てのみ評價する。何人が先に宣戦したか、何人が先に攻撃したかは問題でない。一七八九年から一八七一年までの時期は進歩的資本主義の時期であつて、この時期には封建主義、專制主義の抑壓と他國の束縛からの脱却とが當面の歴史的任務となつてゐたのであり、今日に於ては帝國主義の抑壓から脱却することが人類の進歩に貢獻するのである。かゝる基礎においてのみ、即ち抑壓に對する防禦の意味においてのみ、「母國防衛」は認容されるのであり、攻撃的態度すら認容されるのである。

第七、マルクス主義者は、戦争が社會的に蓄積された諸矛盾を急激に解除する一つの手段であるといふ點において、戦争の社會史的意義を認める。マルクスは「戦争は一國民を試練する。ミイラが大氣に曝されると、忽ち倒れる如くに、戦争は、もはや生活力を有せざるに至つた所のあらゆる社會制度に死の宣言を與へる」と言つた。(リヤザノフ編「一八五二年乃至六二年のマルクス及びエンゲルス全集」第二卷三六一頁) 戦争は、廣汎な労働大衆を其渦中に投げ入れること並に社會的矛盾を急激に解消することによつて、革命と類似して居り、且つ戦争と革命とは歴史の示してゐる

如く常にXXしてゐる。古代ギリシヤの辯證法哲學者ヘラクリットが「戦ひは萬物の母なり」と言つた言葉はこの意味において新しく復活する。マルクス主義者は戦争の埒外に立つことはできない。彼はあらゆる進歩的戦争に對してのみならず、一切の反動的戦争にすら參加して一定の積極的態度を執らねばならない。

Handwritten notes in Japanese, including the phrase "自國の敗北も一つの辯證法" (Even the defeat of one's own country is a dialectic).

第二章 マルクス及び

エンゲルスと戦争問題

一 マルクス政治理論と戦争

戦争は最も尖鋭化した政治的過程である。従つて科學的社會主義の建設者たるマルクス及びエンゲルスの政治理論において、戦争論は重要な地位を占めてゐる。マルクス及びエンゲルスは政治過程全般についての組織的系統的著作を残さなかつたのであり、戦争論についても同様であるが、しかし戦争に関するプロレタリア的認識の基準は明白に残されてゐる。だが最も發展したマルクス主義的戦争論はレーニンに於て見出される。だから本稿に於てはレーニンの戦争論を論述することに最も力を注がうと思ふ。

先づ注意しておくことがある。それは、マルクスもエンゲルスも——またレーニンも——決して頭腦から、ユートピヤ的に、その政治理論を作り出したのでなく、唯物辯證法の世界觀に立ちつゝ、諸階級の歴史的實踐、諸國プロレタリアートの大衆的運動の經驗を批判的に理解して、その政治的認識を確立したことである。マルクスの到達した最も重大な政治方式はプロレタリアートの××といふことであるが、それは一八四八年の西歐諸國のブルジョア革命から一八七一年のパリ・コムミュンに至る間のプロレタリアートの革命的經驗の批判的把握にほかならない。同様にマルクスの戦争論も彼の生活した時代、彼の當面した戦争に對する具體的研究を基礎として成り立つたものである。

マルクスとエンゲルスの活動した時代は資本主義の發展期であり、その時代における諸戦争は社會から封建的殘存物を除去する進歩的戦争の性質を帯びてゐた。マルクスは世界プロレタリアートの勝利といふ基礎的觀點に立ちつゝ、彼の當面した諸戦争の性質を解剖し之に對するプロレタリア的戦術を立てたのであるが、當時の戦争が帝國主義時代の戦争と異なるものである以上、彼のとつた具體的戦術はそのまゝに現代の戦争に適用さるべきでない。例へばマルクスは一八四八年に於て反動ロシアに對する攻撃戦争を主張したし、一八七〇——七一年にはフランスに對するドイツの戦争を以て防禦戦争として承認した。一九一四——一八年の世界戦争當時において、諸國の日和見主義者はマルクス及びエンゲルスの文献をそのまゝに利用し、自己の階級的裏切を塗

り隠さうとしたのであるが、かくの如きは絶対に不当な方法であり、吾々にとつては、マルクス及びエンゲルスの戦争論における方法的歴史哲學的方面を學びとるべき事が重要なのである。マルクス及びエンゲルスの戦争論を一々叙述することは本稿の目的でない。それが最も明瞭に表はれてゐる二つの時期について簡単に叙述しておくことにする。

二 新ライン新聞に於けるマルクスの戦争観

マルクス及びエンゲルスの最初の廣汎な政治的活動は一八四八年の西歐諸國のブルジョア革命を中心として展開した。彼等の據つた政治新聞「新ライン新聞」(一八四八年五月乃至一八四九年五月)の諸論文にはその戦争観が明白に展開されて居る。主要の主張は次の如し。

一、一八四八年の革命におけるマルクスの一般的主張は、全ヨーロッパの國際的な民主的な變革であり、舊き諸制度を除去して階級闘争の自由な發展を可能ならしめることに在つた。この故に彼はフランス、ドイツ、ポーランド、ハンガリーの自由、その解放、新しい自由なヨーロッパの形成を要求した。

二、新しいヨーロッパの形成を妨ぐるものは、戦争を以て破壊されねばならない。新ライン新聞はロシア及び汎斯拉ヴ主義を猛烈に攻撃し、革命的ドイツの反動的ロシアに對する攻撃戦争を主張した。ロシアは國際的反動の支柱である。ドイツに於て革命が勝利した曉に於て反動ロシアの攻撃を受けることを豫期しなければならぬ。ロシアに對する戦争なくしてドイツ内の勝利を確保することができない。マルクスは次の如く書いてゐる。

「ロシアに對する戦争のみが革命ドイツの戦争である。この戦争はドイツが過去の諸罪を洗ひ潔める戦争、ドイツをして勇氣あらしめる戦争、ドイツが自國の×政論者を克服し得る戦争、ドイツが長い重苦しい奴隷制度の鐵鎖を振り捨てた民族に應はしく、彼の息子たちの犠牲に依つて文明を購ひ、自己を外部より解放すると共に、是に依つて自らを内部より解放する戦争である。」(メーリング編「マルクス、エンゲルス遺稿集」第三卷一一四頁)

マルクスは革命的ドイツの反動的ロシアに對する戦争を主張したのでない。ロシアはヨーロッパにおける全反動の根源であるが故に、革命がドイツに勝利した曉、必然にそれと戦はねばならぬことを指摘したのである。マルクスはロシアの反動と同じく自國の反動をも熱烈に憎悪してゐた。彼が先づ革命ドイツの革命的戦争について語つてゐることを無視してはならない。

三、マルクスは、以上の意味における對露戦争は、人類進歩の歴史的觀點から見て、攻撃戦争

にあらずして、一の正當な防禦戦争であることを主張した。

四、「他國民を××せざるものは自己をも××することができない」といふ、民族問題に對する最も重要なマルクス主義的論綱も、ポーランド問題、ロシアに對する革命的戦争の問題と關聯して、この時期に明かにされた。一八四七年十一月二十九日に「フラターナルデモクラツツ」協會が一八三〇年のポーランド叛亂の記念祭を催した席上で、エンゲルスはその演説中で

「他民族の~~解放~~を續けてゐる一民族は自ら~~自由~~であることはできない。さればポーランドがドイツ人の××から××されることなしには、ドイツの××は不可能である。」と言つた。(リヤザノフ『ポーランド問題についてのマルクス及びエンゲルス』グルンベルヒ「アルヒーフ」一九一五年第一卷一七九頁)

マルクスも新ライン新聞に次の如く書いてゐる。

「諸民族を互にけしかけ、一民族を他民族の壓迫のために利用し、以て絶對的な支配權を確保しておかうといふのは、在來の權力所有者及び其外交官の技術であり仕事であつた。……ドイツの援助を以て他民族に對して行はれた蠻行の酬ひは、單に政府のみならず、ドイツ國民の大部分の重荷となつてゐる。……ドイツ人が自己自身の壓迫を振り捨てようとする今日、その對

外政策全體も變化せねばならない。然らざれば吾々は、吾々が他民族を縛りつけてゐる鐵鎖の中に、吾々自身の若い、やつと芽生へた自由をも縛りつけてしまふだらう。ドイツは、近隣の民族を自由にする程度に應じて自らを自由にするのだ。」(メーリング編「遺稿集」第三卷一一三頁)

「吾々がポーランドの抑壓を助けてゐる限り、吾々がポーランドの一部をドイツに織りつけてゐる限り、その限りに於て吾々はロシアとロシアの政策とに縛りつけられてゐるのであり、その限りに於ては吾々は吾國における家長的封建的絶對主義を根本的に打破する事はできない。

民主的ポーランドの設立は民主的ドイツ設立の第一條件である。」(上掲書一四九頁)

自由ポーランドの再生はドイツ革命の勝利の條件であり、當然にロシアに對する革命的戦争をよびおこすのであり、かゝる戦争は民主的ドイツの第一の任務である。マルクスはこの見地から「新ライン新聞」の數多くの論文にポーランド問題と、ロシアに對する戦争問題を取扱つてゐる。(戦争と民族問題とは不可離の關係を存するものであり、この問題はレーニンに依つて最も輝かしく理論的政治的に發展された。それは後に述ぶるであらう。)

五、われわれはマルクスが「新ライン新聞」において、反動ロシアに對する革命ドイツの戦争

といふ思想と共に、世界戦争の思想を、そのプロレタリア的認識を、提供してゐることを注意せねばならない。マルクスは絶対主義の巨柱たるロシアと共に、大規模なブルジョアの支配を展開してゐるイギリスに注意を向け、イギリスをも引き入れた世界戦争に於てのみ、社会革命の勝利することのできるのを認識した。マルクスは一八四九年の年頭に書いた論文のなかでイギリスを分析して次の如く言ふ。

「全ての民族を自己のプロレタリアに變化せしめてゐる國、自己の巨大な軍隊を以て全世界を締めつけてゐる國、自己の貨幣を以て一度にヨーロッパの君主政治復興の費用を支拂ふ國、自己自身の胎内に階級反對を最も激烈な最も無恥な形態にまで突き進めてゐる國——このイギリスといふ國は革命の大波の乗り上げる巨巖であり、新社會が既に母胎のなかに餓え疲れてゐる國である。イギリスは世界市場を支配してゐる。ヨーロッパ大陸の各國、全ヨーロッパにおける國民經濟的關係の變革は、イギリスを缺いては、一杯のコップの水のなかの嵐にすぎない。」
(メーリング編『遺稿集』第三卷二二一頁)

「各民族内部の産業及び商業の諸關係はその他民族に對する交通に依つて支配され、その世界市場に對する關係に依つて條件づけられる。然るにイギリスは世界市場を支配して居り、そし

てブルジョアがイギリスを支配してゐる。」(同上)

この故にヨーロッパにおける革命運動は、いかにしてもイギリスのブルジョアと衝突をイギリスの産業上の世界支配との衝突を、避けることができない。イギリスのブルジョアが繼續する限り、フランス其他の大陸諸國における二三の社會的改良も役に立たない。このイギリスの支配はたゞ世界戦争に於てのみ破壊され得る。そしてイギリスには革命力がないか？ 否、有る！ それはチャーチストである。マルクスは次の如く言ふ。

「舊きイギリスは世界戦争においてのみ粉碎されるであらう。この戦争はイギリスの組織せられた労働者黨たるチャーチスト黨にのみ、巨大な壓迫者に對する有効な崛起の條件を與へ得るのだ。チャーチストがイギリス政府の先頭に立つに至つたとき——この瞬間から社會革命はヨーロッパの王國から現實の王國に入る。だがイギリスを捲き込んだヨーロッパの戦争は、どのような戦争でも一の世界戦争となる。この戦争はイタリアでもカナダでも、東印度でもプロイセンでも、アフリカでもドナウでも戦はれるだらう。イギリスはナポレオン時代と同じく反革命軍の先頭に立つであらうが、しかも此戦争自體によつて革命運動の先頭に投げ入れられ、そして十八世紀の革命に對する彼の舊罪を贖ふであらう。」(同上二三二頁)

だが一八四九年に於て反革命が諸國において迅速に勝利を占むるに至り、マルクスの以上の豫見は當らなかつた。然し以上の引用文における輝かしき分析、大革命家としての戦術、彼の正しいプロレタリア的態度は今なほ生々した教訓を藏してゐる。マルクスは同じ「新ライン新聞」に掲載した「賃労働と資本」において、一八四八年革命の諸々の惨敗を總括して、一層明白に、プロレタリア的意義における世界戦争のみが革命の勝利を齎らすことに言及して、「あらゆる革命的勃發は、たとひ其目的が階級闘争からまだ遠くに離れてゐるように見えても、革命的労働階級が勝利を得るに至るまでは、必ず失敗に終るといふこと、また無産者革命と封建的反動革命とが一の世界戦争において武器を以て力を格するに至るまでは、あらゆる社會改良は一のユートピアたるに止まること。」(河上氏譯「賃労働と資本」岩波文庫版、二六頁)が證明されたと言つてゐる。

三 マルクスと普佛戦争

一八七〇—七一年の普佛戦争は、フランス大革命以來の資本主義發展期における進歩的戦争の最後のものである。これより以後、資本主義國家間の戦争は、資本家階級の反動化と對應して次第に反動的戦争となつた。

マルクスが此普佛戦争に對して採つた態度は彼の不朽の政治的著作「フランスの内亂」に現れて居り、また同時期においてマルクスがクーゲルマンやビースレーに與へた手紙や、マルクス、エンゲルス往復書簡集などに現れてゐる。またエンゲルスが一八八八年に書いた「新ドイツ帝國創立の際の暴力と經濟」(一八九六年に「ノイエ、ツァイト」に掲載)もわが科學的社會主義の創設者の普佛戦争に關する貴重な批判的文献である。

この戦争に對するマルクスの態度を簡単に述べれば次の如し。

一 マルクスは一八四八年に於けるよりもヨリ鮮明に世界プロレタリアートの全體的利益の見地からこの戦争を觀察した。彼はこの見地からドイツの勝利を希望した。若しフランスが勝つたならば、二つの點において致命的なことがおこる。第一にナポレオン三世が存続すれば、フランス國民は依然としてその反動政治の下に繋ぎとめられ、更に全ヨーロッパの自由主義運動は若芽のうち刈りとられるであらう。第二にナポレオン三世の勝利はドイツの民族的統一を一層ひきのばし、ドイツの労働運動、社會主義運動は民族的統一運動のために精力を削がれるであらう。たとへ反動的なビスマルクの劍に依るも、ドイツの統一は望ましいことである、是に依つてドイツのそして全ヨーロッパの、プロレタリア運動の偉大な發展條件が作り出される。かくてボナパ

ルト主義の支配するフランスの敗北のみが、世界プロレタリアートの利益から希望せられることである。

(二) マルクスはこの戦争を以てドイツ側の防禦戦争であると解した。ドイツの分裂はナポレオン三世の生存条件であり、従つて彼の敗北がなければ、ドイツは統一されることができず、全ヨーロッパのプロレタリア運動の発展も望むことができない。だがマルクスは、ナポレオン三世をしてドイツに對する戦争を容易ならしめた責任者としてプロシヤ王及びビスマルクの罪を數へ、彼等は「一瞬間たりとも、奴隸化されてゐるフランスに對し、一の自由なるドイツを、對立せしめようと夢みたことがあるか」と責め、戦争の責任は、フランスの最悪の特質——第二帝國のあらゆる奸策即ちその専制主義、見せかけの民主主義、政治上の詐謀、財政上の詐欺、出たための法螺、下等な手品——を自己のものとしてゐるプロシヤにも同様に存することを公然宣言した。

(三) マルクスはドイツにおける排外主義を極度に排撃した。彼はいふ、

「若しドイツの労働階級が現在の戦争からその嚴密な防禦的性質を失ひ、これをフランス國民に對する戦争に墮落せしむるならば、勝利も敗北も同様に救ひ難きものとなる。所謂解放戦争

後にドイツを襲ふたあらゆる不幸は再び激烈に復活するであらう。」(マルクス「フランスの内亂」ホストゲート版、八頁)

マルクスは當時の全ヨーロッパの反動の柱たるナポレオン三世の倒るゝことを望んだがフランス國民を敵とするものに絶対に反對した。この故に彼はセダンの戦勝後にもフランスへ向つて進撃するプロシヤを激烈に攻撃し、更にアルサス、ローレンの併合に對してドイツの反動主義者の罪を鳴らし、一八四八年以來の政治的自由のための闘争に優柔不斷、無能、臆病を極めたドイツの中流階級がビスマルクの煽動に乗ぜられてゐる憐れむべき奴隸的態度を罵倒した。併合反對といふ社會主義的原則は明瞭にこゝに喝破された。

(四) 戦争の進行中、フランスとドイツの労働者はお互に友誼に充ちた挨拶を交換した。第一インタナショナルの指導の下にある兩國労働者は、怒濤の如き排外主義の風潮のなかに在つて、「喇叭の響きも大砲の轟きも、勝利も敗北も、萬國の労働者の團結てふ吾々の共同の事業を妨ぐることはできない」と宣言した。ドイツの労働者はアルサス、ローレンの併合に反對し、フランスの共和政治の成立を祝福した。マルクスは異常の興奮を以て之等の宣言を引用してゐる。彼は次の如く言つて居る。

「フランス及びドイツの官憲が兄弟殺戮の戦争のなかに突進しつゝある時、労働者は互に平和と友愛とのメツセージを交換してゐる。過去の歴史に比類なき此の偉大な事實は輝かしき未來の豫想を開くものである。それは経済的困厄と政治的錯亂とを持つ古い社會に對抗して新しい社會の成立しつゝあることを證する。」（上掲書九頁）

（五）マルクスは一八四八年の當時と同じく、こゝにも反動的ロシアの危険を諸國の労働者に向つて警告した。開戦當初、マルクスはドイツの労働者に向つて、プロシヤがロシアの援助を請ふるに至る場合の危険を指摘した。戦争の進行につれて、ドイツが有利になつて行つた時、彼はプロシヤのフランスに對する暴行、即ちアルサス、ローレンの併合、賠償金の徴收其他がフランスを驅つてロシアと結ばしむる場合の危険を豫言した。それはロシアをして全ヨーロッパの審判者たる地位を與へるであらう。それは更に將來の慘憺たる大戦争の導火線となるであらう。マルクスの指摘した佛露同盟の反動的性質は後に至つて適中したのである。

（六）マルクスはナポレオン三世が敗戦してフランスが共和國となつたことを祝福した。しかし共和國は未だ堅固な基礎に立つて居らず、ドイツの軍隊はパリに迫り、イギリスのブルジョアジーはフランスの解體を希望してゐる。マルクスはこの危機に際して、全世界のプロレタリアー

トが積極的に此事件のなかに入り、徹底的な國際主義の見地から、フランス労働者を助くることを要求してゐる、第二檄文は結んで言ふ。

「國際労働者協會のあらゆる國々の支部は、労働階級を活潑な運動に呼びさますべきである。彼等がその義務を忘れたならば、彼等が消極的であるならば、今日の怖るべき戦争は單に將來の一層怖るべき國際的戦争の前驅たるに過ぎぬであらう。そして各國に於て、労働者は軍隊と土地と資本の所有者のために新しい敗北を被るであらう。」（上掲書一五頁）

七、マルクスは最初フランス労働者が早急に一揆をおこさないように警告してゐた。だが、その一度、勃發するや、天をも揺がす大衆の創意（クーゲルマンへの手紙）を狂喜して迎へ、その×××経験を熱情を以て學びとり、不朽の書「フランスの内亂」を編んだ。彼は同書に於てフランス労働者の英雄的行動を叙すると共に、その経験から、舊社會より生長する新社會の核心をとり出して、同書中の特に輝かしい第三章を書いた。彼はそこでプロレタリア國家の軍備問題に觸れ、常備軍が廢止されて労働者が武装するに至ることを述べてゐる。それについては第四章で觸れるであらう。

pari commune.

第二章 レーニンの戦争論

一 レーニン主義の全體系に於ける戦争論の地位

レーニン主義は帝國主義の段階におけるマルクス主義である。マルクスは商業資本、工業資本、の時代を知つてゐたが、金融資本の時代を知らなかつた。またマルクスのブルジョア社會に對する批判は異常の抽象力を以てせられて居るから實踐的結論を導き出すには幾多の具體的な中間環が必要であつた。帝國主義時代に活動することのできたレーニンは此時代の特質を尖鋭に分析すると共に、幾多の中間環を發見して、マルクスの理論を實踐的問題と結合した。彼はマルクス主義の世界觀、方法論、認識成果を維持發展し且つこれをプロレタリアートの戰略及び戰術上の具體的問題と結び付けた。

帝國主義は資本主義の最終段階であり同時に社會が新しい歴史的段階へ飛躍するための前行段階である。この客觀的現實の變化に對應して、マルクス主義はレーニン主義へ發展せざるを得なかつた。

帝國主義の諸矛盾は終に一九一四——一八年の大規模な世界戦争となつて爆發した。全世界の勞働大衆の運命に激烈な影響を及ぼしたこの戦争。全人類の社會的進化に莫大な影響を及ぼしたこの戦争、これこそマルクス主義者が根柢から分析せねばならぬ具體的問題であり、眞にプロレタリア的な戰術をもつて解決せねばならぬ生きた問題であつた。世界戦争はマルクス主義者に苛酷な無條件的な試練を課した。從來、修正主義を唱へてゐた明白な日和見主義者は言ふまでもなく、正統マルクス主義者を以て任じてゐたカウツキイ一派ですら、種々の詭辯の下に世界戦争を承認してブルジョアジの陣營に流れ入つた。カウツキイは「インタナショナルは平和時代の階級闘争の機關だ」といふ詭辯をすら弄した。社會主義者のかゝる類勢に抗して飽くまでインタナショナルの旗を守つた少數の革命家が各國ともにあつたが、徹底したマルクス主義に立つて世界戦争の本質を批判し此戦争に對するプロレタリアートの任務を明かにした第一人者はレーニンにほかならなかつた。この戦争に對するレーニンの批判と戰術はカール・リープクネヒトよりもローザ・ルクセンブルグよりも勝れてゐる。

さきに述べた如くマルクス及びエンゲルスの政治理論は單なるユートピアでなく、プロレタリ

アートの大衆的運動の批判的綜合であつたが、それと同じく、レーニンの戦争論も一九一七—一八年の大波瀾のなから生れ出たものであり、しかも同戦争についてだけでなく、帝國主義戦争そのものの本質を解剖し、何故にこの殺人戦争が不可避であるかといふ具體的内容を説明するに、深い帝國主義理論を以てした。彼は帝國主義戦争の不可避性を證明したのみならず、それとプロレタリアートの勝利との必然的連關を明かにした。

彼は一九二二年に次の如く言つてゐる。

「戦争の危険を打破する問題についての最大困難は、恰も此問題が一の單純な、明瞭な、比較的に輕易な問題であるかの如く考ふる偏見を打破するに在る。」(邦譯「内外政策」所收「ハーグにおけるわが代表の任務」三二九頁)

戦争問題は、實は帝國主義時代のあらゆる政治的過程に直接間接の關係を持つてゐる問題なのである。したがつて、それは帝國主義時代のマルクス主義たるレーニン主義の重要な構成成分であると共に、他の諸構成成分と深く結びついてゐる。レーニンは、帝國主義戦争とプロレタリア××との連關、戦争と民族問題、戦争と第二インタナショナルの崩壞、プロレタリアート及び農民の政治的××と戦争との問題、戦争と民主的平和の問題、戦争とプロレタリア國家との關係等々、

プロレタリアートの運命と切實な關係を存するところの、帝國主義時代における幾多の具體的問題を、戦争と關聯して取扱うてゐる。更に戦争に對する戰術問題については、單に資本主義國家のプロレタリアートの任務を究明したばかりでなく、植民地及び半植民地の被壓迫民族の任務をも明かにし、更に政權を握るに至つたプロレタリアートの國家の戦争に對する任務をも論究してゐる。従つてレーニンの戦争論は廣汎であり複雑である。

ジノヴィエフは、レーニンの戦争に關する教理は次の如く總括し得ると言つてゐる。

(ジノヴィエフ「レーニン主義と戦争の克服」インテルナチオナール、プレッセ、コレスボンデンツ」一九二七年二月一日、二五一頁)

1 無政府主義者(ギヨーム其他)メンゼヴィキ(プレハノフ、グズイット、カウツキイ、其他第二インタナショナルの指導者)ナロドニキ(チエルノフ其他)に對抗して、マルクス、エンゲルスの戦争に關する眞實の見解を復活したこと。

2 誰が先に宣戦したかといふだけで防禦戦争及び攻撃戦争の分類をすることはできない、各個の戦争各個の戦争時期は個別的に其歴史的意義を明かにされねばならぬのを明かにしたこと。

3 各個の對外戦争は交戦諸國內部の階級力の關係を表はしてゐること。

4 一九一四—一八年の戦争を帝國主義戦争として具體的に評價したこと。

- 5 一九一四——一八年の帝國主義的世界戦争と、資本主義最後の段階としての帝國主義との關係を明かにしたこと。
- 6 眼前の戦争の歴史的性質を無視してたゞ一般に「XX防衛」といふスローガンをかざすことはマルクス主義からの退却であり、いかなる階級が戦争を行つたか、所與の戦争はいかなる客観的性質を持つか、問題であるのを明かにしたこと。
- 7 帝國主義戦争における「XXXX」は社會主義に對する直接の裏切であり、ブルジョアジーの陣營への移行であることを明かにしたこと。
- 8 XXX階級は反動的戦争において自國政府のXXXXXXXXXX。
- 9 帝國主義時代は反動的な帝國主義戦争の時代であるが、それは民族的解放戦争即ちX壓迫民族の正当な防禦戦争を否定するものでないこと。
- 10 従つて完全な分離の權利を認める所の、各XXの權利といふスローガンが是認されること。
- 11 新しい帝國主義戦争が不可避的であること。
- 12 超帝國主義、平和的帝國主義（カウツキー）の理論が反動であること。
- 13 資本主義が存続する限り、軍備縮少の標語は反動的ユートピアであり、單純な暴力のみを以て解決せられることは今猶ほ世界に餘りに多いと言はればならぬこと。

14 帝國主義戦争はXXXXXXXXXされればならぬこと。
 15 それは更に世界プロレタリアートXXXXXXXXXX。

二 近代の戦争の歴史性と體型

マルクス主義者は階級的觀點から戦争を考察する。いかなる階級が戦争を行つてゐるか、その階級は進歩的階級であるか否か、に依つて、進歩的戦争と反動的戦争との分類をする。進歩的階級が行ふ進歩的戦争は、社會から前代的要素を取り除くところの、一の急激な手段である。この點から近代の戦争を観察すれば、フランス革命よりパリ・コムミュンまでの戦争は、その主動者はブルジョアジーであつたが、この時期においてブルジョアジーが進歩的階級であつたことと照應して、その戦争は社會から封建的殘物をとり除く進歩的戦争であり、したがつて社會主義者はこの戦争を一の防禦戦争としてそれを支持したのである。レーニンが一九一五年に書いた「社會主義と戦争」は先づこの點を明かにして次の如く言つてゐる。

「フランス革命は人類の歴史に新しい時期を開いた。それからパリ・コムミュンまで（一七八九——一八七一年）は、封建的專制的並に外國の拘束の撤廢を主要内容とせるブルジョアの進

歩的な民族解放戦争が特殊の戦争體型を成してゐた。それは進歩的戦争であつた。それがためすべての革命的民々主義者も、封建主義、専制主義、並に民族的抑壓の最も危険なる掩護物を取り除いたり弱めたりすることに努めた側（即ちブルジョアジー）に、同感を以て附いたのである。フランスの革命戦争の中には、フランス人による外國の掠奪および占領といふ要素も含まれてはゐるが、しかし全ヨーロッパの封建主義及び専制主義の基礎を震動させた此の戦争の原則的歴史的意義が、そのために變つたわけでない。普佛戦争ではドイツはフランスから掠奪したが、しかし幾百萬のドイツ人を、二人の専制君主即ちロシアのツァールとナポレオン三世とによる封建的分散と抑壓とから脱却させたといふ、この戦争の根本的な歴史的性質がそのために變つたわけでない。（邦譯「戦争と社會主義」四二二—二三頁）

戦争は交戦諸國の支配者階級が戦争前までは行ふてゐた政策の、強力手段を以てする繼續である。戦争と平和とは何等本質上の差異がなく、兩者は同一の基本物の異なる發現形態である。一八七〇—七一年の戦争は、ドイツの解放および統一といふ、ブルジョアの進歩的な數十年間の政策の繼續であり、このために反動的なナポレオン三世が倒されねばならなかつた。封建主義、専制主義の外國支配が倒されるまでは、社會主義のためにするプロレタリア的闘争は發展するこ

とができなかつた。この故に當年の社會主義者が、ブルジョアジーの進歩的政治一般を支持し、且其進歩的戦争を支持したのは正しかつたのである。

資本主義は國民國家を形成せずしては封建主義に打ち勝つことができなかつた。だがパリ・コムミュン以後、ブルジョアジーが次第に帝國主義への道をたどり始むるに至つて舊來の國民國家は資本主義の發展にとつて狭過ぎるようになった。そして他民族の抑壓が帝國主義ブルジョアジーの生存原理となつた。これと共に彼等の行ふ戦争は進歩的戦争から反動的戦争に代つた。レーニンは次の如く言つてゐる。

「資本主義は封建主義に對する闘争の時代には諸國民の解放者だつたのが、帝國主義時代には諸國民の最大の抑壓者となつた。以前には進歩的だつたのが、今は保守的である。資本主義が生産力を發達させた結果、人類は社會主義への推移か、それとも植民地、獨占、特權、あらゆる國民的抑壓を以てする資本主義の人爲的維持のための、大強國の數年間の戦争か、そのいづれかに當面してゐる。」（同上四一—四五頁）

三 帝國主義戦争の不可避性

資本主義の下における戦争の必然性についてレーニンは無比の明確さを以て次の如く言つてゐる。

「資本主義とは生産手段の私有並に生産の無秩序を意味する。こういう基礎の上に収入の「公平」なる分配を説教することはブルードン主義であり、小ブルジョアのおよび俗物馬鹿話である。権力に應じて分配する以外に方法はあり得ない。そして権力関係は経済的發展の進行と共に變化する。一八七一年以來ドイツはイギリスやフランスよりも三倍も四倍も急速に力を加へた。そして日本は——ロシアよりも十倍も急速に。資本主義國の實力を吟味するには、戦争以外に方法がないし、またあり得ない。戦争は私有制度といふ基礎に反抗する矛盾でなく、この基礎の直接、且つ不可避的な結果である。資本主義の下においては、個々の経済および個々の國家的發展が、平均的に増進することは不可能である、資本主義の下においては、時々破壊される平衡を再建するに、産業における恐慌と政治における戦争以外に方法がない。」（「ヨウロツパ聯邦の標語について」邦譯「戦争と社會主義」一七二—七三頁）

帝國主義戦争の不可避性は帝國主義の體系自身のなかに根ざしてゐる。資本主義はその集積の途上において全産業部門をカルテル化、シンチケート化して、いわゆる獨占資本主義に發展し

た。地球の殆んど全體は、或は植民地、勢力範圍において、或は財政的搾取の無數の糸を以て、かゝる獨占資本家の間に分配されてゐる。だが、各國における獨占資本主義の急激な發展、各國の「國民的」資本主義的「國際化」にも拘らず、全體としての世界資本主義のなかには一の無政府状態が支配してゐる。「帝國主義は自由を欲せずして支配を欲する。」（レーニン）

他方に於て、われわれは帝國主義國家の特質を注意せねばならぬ。「政治は經濟の集中的表現である」といふことは、帝國主義時代に於て特に強烈な意義を帯びてきたのであつて、政府はブルジョアジーの執行委員會たる性質を強め、國家權力が各國の資本家階級の經濟政策の主要な直接な武器となつてゐる。帝國主義國家においては、自由主義的資本主義の時代に發展した人民代表の思想を表現する議會が脆弱のものとなり、全行政機構はブルジョアジーの執行機關として活動し、内閣は直ちに金融貴族の私的な會議と連絡してゐる。國家の經濟政策は大ブルジョアジーのために、その意思によりて、決定されてゐる。帝國主義時代において政治が經濟の特に強烈な表現物となつたことは、たとへば、世界の經濟的分割が同時に政治的分割を伴はねばならぬことや、資本の輸出が直に其掩護物としての軍事的政治的組織を持たねばならぬことや、大ブルジョアジーのための關稅政策や國債が一の政治であること等をみても分る。

帝國主義時代において世界市場においていはゆる自由競争が消滅した。世界の分割、勢力範圍の設定、關稅政策等々、資本の自由な運動を不可能ならしめ、自由競争のメカニズムに依つて世界經濟の平衡を確保することを不可能ならしめた。資本の世界的競争は武装した力の競争に依る外ないことになる。

しかるに資本主義の下において個々の經濟及び國家的發展は不平均的である。この不平均的發展の法則は地球上における經濟的平衡を破壊する。衰滅するものは恢復せんとし、新興するものは一層強まらうとする。世界の新分割が必然となる。

世界の新分割を決定するものは武力だけである。今や武力のみが解決者である。慘憺たる關稅戦争に歸結を與へる者も、原料市場、資本及び商品の市場の争奪を決定する者も、何國のブルジョアジーが植民地奴隷の餘剩勞働の搾取者たるかを決定する者も、經濟的方法ではなくて、結局は武装の威力又は戦争の脅威である。

戦争は、戦前の政策の強力手段を以てせられたる繼續にほかならない。帝國主義の政治の本質は世界再分割のための争闘である。この政治は、破壊されたる平衡を恢復するために戦争となつて爆發する。戦争なくして帝國主義を考ふることはできない。

以上の如くして、帝國主義の政治の下に在つて、帝國主義戦争の爆發することは不可避である。それは帝國主義そのものの繼續する限りにおいて不可避である。人類は一九一四——一八年において未曾有の慘虐な戦争を経験した。だが帝國主義戦争の危機は、この世界戦争に依つて取り去られずして、却て諸々の新しい契機に依つて深められて居り、新しい帝國主義戦争の危機が刻々に近づいてゐる。

四 帝國主義戦争の反動性

帝國主義戦争は、前代のブルジョアジーが中世的殘存物を清掃するために行つた戦争の如き進歩的戦争ではない。さきごろの世界戦争において、諸國のブルジョアジーは母國、自由、文化のために戦ふのだと號し、なほ彼等の戦争に昔日の如きブルジョア進歩的意義があるかのように見せかけたが、そして多くの日和見主義者がこれに合唱したのである、がそれは勞働大衆を欺くための詭辯にすぎなかつた。世界の再分割のための戦争は、奴隷所有者お互の戦争に外ならない。百人の奴隷の所有者が二百人の奴隷所有者と格闘する場合、前者が正當であつて後者が横暴であるといふことはできない。年若き盜賊と年老いたる盜賊との戦ひは、畢竟、盜賊の間の戦ひである。

る。「かゝる場合に××擁護または防禦戦争の概念を適用することは、明かに歴史的には虚偽であり、実際的には奴隷所有者の利益のために國民を欺くことである。」(レーニン)帝國主義時代に於て、ブルジョアジーはもはや反動的階級に對抗する進歩的階級ではなく、却て進歩的階級に對抗するところの反動的階級である。資本主義は今や諸民族の解放者ではなくて壓迫者であり、プロレタリアート及び貧農に對する壓迫者である。彼等の政治は反動であり、その戦争はしたがつて反動的戦争である。

レーニンは一九一四——一八年の戦争に對して、

「國土の強奪、異民族の拘束、その富の掠奪、ロシア、ドイツ、イギリスの國內的危機から労働大衆の注意を他に轉じさせること、労働大衆を分裂させ國民主義的に欺瞞すること、プロレタリア×××の運動を弱める目的で其前衛を××すること——これが現在の戦争の唯一の實際的内容であり、意義であり、目的である。」(「ロシア社会民主労働者党中央委員会宣言」、一九一四年、十一月一日發表、邦譯「戦争と社会主義」四七七頁)

「この戦争は三様の意味で、奴隷制度確保のための奴隷所有者の戦争であることを指摘しなければならぬ。第一に、植民地の「公平」なる分割とそのヨリ一層の「連帶的」搾取とによつて、

奴隷制度を確保するための戦争である。第二に、大強國そのもの、國內における諸民族の抑壓を強固にするための戦争である。第三に、賃銀労働の確保並に擴張を目的とする戦争である。

けだし、戦争はプロレタリアートを分裂させ抑へつけ、一方、資本家は富を増殖し、國民的迷信を鼓吹し、すべての國々、最も「自由」な國々に於てすら反動派を支持してゐるからである。」

(邦譯「戦争と社会主義」四一九頁)

といふ極印を捺してゐる。だが、かゝる性質は新しき帝國主義戦争も同じく帯びるであらうところの性質なのである。

五 民族戦争

資本主義はその發展の途上において民族國家を形成せざるを得なかつた。これを實現するためには封建的諸勢力との衝突、その除去が必要であつた。このための民族戦争が進歩的戦争であつたことは前述した。その意味の民族戦争は一八七〇——七一年の普佛戦争が最後であつた。それ以後において、ブルジョアジーの行ふ戦争は所有奴隷の多寡を争ふための戦争であつたのである。これが前代の戦争と現代のそれとの根本的差異である。

進歩的戦争の時代におけるブルジョアジーは封建主義を打破して社会的進歩の役割を果たしたが、帝國主義時代に至つては、ブルジョアジーは、封建的殘存物の、また古代的殘存物すらの残つてゐるあらゆる場所に於て、それと結合し、その反動的なる封建的、又古代的搾取方法を利用して被搾取者の解放運動を妨げてゐる。

だが、この故を以て、帝國主義時代に民族戦争なしといふ見解を立てることも誤謬である。レーニンと言ふ、

「植民地及び半植民地の民族戦争は帝國主義の時期において、有りそうであるばかりでなく、むしろ不可避である。」（「ユニウス、プロシユールについて」邦譯「戦争と社會主義」三四六頁）

ローザ・ルクセンブルグが世界戦争の渦中においてユニウスといふ匿名の下に書いた『社會民主主義の危機』はこの戦争の帝國主義的性質を強烈に指摘したものであるが、帝國主義時代に民族戦争なしといふ謬見に陥つてゐた。レーニンは暖い同志の情を以て其過失を指摘してゐる。例へばリフ族のフランス帝國主義に對する反抗や、支那の對列強の闘争は帝國主義の鐵鎖を破らんとするものであり、世界の全労働大衆を資本の重壓から解放しようとする闘争の一部であり、プロレタリアートは其階級的立場から民族解放戦争を援助せねばならない。かかる民族戦争は一の

歴史的必然であり、一の進歩的戦争なのである。如何なる戦争も別個の手段を以てするところの政策の繼續である。植民地の民族解放政策の繼續として、帝國主義に對する民族戦争は不可避となるのである。レーニンはいふ、

「帝國主義なる概念を千偏一律に適用して、この概念から民族戦争の「不可能」を引き出すが如きは、如何にも分らずやである。何等かの帝國主義諸國に對する或る聯盟——たとへばペルシャ、インド、支那がそれに加つてゐるとして——の民族解放戦争は全然可能且つ蓋然的である。」（同上三四七頁）

單に植民地及び半植民地の民族戦争が可能であるばかりでない。帝國主義時代において民族戦争が帝國主義戦争に轉化することができるし、その逆の場合もおこり得る。

「マルクス主義辯證法の原則は、自然及び歴史におけるすべてのものが制約され、可動なものであるといふこと、或る條件の下に自己の反對物に轉化し得ない現象は只の一つもないといふことであるの言ふまでもない。民族戦争は帝國主義戦争に轉化し得る、そして其逆の場合もある。一例をあぐれば、フランス大革命の戦争は民族戦争として始まつたし、また民族戦争であつた。この戦争は、反革命的王國の聯合に對する大革命の擁護といふ進歩的戦争であつた。

しかし、ナポレオンが古くから成立してゐるところの活動力ある一連のヨウロッパ民族大國家を征服することに依つて、大フランス帝國を創立したときには、フランスの民族戦争から帝國主義戦争となり、この戦争はまた今度は再びナポレオンの帝國主義に對する民族解放戦争を誘致したのである。(同上三四四頁)

同時に帝國主義戦争と民族戦争との區別を、一は他に轉化し得るといふ論據で抹消しようとすることは詭辯論となる。吾々は個々の契機を、その契機の發展において、具體的に解剖することをも以て詭辯論と戦ふ辯證家たらねばならぬ。

一九一四——一八年の世界戦争において、排外社會主義者は自國側からの戦争を民族戦争と規定し、過去の進歩的だつた民族戦争と同視せしむることに依つて労働大衆を欺瞞せんとしたのであるが、ローザ・ルクセンブルグは其反對に、帝國主義時代における民族戦争一般を否認したのである。レーニンは此時代に於ける植民地及び半植民地の民族戦争の進歩性を評價し且つヨウロッパの資本主義國家においてすら帝國主義戦争が民族戦争に轉化し得る事を證明したのである。

既述の如く、今日の帝國主義ブルジョアジーは封建主義と戦はずして、あらゆる場所に封建主義の殘存物をさがし、これと結合してゐる。いかなる國家も農村におけるブルジョア革命即ち

はゆる農業革命をまじめに行ふものはない。帝國主義は農業國における農民大衆を擯取するためあらゆる封建的方法を確保しようとしてゐる。いかなる帝國主義者も民族解放運動を援助してゐるものはない。かうして民族戦争は帝國主義の支配と衝突せざるを得ないものであり、強烈な進歩性を有するものなのである。

六 日和見主義と排外社會主義

一九一四——一八年の世界戦争の經過中において、社會主義運動は國際的に三つの潮流に分裂した。

第一の潮流は排外社會主義者であつて、口で社會主義を唱へつつ、しかも自國の帝國主義政府の戦争を承認し他民族に對する壓迫と侵略とを承認せる一派であり、事實上、ブルジョアジーの陣營に移行したものである。諸國における官許社會黨の大多數の代表者がそれに屬した。ドイツのシャイデマン一派、イギリスのハインドマン一派、ロシアのプレハノフ一派、フランスのルノーデル一派はそれである。

第二は中央派社會主義者であつて、排外社會主義と眞の國際主義との中間を動搖するものであ

つた。彼等は自らマルクス主義者と唱へ、自ら平和を欲し、政府に對してあらゆる平和手段を強要すると稱する。彼等は「統一」を欲し、分裂に反對する。しかし事實上、彼等は排外社會主義者との平和を欲してゐるにすぎない。ドイツにおけるカウツキー、フランスのロンゲール、イギリスのマクドナルド、アメリカのヒルキツト、ロシアのマルトフ等は之に屬する。

第三は眞の國際主義者であつて、チムメルワルド左翼は最もよく之を表現して居り、排外社會主義者とも中央派とも絶対に分裂してゐる。彼等は徹底的に帝國主義戦争に反對し、自國のそれをも含めた全資本家階級に闘争を向けることを要求する。ドイツにおけるリーブクネヒト、ルクセンブルグ、ロシアのレーニン、フランスのロリオ、イギリスのマクレアン等々の少數者がこれに屬する。

排外社會主義者（日和見主義者）とは、これを歴史的經濟的に觀察すれば、毫も特別の社會層でなくて、一八七一年乃至一九一四年の資本主義の平和的發展期に生じた過渡的な社會層なのである。レーニンはその社會的根源を指摘して次の如く言ふ、

「すべての強大國のブルジョアジーは世界の分配及び搾取のため、諸民族の抑壓のために戦争を行ふ。労働官僚、労働貴族、並に小ブルジョアの隨伴者の小さな國には、ブルジョアジーの

大利潤の断片がこぼれ落ちてくることが可能である。排外社會主義と日和見主義との階級的基礎は同一のものである。即ち労働大衆に對する、少數の特權的労働者團と「自國」のブルジョアジーとの同盟、ブルジョアジーから搾取されてゐる階級に對するブルジョアジーの従僕とブルジョアジーとの同盟がそれである。」（日和見主義と第二インターナショナルの崩壊」邦譯「戦争と社會主義」三七四頁）

資本主義の發展過程に成立した労働貴族の層こそ日和見主義の階級的根源である。レーニンは日和見主義の特質を描いて次の如く言ふ、

「日和見主義とは少數の労働者の一時的な利益のために大衆の根本的な利益を犠牲にすることを意味する。言ひ換ふれば、それは労働者の一部がブルジョアジーと同盟して、プロレタリアートの大衆に對抗することを謂ふのである。戦争はかかる同盟を特に明白な、強制的なものたらしめた。」（第二インターナショナルの崩壊」獨譯「流に抗して」一五七頁）

排外社會主義は日和見主義の最も完成した形に外ならない。兩者の階級的政治的内容は同一である。レーニンは次の如く言ふ、

「日和見主義と排外社會主義との政治的内容は同一である。即ち階級協働、ブルジョアの合法

主義に對する無分別なる尊重、プロレタリアートに對する不信とブルジョアジーに對する信頼とがそれである。排外社會主義はイギリスの自由主義勞働者政策、ミルラン主義並にベルンシユタイン主義の直接の延長であり完成である。

「排外社會主義は完成されたる日、和見主義である。それはブルジョアジー及び參謀本部と公然たる、往々習慣的な同盟を結ぶ程度にまで熟し切つてゐる。排外社會主義に大なる権力と、合法的に印刷された言葉の獨占權と、大衆に對する欺瞞の獨占權とを與へてゐるものは、とりもなほさずこの同盟なのである。今日、なほ日見主義をわが黨の内部における一現象と見なすのは笑ふべきである。排外社會主義者との共同一致は、他國民を搾取する自國ブルジョアジーとの協同一致であり、國際的プロレタリアートを分裂させることである。」（上掲論文、邦譯「戦争と社會主義」三七五—七七頁）

日見主義といかに戦ふべきか？ 斷然たる分離あるのみである。日見主義も一定の歴史的性質を有してゐる。それは資本主義の平和的發展期に生成したものであるが、プロレタリアートの大衆組織を擴大したことにおいて一定の功績を有してゐる。しかし世界戦争は日見主義のプロレタリアートへの奉仕を露骨にし、激しくし、直接的ならしめた。もはやそれは、前代における

が如き組織的任務すら果たし得ない。世界戦争は、世界のプロレタリアートをして、そのあらゆる組織から日見主義を放逐し、日見主義的團體を革命的團體に轉化せしむることを可能且つ必然ならしめた。今や日見主義との斷然たる分離は歴史的に不可避になつてきたのだ、とレーニンは言ふのである。

排外社會主義の重要な武器の一つは民族主義イデオロギーである。このイデオロギーは、資本主義の發展期において一定の歴史的役割を果した。資本主義は統一的な民族的國家を形成せずしては、舊き封建的殘存物を除去することができなかつた。かゝる根據の上に成立した民族主義的イデオロギーは中世紀的政治制度を破壊するための一武器であつた。しかし資本主義が帝國主義に發展するにつれて、民族主義イデオロギーも進歩性を失ひ、帝國主義的侵略戦争、他民族の壓迫と搾取の思想的武器となつた。排外社會主義はこのブルジョア的排外主義の民族主義イデオロギーをとり入れて、ブルジョアジーの帝國主義戦争を承認し、自國の搾取者に對するプロレタリア的階級闘争を拋棄した。レーニンは之を批判して次の如く言ふ。

「一七八九—一八七一年時代の實際の民族戦争の原因は民族的大衆運動、專制主義及び封建主義との闘争、資本主義發達の先要條件たる民族的抑壓と民族國家の形成といふ長い過程であ

つた。この時期に形成された民族主義イデオロギーは小ブルジョア大衆の間と、一部分はまたプロレタリアートの間に深い痕跡を残した。本質上、帝國主義的な現在の時期に於てブルジョアジーの詭辯家とそれに従ふ社會主義の裏切者とは、そういふ民族主義的イデオロギーを足場としてプロレタリアートを分裂させ、その階級的任務たるブルジョアジーとの革命的闘争から他に轉じさせようとかゝつてゐる。〔ロシア社會民主労働者黨國外團體ベルン會議決議文〕一九一五年三月、邦譯「戦争と社會主義」四九四頁〕

X X X X X

最近、わが國において、「帝國主義戦争の必然性は消滅した」「わが國の行ふ戦争は支那の民族戦争と同一性質である」といふ、極めて珍奇な論據を以て日本ブルジョアジーの帝國主義戦争の準備を排外社會主義的に理論づけようとする一人が現れた。それは日本農民黨の指導者高橋龜吉氏である。彼は日本のブルジョアジーの對外戦争を以て一の民族戦争であり防禦戦争であると見る點に於て、諸國の排外社會主義者と全く根本的に同一である。だが彼の指導する日本農民黨が富農の利益を中心とする黨であつて労働者及び貧農を却て敵としてゐる一のブルジョアの黨であることが相應に大衆の前にも判明して居り、且つ彼の理論が日和見主義の完成した排外社會主義といふよりも、むしろ本來のブルジョア排外主義の一變種であつたこと、からして、彼の理論は廣汎な大衆の間に大なる影響を持つことができなかった。吾々のむしろ闘争せねばならない排外社會主義は、吾國における日和見主義的黨及び流派の間から自生し來るそれであらう。

七 プロレタリア國家と戦争

プロレタリア國家とブルジョア國家との間の戦争は可能であるばかりでなく、また一の必然である。世界戦争後、國際政局にロシアの社會主義ソヴェート共和國の介在するに至つたことは、ブルジョア國家間の均衡關係のみに依つて成立してゐた在來の政局に全く異なる契機を作り出してゐるのであるが、世界の資本主義國家は幾度かロシアに對する公然又は陰然の干涉政策を試み最近においてはイギリスを先頭とする反ソヴェート聯盟が成立し、ロシアに對する戦争の機会をねらつてゐる。資本主義國家が對露戦争を敢へてしないのであるのは、自國の労働者及び貧農の反對を恐るゝが故に外ならない。然し異種の階級が支配者であるところの國家間に永續的な平和が繼續してゆくことは根本的には不可能であると見ねばならない。

プロレタリア國家は戦争に對していかなる立場をとるべきであるか？ 嘗つてエンゲルスは一八四八年に書いた『共產主義の諸原則』のなかで、一國に社會主義××の成立することは不可能であつて、數個の大國家に同時におこらねば永續することができないと書いたことが有る。しかし帝國主義はこの事情を變化させた。帝國主義の段階における經濟的及び國家的發展の不平均性は、一國のみの社會主義××をすら可能ならしめる。ロシヤにおけるプロレタリア國家の成立はレーニンの説明したこの法則の妥當性を證明した。レーニンは一九一五年八月に書いた『ヨウロツパ聯邦の標語について』といふ、トロツキイに對する論駁文において「一國における社會主義建設」の可能であることを論じ、更に進んで、かゝる國家と戦争に關する任務を明かにしてゐる。

「經濟的的發展の不平均性は資本主義の拒む能はざる法則である。このことから次の結論が生ずる。即ち社會主義の勝利は先づ少數の若くはたゞ一個の國土に於てすら可能である。此國の勝利せるプロレタリアートは、資本家を×××、社會主義生産を組織したる後に於ては、他の資本主義國家に向つて起ち、必要の際には××××××搾取階級及びその國に向つて××すべきである。……社會主義の下における諸民族の自由なる聯合は、社會主義共和國の他國家に對する多少とも長びける頑強な闘争なくしては不可能である」(獨譯「流れに抗して」一二六頁)

レーニンは、以上の如くして、勝利せる一國のプロレタリアートは他國のプロレタリアートの資本家階級に對する闘争を××××××××、戦争をも辭すべきでないといふ思想を既にロシヤ革命の三年前に發表してゐる。しかし是れは原則的立場であつて、現實の問題としては、即ち社會主義を建設しつゝある現ロシヤの問題としては、この社會主義的建設を破壊しようとするブルジョア國家の挑戦にいかにして對抗するかといふことの方が遙かに重大である。ブルジョア諸國家が今日までロシヤに宣戦しないのは三つの理由に基いてゐる。(第一)に諸國のブルジョア達は自國のプロレタリアート及び貧農の反對を怖れてロシヤに宣戦しないである。(第二)に帝國主義の内部的矛盾、即ちヨウロツパにおける帝國主義國家間の抗争、アメリカ及びヨウロツパの帝國主義の抗争、アメリカと日本との抗争等に依つて自繩自縛に陥り、ロシヤに所謂休息の餘裕を與へてゐる。(第三)に、帝國主義國家と植民地及び半植民地の被壓迫民族の解放運動との抗争は、ブルジョア諸國家をして、自己がロシヤに宣戦する場合、この民族解放運動を一層激烈ならしめることを覺悟させるからである。

プロレタリア國家の社會主義建設と植民地及び半植民地の民族的解放運動とは重大な連關が有る。兩者は帝國主義の世界支配を××××××××として、歴史的な進歩的な意味を持つてゐる。今

日の國際政局は、反動的な帝國主義國家と進歩的な社會主義國家及び自らを解放せんとする弱小民族との對立から成つてゐる。プロレタリア國家のブルジョア國家に對する戦争及び弱小民族の間における民族戦争は、ともに進歩的戦争に屬するものであり、兩者は必然的な内面的な連關を持つて居り、その交互關係を具體的に把握することが何よりも重大である。

現實の問題として、プロレタリア國家は、戦争の危険に對する如何なる準備をなすべきか？戦争の危機を諸國プロレタリアートと共に克服するといふ以外に、原則的に如何なる任務を負ふか？レーニンは、その筆を執る能はざるに至つた一九二三年夏の少し以前に書いた「吾々は如何にして吾々自身を維持するか」といふ論文に於て「現在、吾々の關心するところのものは社會主義の最後の勝利でない、現在において吾々にとつてもつと重大なことは、西歐の反革命諸國のために全滅せしめられることを避け、西洋の反革命的帝國主義と民族主義的、革命的な東洋との間、西方の文明諸國と、一面に於ては後れてゐる代りに地球上の多數を占める東洋諸國との間の來るべき衝突まで、吾々の存在を確保するためには、吾々は如何なる戦術を採るべきかを知るにあり」と論じ（『レーニン著作集』第一卷五五四—五頁）そのためには、労働者が指導權を握つて農民を導き、文明的物質的に社會主義的建設を促進し、實力を養ふより外にみちがないと言つてゐる。

八 いかにして帝國主義戦争を克服するか

レーニンの死後に、レーニンが一九二二年十二月に書いた「ハーグにおけるわが代表の任務」といふ文書が發表された。これは當時、第二インタナショナルが戦争防止の問題についてハーグで開いた國際會議に派遣されたロシア代表者に與へた指令であるが、この短い文書にはレーニンの帝國主義戦争克服の戦術の精髓が含まれてゐるから、それに據つてこの項を記述する。

レーニンは先づ「戦争の危険を打破する問題についての最大困難は恰も此問題が一の單純な明瞭な、比較的に輕易な問題があるかの如く考ふる偏見を打破するに在る」と言つてゐる。労働階級の改良主義首領は平常「吾々は戦争に答ふるにストライキ又は××を以てする」と易々と語つてゐる。この言葉は甚だ急進的な外觀を持つから屢々労働者及び農民を満足させたり安心させたりする。しかし、レーニンは言ふ。

「多分、最も正しい手段は、この種の見解を最も鋭く否定することから始まるだらう。特に最近の大戦が濟んだばかりの今日において、最も愚昧な、最も絶望的に、欺され切つた人間のみ

が、この種の答辯を以て、戦争反対の戦ひの問題について何等かの価値があると信じ得るのだといふことが説明されねばならぬ。」(邦譯「内外政策」三二九頁)

いふまでもなくレーニンはこゝにストライキを戦争防止方法として何の役にも立たないと言つたのでない。否、それは有効な方法である。だが、其丈では何にもならないといふのである。レーニンは語を次いで言ふ。

「一の戦争の發生につきまといつてゐる秘密がいかに大きいものであるか、普通の労働者團體が平常、革命的團體と自稱してゐても、眞に押し迫つてくる戦争に面して如何に無力となるか、それらの事情については吾々は現實的説明を與ふべきである。」(同二三〇頁)

「戦争は一の犯罪である、戦争は社會主義者にとつて許すべからざるものである、といふ理論的承認は、一の空虚な言葉に外ならぬ。何となれば、かくの如き問題の取扱ひ方は何等具體的なものを含んでゐないからである。」(同二二〇頁) (同三三一頁)

戦争は實に微細な理由からでも、直ちに爆發し得るのである。帝國主義國家間の政治關係は戦争目體をばらんでゐる。「トルコに關する英佛の條約の何かの微細な問題に關する兩國の争ひからでも戦争がおこり、また太平洋の極く輕微な問題に關する言ふに足りない差異からでも日米間

に戦争がおこり、若くは植民地、關稅其他、一般的な商業政策上の争ひからでも他のどれかの列強間に戦争がおこり得る」のである。そして戦争がおこつた場合、「母國防衛」といふことが不可避的におこつてきて、一時的に、大多數の労働大衆はこの防衛のスローガンに動かされ、ブルジョアジの側に立つのである。單なる戦争の否定は何の役にも立たない。

「戦争のボイコットとは一の脆弱な文句にすぎない。共產主義者はいかなる反動的なる戦争にも關與せねばならない。」(同上三三〇頁)

「吾々は戦争宣言の翌日から直ちに無数の理論的實際的問題にぶつかるのである。」(同上三三二頁)

しからばマルクス主義者は具體的には如何にして戦争を克服するか? レーニンはこれについて三つの原則をあげてゐる。

第一は日和見主義、排外社會主義の「××××」の眞性質を大衆の前に曝露し、彼等の影響から徹底的に労働大衆を切り離すことである。

第二は救世主義である。

第三は各交戰國のマルクス主義者が戦争反対の爲に××××組織の下に仕事をする事である。

これら三つの原則は各々連絡してゐるものであつて、個々に切り離し得べきものでない。

帝國主義戦争は如何なる方向へ轉化さるべき歴史の必然性を持つてゐるか？ 従つてプロレタリアートは帝國主義戦争にいかなる積極的任務を持つてゐるのであるか？ レーニンは辯證法的唯物論の見地に立ち、歴史的必然によりて方向づけられたプロレタリアートの戦術的任務を規定して次の如く言ふ、曰く帝國主義戦争の階級的××××××、そして更にその××××××への××、と。これはレーニンの戦争に關するあらゆる論議を貫いてゐる基礎的思想である。

この見通し、この戦術は、世界戦争の爆發後に直ちにレーニンが天才的に把握してロシア社會民主労働者黨の宣言に公表したところである。諸國の××的國際主義者ですら、最初はこの思想を一の狂熱的思想と考へたのであつたが、歴史の過程はレーニンの思想の正しかつたことを證明した。

以上に述べた戦争克服の實踐的諸問題についてのレーニンの思想はこゝに詳しく取扱ふことを省略しておき度い。

九 平和の問題

マルクス主義者は帝國主義戦争の不可避であることを、今日なほ進歩的戦争の存在することを、マルクス主義者が如何なる反動的戦争にも關與しなければならぬことを、承認することは上述の如くである。しかればマルクス主義者は平和問題について無關心であるのか？ 否、マルクス主義者こそ、眞の平和の欲求者であり、そのために闘争するものである。だからこゝに平和問題に關するレーニンの思想を述べておく必要がある。

マルクス及びエンゲルスが普佛戦争の過程において、ドイツのアルサス、ローレンの併合に反對したことはさきに述べた。併合反對は社會主義者にとつて第一原則である。だが世界戦争の過程において、ブルジョア民主主義及び中央派社會主義者が無賠償無併合の民主的平和といふことを唱へたことに對して、レーニンは、この純粹の帝國主義戦争に際して美しい平和演説をブルジョア政府に向ける人々は、恰も人の善い村の和尚が地主や商人に向つて「神様の訓戒」に従つて其隣人を愛し、左の頬を打たれたならば、右の頬をも差出せと説教するに均しく、絶対に不可能なことを可能なるが如く見せかけることに依つて、民衆を欺くものだ、と論じた。

「植民地、販賣市場、租借地の分割のために地球を蔽ふに××の×を以てしてゐるブルジョアジーは「高尚」な平和を締結し得るものでない。彼等はたゞ醜惡な平和、即ち奪ひ合ひたる獲

物の分配、トルコや植民地の分配を確定する平和を締結することができぬにすぎない。」(「いかにして平和を強要するか」邦譯「一九一七年」五七頁)

眞に民主的な、眞に高尚な平和はいかにして實現されるか？ 誰れが實現するか？ それは、資本家を克服し得たるプロレタリアートのみである。彼れのみが眞の平和のために戦ふ意思と能力とを有してゐる。そして眞の平和はプロレタリアートがブルジョアジーから政治的×××××として彼自身の政府を形成した後に於てのみ樹立され得るのである。この眞の平和を齎すべき具體的な階級闘争に従事せずして、直ちにブルジョア政府に向つて平和を強要するものは空虚なお人好しであるか、狡猾な欺瞞者である、

レーニンは一九一五年にすでに労働者農民の×××××がこの世界戦争の終結に際して執るべき方針、即ち平和のための方針として、次の如きものを數へてゐる。(同上五九—六〇頁)

- (1) ×××××又はブルジョア政府の一切の條約に拘束されないこと。
- (2) あらゆる條約の公表。
- (3) 休戦の即刻要求。
- (4) 労働者農民の平和條約の即刻の公表。其條件はあらゆる植民地の解放、あらゆる隷屬的な

壓迫されてゐる、權利を奪はれてゐる×××××。

- (5) ブルジョア政府を信任せざることの宣言、諸國の労働者に對する×××××の要求。
- (6) 國債の破棄。

レーニンは、日和見主義や排外社會主義と同様に、ブルジョアの平和主義に對しても戦つた。彼はブルジョア平和主義を特徴づけて次の如く言つてゐる。

「労働者階級を欺瞞する形態の一つは平和主義と抽象的な平和の合言葉である。資本主義特に帝國主義の下においては戦争は缺くべからざるものである。現代において大衆を×××××行動に鼓舞しないような平和的宣傳は幻想を弘布し、プロレタリアートの間にブルジョアジーの人道主義に對する去勢的信仰をよびおこし、プロレタリアートを秘密外交の掌中における玩具たらしめる。」(邦譯「戦争と社會主義」四九九頁)

ブルジョア平和主義に對立するものこそ、眞の平和主義即ち戰闘的×××××的プロレタリア的平和主義である。眞の平和はプロレタリアートがブルジョアジーを克服した後において、始めて客觀的な社會的經濟的根據を持ち得るのであるから、眞の平和への道は階級闘争そのものにはかならない。戦争はブルジョア社會の生存原理であるに反し、階級の消滅した社會においてのみ、戦争

の必然性が消滅し平和が人間を支配する。この故に、かゝる社會の創造のために戦ふマルクス主義のみが眞の平和主義なのである。

第三章 軍備問題について

一 軍備問題についての基礎的觀點

吾々は一九一四——一八年の世界戦争において歴史あつて以來の巨大な惨虐な戦争を経験したのであるが、早くも第二次の世界戦争の危機が迫つて居り、各國は軍備競争に發狂的に従事して居り、一九一四年以前の武裝的平和が擴大した規模において再生産されてゐる。

今日、ブルジョア平和主義者は軍備撤廢、軍備縮小といふスローガンを合唱してゐる。然し此説教は空虚な願望であるか、狡猾な欺瞞である。それは不可能なことを可能なるかの如くに、非現實的なものを現實的なものであるかに見せかけるにすぎぬ。

マルクス主義者はかくの如き考へ方に斷然反對するのである。マルクス主義者は軍備問題について辯證法的歴史的唯物論の哲學に立ちつゝ、次の二つの根本的な觀點を把握して軍備問題を正しく理解し、これよりしてプロレタリア的戰術を導き出すのである。

一、マルクス主義者は軍備問題をそれ自體として觀察せずして國家との連關において理解する。軍備は國家權力の最も根本的な方面にほかならぬ。エンゲルスが「家族、私有財産及び國家の起源」に指摘してゐる通り、軍備は國家の公の權力であり、かゝる公權力を有すること自身が國家の特徴なのである。種族的社會において全人民が武装してゐるが、國家に於ては、即ち階級社會に於ては、武装は常に××武装である。このことは古代國家に於ても、封建國家にても、ブルジョア國家にても、またプロレタリア國家についても妥當する。例へば徴兵制度を以てする常備軍は、封建國家における騎士制度の克服に條件づけられて成立した第三階級（ブルジョアジー）の階級支配の要具にほかならぬ。

二、マルクス主義者は、軍備問題を、社會の經濟的基礎との連關において觀察し、その辯證法的發展をあとつけてゆくものである。軍備は、國家一般と同じく、社會の經濟的發展に依據し、後者の變化と共に形式的にも、また最後に本質的にも變化するのである。ブルジョア社會に於ける軍備がいかに辯證法的に自己壊滅の道を進むかは、エンゲルスが「反ヂューリング論」において次の如く明快に論證してゐる。

「（普佛戦争後において）軍國主義はヨーロッパを支配し吞噬しつつある。けれども此軍國主義

はまた自分みづからの没落の萌芽をも宿してゐる。各國相互間の競争は彼等を驅つて、一方においては年々ますます多くの貨幣を軍隊、艦隊、銃砲其他に消費せしめ、従つて財政的破綻を一層はやめると共に、他方において一般兵役義務を一層重からしめかくて遂には全國民をして武器の使用に習熟せしめ、従つて或る一定の瞬間には全國民をしてその意思を××者の軍事的榮光に逆つて遂行することを可能ならしめる。しかしかゝる瞬間は國民の大衆が——村落並に都市の労働者及び農民が——一個の意思を持つや否や到來する。この點に到るや、領主の軍隊は國民の軍隊に一變し、機械はその作業を担ひ、軍國主義は自分みづからの發展の辯證法によつて没落する。」（邦譯『反ヂューリング論』二七七頁）

國家と軍備とは必然的に結合してゐる。階級社會において階級が他階級を××するため此の公權力を缺くことができない。平和主義者がいかに叫喚しようとも、ブルジョア社會に於ける軍備そのものを撤廢することはできない。マルクス主義者はかくて歴史的必然を無視する空語を斷乎として排斥する。軍備の擴張こそブルジョアジーの生活原理である。ブルジョアジーは自己のために少年をも婦人をも武装させようとするに至る。だが此間において労働者及び農民は武器に習熟するに至る。マルクスは一八七〇年十二月十三日にクーゲルマンに書いた手紙に「ともかく

に應じて屈伸的に應用されねばならない。歴史の發展はチクザクの道を進るのであるから、スロ
ーガンは固定的凝結的であることはできない。

第五章 新帝國主義戦争の危機と プロレタリアートの任務

一 新帝國主義戦争の諸要因

一九一四——一八年の世界戦争は一千萬人の戦死者、一千二百萬人の廢兵を出した酷烈な戦争であつた。全世界のあらゆる労働民衆はこの残忍な殺人の渦中に投げこまれた。この戦争は新しい世界戦争の危機を除去したであらうか？ 斷じて否である。

帝國主義が廢除されない限りにおいて、その政治的發現形態としての帝國主義戦争は廢除されるものでない。一國の資本家が資本家たることを止むる方法は二つしかない。第一は労働者に屈服することであり、第二は他國の資本家に屈服することである。他國の資本家に屈服する方法はたゞ戦争を通じてのみ有り得る。一國の資本家が他國のそれに向つて平和的に屈服することは有り得ない。資本主義の不均等的發展は、諸國の資本家をして世界新分割の鬭争に驅り立てる。

第一回の帝國主義戦争を經過した今日において、次ぎの新しい帝國主義戦争を用意する諸條件として次のものを數へ得る。

第一、資本主義の内在的矛盾の尖鋭化

即ち①生産設備の擴大の可能性と大衆の購買能力との間の激しい不平均の増大、②國內の小ブルジョアの零落及び労働大衆の窮乏化を代價とする莫大な資本の蓄積、國家資本主義の形成を通じての寡頭金融貴族の専制の増大、従つて國內階級闘争の激化、③ロシアの世界資本主義の體系からの脱却並に植民地の産業化と覺醒とに依る、資本主義の世界的均衡の一層の動搖、④資本主義發展の不平均性の鋭化と世界再分割のための闘争の激化、等。

第二、國內政治過程における矛盾の尖鋭化、

經濟は政治において集中的に表現される。それは國內過程にても國際過程にても帝國主義戦争の必然を示さないものはない。即ち①階級闘争の激化、②軍備の發狂的な擴大、③反動政治の勃興、ブルジョア獨裁の尖鋭化、④日和見主義と革命主義との對立の激化等。

第三、國際政治過程における矛盾の尖鋭化。

即ち、1 小國家の大國家への隸屬、少數大國家の世界支配、2 大國家間の勢力均衡の破壊、3 軍備競争、4 一方をロシア及び支那とし、他方を帝國主義諸國家とするところの、國際政局の一大對立、5 反露聯盟、對支干涉の露骨化、6 資本主義國家内の被搾取労働大衆と被壓迫民族の民族解放闘争と、社會主義國家のプロレタリアートとの接近、等。

二 新帝國主義戦争の性質

來るべき新帝國主義戦争は二つの特異なる性質を帯びるであらう。第一にそれはあらゆる民族を戰場によび出す「大戦争」であるであらう。第二にそれは公然たる階級戦争の性質を帯びるであらう。そこには純然たる反動的帝國主義戦争と、進歩的な民族戦争、社會主義のための戦争とが入りみだれて行はれ、結局において、資本主義を維持しようとする階級と社會主義を要求する階級との決戦を意味するに至るであらう。

一、來るべき戦争は「大戦争」であるであらう。一九一四——一八年の世界戦争以後において、忽ち「小戦争」の時代が展開された。それは來るべき「大戦争」の前劇にほかならない。コムミンテルンの一テーゼは次の如く教へる。

「イタリー、ユーゴスラビヤ間の葛藤、イタリー帝國主義のアルバニヤに於ける侵略的攻勢、

イタリー、トルコ間のさし迫る危機、イタリー、フランス間の外交関係の緊張、ドイツ、ポーランド間の経済的戦争、小アジアにおけるイギリス、フランス間の対立、イギリス帝國主義が地中海支配を目的としてやつてゐるアフリカ植民地への運輸通路獲得闘争、アメリカ帝國主義の太平洋における侵略的行動、アメリカのニカラグワの絞首、急速に進行しつつあるアメリカ帝國主義のメキシコ及び南アメリカの奴隸化、××帝國主義の全アジア民衆に對する××、これらはすべて來るべき流血的戦亂のほんの僅かの一局部にすぎない。」(雑誌「インタナショナル」昭和二年八月號六頁)

帝國主義は世界的體系に發展してゐる。個々の國民經濟はその一環にすぎない。故に何れの國に生起する政治的變化も世界資本主義との連關においてのみ變化する。以上にあけた個々の戦争契機は、また同時に將來の戦争がいかに廣汎な範圍に及ぶかを示唆する。

上記のコムメンテルンのテーゼは、今日、「小戦争」の時期が去り「大戦争」の時期が近づきつつあると言つてゐる。その特徴的事實は、諸帝國主義國家の支那の民族運動に對する干渉と、ロシアに對する包圍政策である。

一、來るべき新帝國主義戦争は公然の階級戦争としての性質を帯ぶべく、このことが最も根本的な性質を成すのである。今日の國際政局上、(第一)に資本主義國家に於けるプロレタリアートとブルジョアとの對立激化があり、(第二)に帝國主義國家と植民地半植民地殊に支那の解放運動との對立の激化があり、(第三)にイギリス、フランス、アメリカ、日本等の戰勝國とドイツ、オースタリー等の戰敗國との對立があり、(最後)にソヴィエト・ロシアと全體としての資本主義國家との對立があるのであるが、ヨリ根本的に分てば、一方のロシア及び支那、他の諸帝國主義國家との對立が基礎的なものであり、國際政局はこの二大陣營に分裂してゐる。この對立の根本的の解決者は戦争である。

一九一四——一八年の世界戦争は、帝國主義國家間の、即ち兩側からの、純然たる帝國主義戦争であつた。だがそれは民族國家間の戦争であり、従つて民族戦争たるかの如き外觀を有し居り、實際上、これを民族戦争と見せかけて労働大衆を欺瞞することが可能であつたのである。だがソヴィエト・ロシア及び革命的支那の壓服を目的とする諸帝國主義國家戦争はもはや民族戦争の外觀すら有することができぬ。それは公然たる階級戦争の性質を公然にする。それは帝國主義國家の側に在つては反動的戦争であるが、ロシア及び支那の側に在つては進歩的戦争たる意味を有する。資本主義國家内の労働者及び農民もこの戦争に於ては其階級的利益のために起つに至るで

あらう。だから來るべき新帝國主義戦争は資本と労働との間の決定的闘争たる意味を有する。

三 新帝國主義戦争はいかに準備されつゝあるか

各國のブルジョアジーは思想的にも物質的にも組織的にも新しい戦争を準備することに餘念がない。吾々は次ぎの如き現象を目撃する。

第一、軍備の猛烈な競争。

一九一四年直前の武装平和が擴大した規模において再生産されつゝある。戦争技術は高度の發展を遂げつゝある。軍事工業は信ずべからざる程度にまで擴大してゐる。上記テーゼは言ふ。

「機關銃配給量は増大し、大砲の着弾距離は延長され、航空機の積載量は倍加され、砲彈の爆破力及び口径は擴大し、一人用の戦車が製造され、新しい異常な殺人力を持った毒ガスが発見され、數聯隊又は數師團を燒拂ふに至る極めて有力な點火物質が製造されつゝある。敵の陣營内に傳染病を廣める所の所謂バクテリア戦争等々が用意されつゝある。」(上掲雜誌一二頁)

以上の如くして戦争技術の發展は化學的闘争手段にまで及んでゐる。軍事豫算は膨大を重ねてゐる。平和條約に依つて軍備上の制限を受けなかつたヨーロッパ及びアメリカの軍事費は左の如

く膨大してゐる。

フランス、イタリー	一九一三年	一九二四年	一九二六年
イギリス、合衆國	(百萬ドル)	(百萬ドル)	(百萬ドル)
一、軍事豫算	九三三	一、七四三	一、七六八
	(千人)	(千人)	(千人)
二、常備軍(陸軍)	一、六一三	一、六八一	一、八二一
三、軍用飛行機	約一三〇	二、四〇〇	三、五五〇

國際聯盟や數次の軍備縮小會議はブルジョアジーの甚しい偽善であり、労働者を欺瞞するため手段にほかならない。それは眞の平和のために何の貢獻もしない。

第二、全ての人間及び物的材料の武装及び動員の計畫。

ブルジョアジーは戦争のためのあらゆる人間及び物的手段をその統一的な支配の下におかうとしてゐる。戦争に際して老若男女を直ちに武装し動員する計畫、すべての工場と資源とを軍事的獨裁の下におくべき計畫、これはすべての帝國主義ブルジョアジーの孜孜として努力してゐるところである。

第三、戦争のための思想的準備

愛國主義、國家主義、軍國主義等々が平和主義と相並んで、ブルジョア代表者の手に依つて盛

に宣傳せられつゝある。

第四、帝國主義國家の反露聯盟政策及び對支干涉政策

今日イギリスを先頭とする反露聯盟政策が形成されつゝある。それは極めて大規模で、計畫的で、組織的である。この反動的な統一戦線の中心にはイギリスが立ち、フランス、イタリアが加はり、フィンランドからポーランド、さらにルーマニヤにまで及んでゐる。イギリスは中央アジア、アフガニスタン、ベルシヤ、近東、トルコ、極東のいたる所で反露運動の陰謀の網を張りめぐらしてゐる。支那に對する諸列強の干涉については本講座（マルクス主義講座）第一卷所載の秋笹氏論文を参照せられ度い、諸帝國主義國家に對立するところのロシヤ及び支那に對する、かゝる挑戰的態度は、來るべき新帝國主義戦争への直接の契機を成すのである。

四 新帝國主義戦争に對する闘争

新帝國主義戦争は今日まで言はず代數學的方式であつたのであるが、今日においてそれは具體性、物質性を獲得しつゝある。戦争は強力手段を以てせられたる、政治の繼續にすぎぬ。帝國主義平和が帝國主義戦争に轉化するには極く僅かのキツカケさへあれば足りる。イギリス其他の帝國主義諸國家における反露統一戦線、對支干涉統一戦線の進行は、この機會を速めつゝある。

プロレタリアートは帝國主義の危機に對していかに對抗すべきか？ その根本的方針については、レーニンの戦争論の章に説いたから再言せぬ。この闘争の基礎的なものはレーニンから汲み出すことができる。問題は、當面の具體的な形勢の下において、プロレタリアートは迫り來る戦争に對していかなる任務を有するかに在る。その重要なものは次の如くであらう。

- 一、戦争に對する闘争については特にプロレタリアート中の前衛分子の活動と結合とがなければならぬ。この指導がなければ大衆は戦争の性質及びそれに對する闘争方法を充分に認識することができぬ。
- 二、戦争反對の闘争はその重點を××××及び××××闘争におかねばならぬ。單なる前衛の結合だけでは無意味である。したがつて工場、組合、農村、大衆的政黨、又大衆的集會に於て、最も活潑な××、××、××が行はれねばならぬ。
- 三、戦争反對の闘争は戦争が始まつてから爲さるべきでない。平常からなされねばならぬ。戦争の爆發した場合、大衆が一時的にブルジョアジーの側に立つことが有り得る。平生からの精力的な宣傳は大衆をして戦争爆發に際して其戦争の性質を誤認せしめないであらう。

一九二二(年)	合衆國	イギリス	日本
一九二六	三六六	二三七	五一
一九三〇	三八四	二三五	八九
		二七五	一七〇

四、潜水艇の噸數(單位千噸)

一九二二(年)	合衆國	イギリス	日本
一九二六	八八	七四	四一
一九三〇	九二	四七	三八
		八〇	五〇

二、航空機關的發達

爆彈の平均搭載量	一九一八年	一九二六年	增加率
毒ガス爆彈の最高重量	一五〇 (キログラム)	四〇〇 (キログラム)	一六〇
一飛行家の機關銃發射の最高速度(一分間發射)	一〇〇〇	二〇〇〇	一〇〇
一五〇〇メートルの高度よりの爆彈投下の平均命中率	一四—一五	五〇—六〇	六〇

三、軍艦的發達

機銃を以てする地上射撃の命中率	一〇(以上)	七五	六五〇	
排水量(千噸)	速力(ノット)	機關の作業率	主砲の口徑	
艦型	一九二三年 一九二六年 一九二九年 一九三三年 一九三六年 一九三九年 一九四三年	一九二三年 一九二六年 一九二九年 一九三三年 一九三六年 一九三九年 一九四三年	一九二三年 一九二六年 一九三三年 一九三六年 一九三九年 一九四三年	
戰艦	二七・五 四一・一 二八・〇 三三・〇 七六・七 一四〇・〇 一二時 一六時 一四・五 一八・六	二五・五 二五・五 二五・〇 二五・〇 二四・五 二四・五 一六時 一六時 一四・五 一八・六	二五・五 二五・五 二五・〇 二五・〇 二四・五 二四・五 一六時 一六時 一四・五 一八・六	二五・五 二五・五 二五・〇 二五・〇 二四・五 二四・五 一六時 一六時 一四・五 一八・六
巡洋艦	五・七 一〇・〇 二五・五 二五・五 二五・〇 二五・〇 六時 八時 四〇〇 六〇〇	五・七 一〇・〇 二五・五 二五・五 二五・〇 二五・〇 四時 五時 一〇〇 二〇〇	五・七 一〇・〇 二五・五 二五・五 二五・〇 二五・〇 四時 五時 一〇〇 二〇〇	五・七 一〇・〇 二五・五 二五・五 二五・〇 二五・〇 四時 五時 一〇〇 二〇〇
驅逐艦	〇・九八 二・四 三三・〇 三六・七 二四・五 五〇・〇 四時 五時 一〇〇 二〇〇	〇・九八 二・四 三三・〇 三六・七 二四・五 五〇・〇 四時 五時 一〇〇 二〇〇	〇・九八 二・四 三三・〇 三六・七 二四・五 五〇・〇 四時 五時 一〇〇 二〇〇	〇・九八 二・四 三三・〇 三六・七 二四・五 五〇・〇 四時 五時 一〇〇 二〇〇
潜水艦	〇・八二 二五・二 一六・〇 二二・五 一・六 六・五 七六時 一七七時 一七 一〇五	〇・八二 二五・二 一六・〇 二二・五 一・六 六・五 七六時 一七七時 一七 一〇五	〇・八二 二五・二 一六・〇 二二・五 一・六 六・五 七六時 一七七時 一七 一〇五	〇・八二 二五・二 一六・〇 二二・五 一・六 六・五 七六時 一七七時 一七 一〇五

附記 本稿はレーニンの戦争論を中心として、戦争問題を理論的に叙述する事を目的とした。一九一四年乃至一八年の世界戦争の解剖や、具體的な國際狀勢の解剖や数字的觀察などについては多く頁を費さなかつた。理論的叙述であるが故に、個々の具體の場合に應用するについては機械的であつてはならぬ。

戦争に關する邦文々獻
 レーニン「レーニン著作集」特に第三卷、戦争と社會主義
 レーニン「戦争論」(對支非干涉同盟譯)
 第五章 新帝國主義戦争の危機とプロレタリアートの任務
 二八五

レーニン「遠方からの手紙」(高山洋吉譯)

ツノヰイエフ「マルクス、エンゲルスと戦争問題」(佐野學譯)

雑誌「インタナショナル」昭和二年三月創刊號以後

我が排外主義者の 帝國主義戦争論

一 序 説

最近、日本に於て「帝國主義戦争の必然性がもはや消滅した」といふ破壊的な發見が右翼の指導者に依つて發表せられた。高橋龜吉君の社會科學四月號に載せた「帝國主義の變質」の一文がそれだ。たとへ同論文が理論的に支離滅裂であり、歴史的に全然虚偽であり、實際的には和平主義の假面をかぶつたブルジョア排外主義シヨウイニズムの宣言であるにせよ、それは明かに我國の官許右翼指導者が最近における我が無産階級の政治的生長と隣國支那の大衆的民族運動の壓力に押されて、終に國際政治過程にまで、彼等の所謂理論進出を試みざるを得なくなつた證左である。

彼は先づ「今日、我國左翼戦術の一方の理論的基礎は「帝國主義國家間の戦争必然論」である」と前提し、

「なる程帝國主義發展期に於ては、帝國主義國間における戦争必然論は眞理であつたが、しかし帝國主義没落期に於ては、それはもはや「眞理」でない。この時代に於て尙ほ「帝國主義戦争の必然論」を説くは……「唯物辯證法」的(口)に現實(口)を把握することの全くできない似而非マルキシストであり、時代錯誤の直譯鴨呑論者である」と大見得を切り、結局、

- 一、帝國主義列強間の戰爭必然論は彼等が「金持ち喧嘩せず」の理(!!)から現状維持的「平和(!!)論者に「唯物辯證法」的(!!)に變質することに依つてゆがめられる。
- 二、先進帝國主義國とブチ・帝國主義國(!!)との戰爭必然論は前者の現状維持的共同戦線並に被帝國主義國民の熾烈なる反帝國主義運動に會し、こゝに後者は帝國主義領土の再侵略戰より「唯物辯證法」的(!!)に轉換して、その領土獨占の「解放」(!!)運動に變質する。
- 三、被壓迫民族國における「反帝國主義運動に對し、前記(一)及(二)の結果として武斷的壓迫が著しく困難となる。
- 四、斯様にして帝國主義國に於ては、他民族の帝國主義的擄取が困難となるや、その代りの擄取(!!)を求めると、その鋒先を新に國內勞働階級に向ける傾向がある。
- 五、その上に人口問題を中心として、反帝國主義運動の勃興すべき客觀的狀勢が熟しつつある」といふ「締めくくり」に達してゐる。

同論文は夥しきド、ンキ・ホーテ的空語と非論理とに充ちてゐるに拘らず、その意圖するところは極めて鋭い階級的特質を持つてゐる。彼はわが無産階級に向つて帝國主義戰爭の眞性質を隠蔽しブルジョア平和の幻想を興へようとしてゐる、支那其他の民族革命運動の世界史的意義を塗り

つぶさうとしてゐる。X Xのブルジョアジーの戰爭慾と其戰爭準備とを隠さうとしてゐる。最後に「帝國主義戰爭の消滅」「人口戰爭の可能」なるスローガンの下に却て帝國主義戰爭を合理化し且つ卑しむべき排外主義を鼓吹せんとしてゐる。左翼に對抗するためと號しつつ、實は無産階級の大衆に向つて放つた、彼の有毒なる「理論」を撃破することは我々の義務となつた。

私は世界歴史が近き將來に於て經驗せざるべからざる戰爭が三つの型を有することを、そしてそれが相互に不可離の關係に立つことを、先づ論證するであらう。これが將來の戰爭問題——帝國主義戰爭をも含めての——の基礎的觀點であるからだ。

二 次の戰爭の三つの型とその相互關係

(一)

我々はブルジョア平和主義者でない。戰爭は悲惨であり、同胞殺害であり、人類文化の損害であり、又巨大な物質的損害であるといふ理由に依つてのみ、戰爭に反對することはできない。我々は各個の戰爭又は各個の戰爭時代を其歴史の性質に於て、その特殊的具體的性質に於て觀察せねばならぬ。戰爭のなかには進歩的戰爭が有り得る。レーニンの特徴付けたやうに一七八九年の

「資本主義とは生産手段の私有並に生産の無秩序を意味する。かういふ基礎の上に「収入」の公平なる分配を説教することはブルードン主義であり、小ブルジョアの及び俗物的馬鹿話である。權力に應じて分配する以外に方法はあり得ない。そして權力關係は經濟的發展の進行と共に變化する。一八七一年以來ドイツはイギリスやフランスよりも三倍も四倍も急速に力を加へた。そして日本は——ロシアよりも十倍も急速に。資本主義國の實力を吟味するには、戰爭以外に方法がないし、またあり得ない。戰爭は××××といふ基礎に反抗する矛盾でなく、この基礎の直接且つ不可避的な結果である。資本主義の下においては、個々の經濟及び個々の國家的發展が平均的に増進することは不可能である。資本主義の下においては、時々破壊される平衡を再建するに、産業における恐慌と、政治における戰爭以外に方法がない。」(『ヨーロッパ聯邦の標語について』一九一五年)

さて、わが高橋君は資本主義が未だ廢除せられないに拘らず、資本主義から不可避的に生ずべき戰爭が「唯物辯證法」(いかなる唯物辯證法に依つてか? 筆者)に生じなくなつたといふのである。今、世界戰爭後の一般的状态を観察しよう。

一九一四——一八年の戰爭は帝國主義自身を廢除するどころか、却て資本主義の歴史的發展傾向を鋭くし、資本主義に内在する諸矛盾を激進した。資本主義的諸矛盾の激烈な擴大再生産が世界戰爭以後の世界的情勢の一般的特徴である。國內における小ブルジョアの零落と労働大衆の窮乏化を通じての莫大な資本蓄積、資本の世界的規模における巨大な集中、國家資本主義への進出を通じての寡頭金融貴族の獨裁の深刻化、國際政治的には小國家の大國家への隸屬化、少數の大帝國主義國家——アメリカ、イギリス、フランス、日本——の世界支配、しかも資本主義の不均的跳躍的發展に伴ふての大國家間の勢力均衡の破綻、軍國主義の繁榮、資本家國家における階級關係の變異と被壓迫弱小民族の××的民族運動との照應、ソヴィエツト・ロシアの益々堅實なる社會主義的建設とその國際的勢力としての出現、帝國主義戰線の最も薄弱なる部分における其爆破の可能性の増大等、等、これらの一般的形相は新しい戰爭の社會的根據を成すものに外ならないではないか。

三

次の戰爭といふ問題は所謂資本安定の問題と關聯せしめて考ふる必要がある。マルクス主義は各個の歴史的状态の具體的特徴を最も精確に、最も客觀的に觀察することを要求する。政治を科學的に基礎附けるために我々が絶對に此要求に従はねばならぬのは言を俟たない。今日の世界的

情勢に於て、資本主義は部分的相對的安定の形相を採つてゐる。しかし我々は資本安定の問題を公式的に取扱ふことを許されない。實踐と遊離した客觀主義の見地から是れを取扱ふことを許されない。(我國の公式社會主義者はこの問題について客觀主義の立場を採る。)我々は今日の資本の部分的安定が一層激烈な對立と矛盾とを内包してゐることを看取する。今日の資本主義安定が支拂ひつつある大きな代價を分けて見れば、第一に資本主義國內におけるプロレタリアートのブルジョアジーとの對立の激化があり、第二に帝國主義國家と植民地半植民地殊に支那の解放運動との對立の激化があり、第三にイギリス、フランス、アメリカ、日本等の戰勝國とドイツ、オースタリー等の戰敗國との間の對立の激化があり、第四に戰勝國相互間に發展しつつある對立の激化があり、最後にソヴェエツト・ロシヤと全體としての資本主義諸國との間に發展しつつある對立の激化がある。これらの諸矛盾は交互に作用し合つてゐる。資本主義はこれらの諸矛盾を克服することができぬ。否、これらの矛盾は、その克服の形態として、.....

更に資本安定の問題は個々の資本主義國家に於て質的及び量的關係を異にしてゐる。ドウズ案其他に依つて全ヨーロッパを搾りつつあるヤンキー帝國主義と、七億圓補償を民衆に課しつつあるモラトリウムの日本と、帝國主義的外國勢力を既に南方支那より驅逐しつつある支那と、同一列に見ることはできない。帝國主義戰線は或る個所に於て強力となり、或る個所に於て薄弱となりつつある。そこにも進歩的又は反動的の戰爭の必然性が潜んでゐる。

新帝國主義戰爭の必然性は今日まで言はず代數學的方式であつた。しかも今日、この資本の相對的安定の時期に於て、此方式は特殊の具體性、物質性を獲得しつつある。その導火の役割を勤むるものが支那の××的民族運動である。帝國主義戰線の最も薄弱な部分である支那は今や其鐵鎖を斷たうとしてゐる。大帝國主義國家は支那に對し、又競爭國家に對し、新しい戰爭を準備してゐる。支那と帝國主義國家との戰爭は、帝國主義國家の側から見れば、反動的な帝國主義戰爭であり、支那の側よりすれば進歩的な民族戰爭であるが、全體として見れば明かに人類の歴史に貢獻する一の進歩的戰爭であるべきである。帝國主義國家相互間の戰爭はその双方の側に於て反動的戰爭である。大帝國主義國家の銃火はソヴェエツト・ロシヤにも向いてゆく必然性がある。.....イギリスは幾度かロシヤに挑戦し、一九二三年夏のカーゾンの最後通牒に至つて危機に瀕したが、ロシヤはそれを隱忍した。各國がロシヤと交戦しないのは自國労働者の反對を恐怖するからであり、又、ロシヤが世界の無産階級の爲に隱忍を重ねるからに外ならぬ。

階級關係が一國の政治關係を規定する。支配階級の内容を異にする國家間に永續的な平和は有り得ない。

かくて反動的な戰爭と進歩的な戰爭との複雑深刻な交互作用が近き將來の世界歴史の主題なのである。高橋龜吉君がかゝる時機に當つて「帝國主義戰爭の必然性」の止揚を、ひいて戰爭一般の止揚を——できることなら——企てるに至つたことは、ブルジョア代辯者として誠に當を得てゐる。

私は將來の戰爭についての一般的觀點を叙述した。私は次に高橋君の論文の方法論及び個々の内容等を検討してゆかう。

三 「唯物辯證法」論者を自稱する高橋龜吉君

ヘーゲルの言つた如く、正しい研究方法のみが正しい科學的認識を與へる。唯物辯證法は、自然と歴史を通じての最高の研究方法であり、マルクス主義が現代における社會科學の最高の勝利者たる所以は、この方法を完全に把握するからである。しかし辯證法が往々にして詭辯論へ墮落

したことはギリシヤ哲學の歴史に於て見た所である。高橋龜吉君は「帝國主義の變質」の一文に於て不思議なほど無暗矢鱈に唯物辯證法なる文句を——しかり文句だけを——振りまはしてゐる。曰く「帝國主義の運行そのものも、その盛期から末期に轉入すると共に「唯物辯證法」的に變質的發展をする」「帝國主義のコースは或る點まで成熟すると、其發展の途上に於て「唯物辯證法」の一大旋回運動を起す。」「從來の侵略政策は「唯物辯證法」的に變質發展して……「侵略戰爭」をなす代りに其「解放」運動を起すことになる。」「帝國主義列強は「金持ち喧嘩せず」の理から現状維持平和論者に「唯物辯證法」的に變質する」等、等。だが彼の論文は如何なる點より見ても非「唯物辯證法」的である。この右翼の代表的理論家の詭辯そのまゝの方法論やその淺薄な哲學的基礎に就て一言しておくことは必要であるから、こゝに極く簡単にそれを指摘しておく。

二

高橋君は左翼は現實を把握しないと罵つてゐる。しかし現實とは、高橋君にあつては、個々の分裂せる現象を指すに外ならぬ。現實とは諸々の對立、諸々の矛盾から成り立つ一個の統一體であり、その全體的な發展過程であつて、假象、現象又は本質自體を表現するものでなく、むしろ其辯證法的統一である。しかるに例へば高橋君は列強が現状維持策を採るに至つたことを以て帝

國主義戰爭の必然性の消滅する一理由だと言つてゐる。然し此現状維持策が全體としての帝國主義政策に於て如何なる地位を占むるかはその問ふ所でない。現状維持策が列強の勢力均衡の一面に過ぎずして、それが帝國主義の發展過程に於て直に其反對の極なる現状破壊策に轉じ得るものであることは彼の知り得ない所である。現状維持策なるものは彼にとつては、流動的な相對的な過程的概念でなくして、一の凝結した絶對概念である。かくの如きは唯物辯證法ではなくして、經驗主義と客觀主義との雜炊に外ならない。彼は諸現象の内的連絡を發見することができない。事物を過程的に把握することができない。例へば彼は、帝國主義國家は他民族に對する搾取が困難となるや、「その代りの搾取」としてその鋒先を國內勞働階級に向ける、と言つてゐる。帝國主義國家は他民族に對する搾取が困難になつても斷念するものでない。國內勞働者の搾取は今日に始まつたことでない。他民族搾取の種々の新方法の採用と國內勞働者の一層激しき搾取とは、帝國主義没落期のブルジョアジーが資本を「安定」するためには不可避的に併用せねばならぬものである。此國內階級關係の變動と弱小民族の搾取關係とは内的に必然的に聯絡して、將來の社會を形成する新しい力がそこから湧いてくる。この實踐的鬭争的方面を看過してどこに唯物辯證法を説き得るだらう？ 高橋君はまた、帝國主義平和と帝國主義戰爭とを絶對的な對立物として考へ

る。兩者は帝國主義の異なる政治形態に外ならず、同一本質物として内的な連續性を有してゐる。唯物辯證法ではかくの如く諸事實を分裂的に又絶對的對立物として觀察する人々を稱して「木を見て森を見ざる人々」といふのだ。

三

高橋君は唯物辯證法にとつて最も重要な「矛盾」の觀點を少しも採用しない。矛盾は統一よりも深きものであり、より本質的なものであり、事物はそれ自身のなかに矛盾を持つ限りに於て自ら動くのであり、矛盾なきところに發展と生命とはない。然るに高橋君にありては、例へば「帝國主義國家の戰爭必然論から現状維持平和論に變質する」のは何等かの「矛盾」に依るのでなく、單に「金持ち喧嘩せず」といふ愚劣な理由からである。殊に高橋君の「唯物辯證法」に於て致命的であるのは、社會的矛盾の最大表徴である階級對立、社會的發展の根本力である階級鬭争の觀點が毫厘も存在しないことである。無産階級の實踐的方面はこのブルジョア思想家の完全に無視する所である。かくの如くして唯物辯證法を自稱するのは大膽すぎる。

唯物辯證法は個々の事實の歴史性を究明することを要求するのみならず、また全體的な歴史的觀察を要求する。この點に於ても高橋君の「唯物辯證法」は完全に詭辯である。彼は斷ち切る能

はざる歴史的現象の連続性を中斷するのみならず、まだ個々の歴史的現象についての無法な類推を敢へてしてゐる。例へば彼は國際聯盟及び軍備縮少協定を以て列強の現状維持策の具體的方法に數へ、その形式的な規約條項を數へ上げ、「斯様な状態の下に於て後進資本主義國が「帝國主義」的戰爭を戦ひ得る見込の漸次絶望的となることは自然である」と結論してゐる。しかし高橋君は世界戰爭以前に於て國際仲裁々判の運動や、イギリス及びドイツの間に海軍協定運動のあつたのを失念して居るのでないか？ 帝國主義國家の一時的休戦に過ぎないことは、その何れも同じでないか？ 又、前者は後者の連続でないか？ 當時、ルーエドルフェルなるドイツの一帝國主義者は「仲裁々判とは吾々のやり度くない戰爭を避けるだけの手段に過ぎない」と放言した。そして當時「後進資本主義國」であつたドイツは世界戰爭に於て其主役を演じたのだ。國際聯盟や軍備は「やり度くない戰爭を避けるだけの手段」にすぎない。

四

更に高橋君の論文は「あれか若くはこれ」といふ動搖的態度で一貫してゐる。彼は歴史的必然性の概念を理解することができぬ。彼は歴史を法則的に理解することができぬ。彼は歴史が法則によつて支配されてゐることを知らない。それは至る所に發見せられるのであるが、諸論文の結論たる「締めくくり」に於て、さきに引用した五項目を擧げた後に「以上はいふまでもなく單に末期における帝國主義の觀察から歸納せられた理論的傾向である。然り、帝國主義戰爭必然論のそいであるが如き、「必然論」である。しかしこの必然論も亦その客觀的情勢の變轉するにつれて更に又「唯物辯證」的に進展するかも知れない」(傍點筆者)といふ一句は諸論文の全部を通ずる動搖的態度の「締めくくり」を最もよく表白してゐる。

質と量との關係も彼の理解せざる所である。事物が飛躍的に發展するとき、量的關係が質的關係に變じ、又その逆がおこることはヘーゲルが最も鮮明に論破した。しかるに高橋君にあつては、質的又は量的關係が事物の飛躍を促さないに拘らず、其頭のなかのみで飛躍を試みてゐる。帝國主義的社會秩序はそのまゝに存続しながらも、戰爭の必然が現状維持的平和に變質したり、領土侵略戰が領土「解放戰」に變質したりしてゐるのである。かゝる觀念論的傾向が唯物論と相容れる餘地のないことは明かである。更に彼は「帝國主義末期」なる言葉を濫用しつゝ、「末期」なるものの本質規定を毫も試みてゐない。

彼の哲學傾向は複雑多岐である。小ブルジョアの階級性、動搖性が彼の方法論、認識論、世界觀の諸方面にゆきわたつてゐる。經驗論、客觀論、實證論、懷疑論、觀念論、先驗論等、等。あ

らゆる非マルクスの要素がこびりついてゐる。彼はプロレタリアートの哲學なる實踐的戰闘的な唯物辯證法とは無縁である。しかして彼の哲學傾向は粗雑且つ淺薄である。

四 「現状維持的平和論」の不論理

(一)

以上の如き誤謬に充ちた方法論から正當な科學的認識を結果することは勿論不可能である。私は以下に高橋君の帝國主義戰爭消滅論の個々の論據を検討してゆかう。

彼の第一の論據は大帝國主義國家間における「現状維持的平和論」である。彼はいふ。

「帝國主義は初め「資本主義の基礎に於ては、戰爭以外にいかなる方法があるであらうか」とレーニンをして呼ばしめた所の帝國主義國家間の「戰爭必然論」のコースを取つて驀進した。」
「この帝國主義のコースは或る點まで成熟すると、その發展の途上に於て「唯物辯證法」的大旋回運動を起し、以て更に新なるコースに入るのである。」

「世界の領土が強國間に分割され盡されると、その次からは……何國かの強國に屬せる、乃至はその勢力範圍の領土を更に再侵略する外なくなる。」

「かような不安に怯びえる國は大植民地を有する諸國であつて、遂に彼等は植民地の再奪取をやるよりも寧ろ既得の植民地を安全保證せんとする現状維持により大なる利益を見出すのである」

「戰爭はもはや引き合ふ冒險事業でなくなつた。……世界の大帝國主義國は出来るだけ戰爭を回避してしかも現状維持を鞏固にする方法に熱中するに至つた。その一は國際聯盟の組織であり、二は軍備の縮少の協定である。」

二

以上の引用文は明かに「木を見て森を見ざる人間」が事物を具體的に、本質的に、全體的に認識し得ないことを示してゐる。彼は帝國主義的平和の本質を見抜くことができなくて、帝國主義國家の現状維持策、國際聯盟、軍備縮少等の個々の現象に絶對眞理を認めてゐる。帝國主義的平和は眞の平和でなくて、弱小民族とプロレタリアートとを犠牲とする醜惡なる平和である。それは常に帝國主義戰爭を用意しつつある平和である。帝國主義が存続する限り、その平和と戰爭とは同一基礎に立つものであり、相互に制約するものであり、いつにても相互に移轉をなすものである。帝國主義時代に於て平和は戰爭を準備し、戰爭は又一時的平和を生み出す。同一の經濟的

政治的内容の上に於て、内容そのものを止揚するに至らざる形態上の變化が行はれるに過ぎぬ。この帝國主義的平和——所謂現状維持平和論が帝國主義戰爭を消滅せしむると説くことは明かに背理である。

高橋君は列強の勢力均衡なるもの、本質を理解することができない。資本主義は生産手段のXを基礎とする。レーニンの言ふが如く、生産手段は資本主義の下にありては國內的にも國際的にも權力に應じて分配せられる外はない。列強の勢力均衡とは、權力を以てせられたる、國際的規模に於ける生産手段の配分の政治的表現に外ならない。列強の現状維持とはこれを指すのである。しかも此勢力均衡は、他のあらゆる均衡の如く、不斷に矛盾に充ち、常に矛盾の爆發に急いでゐる。權力關係は經濟的發展の進行に伴ふて變化する。吾資本主義國家の經濟的發展が平均的に増進することは不可能であつて、その破壊された均衡を回復する方法が即ち戰爭なのである。

一國の資本家が資本家たることを止める方法は二つしかない。第一は労働者にXをすることであり、第二は他國の資本家に屈服することである。他國の資本家に屈服する方法はたと戰爭を通じてのみ有り得る。一國の資本家が他のそれに向つて平和的に屈服することは有り得ない。しかし資本家の生活原理は無限の利潤欲であり、資本家的社會秩序は不可避的に國家間の闘争を導き出すのである。現状維持的平和論なるものは一の反動的ユトビヤに過ぎない。高橋君の現状維持的平和論なるものは、實は現状維持主張論なのである。搾取と壓迫と窮乏とに充ちたる現状の維持を主張するがために、廻り道をして平和論を説いてゐるものに外ならぬ。それは何れの平和論者にも共通するところであり、彼等の多くが現存支配階級の代辯者たる所以である。

平和主義は労働階級の眞實の闘争を妨ぐるものであるが故に、反動的なものである。各國のブルジョア政府は決して平和主義者の説教を妨害しない。否、彼等はこれを援助し、物質的支持をすらなしてゐる。そして各國政府は常に自らも謙讓なる平和主義者であると名乗つてゐるから。詭辯は大國家になればなるほど、益々強まつてゐる。かくの如き偽善、かくの如き詭辯に對し、わが善良なる高橋龜吉君は、帝國主義戰爭を消滅せしむる「平和論者」としてこれに甚大な敬意を拂つてゐるのである。

(三)

高橋君は國際聯盟及び軍備縮少を以て平和の保證だと考へてゐる。兩者は醜惡なるヴェルサイユ平和條約の連續に過ぎぬ。戰勝國はヴェルサイユで諸民族の切賣りをした。戰敗諸國に無比の重荷を課し、その國々の労働大衆をして労働黙たらしめた。ウイルソン主義者はこれを以て「民

族自決の原則」の遂行だと考へてゐる。しかし此の條約はアメリカ、イギリス、フランス、メキシコの四大帝國主義國家の世界支配の「安定」を計畫したものに外ならない。國際聯盟も軍備縮少も帝國主義國家の一時的休戦日の表現に過ぎぬ。さきに引用したドイツの帝國主義者の適切に道破した如く「やり度くない戰爭を避けるだけの手段にすぎない」のである。

▼軍備縮少に平和の光明をみる人々にとつて最も皮肉な現象は各國の發狂的な軍備競争である。一八九九年にハーグ會議が召集され、各國代表者は物々しく平和と軍備制限の演説をやつたが、各國の軍備競争は一分も止むことがなかつた。今日、國際聯盟ではドイツも加入を許されてストレーゼマンが恭々しい演説をしたり、アメリカ大統領クローリツチが鹿爪らしい口上で軍備縮少會議を召集してゐる。しかし各國における軍艦、航空機、銃器の不斷の改善と充實とは果して何を語るのであるか？ 各國の軍事當局は少數の人間で使用し得るような精銳な武器の研究に焦心してゐる。それは「軍備縮少」の結果ではない。……

……かくの如くして一九一四年直前の武裝的平和が擴大した規模に於て再生産せられてゐる。わが平和論者はこの現象に眼を蔽ふてゐる。

高橋龜吉君は同君の所謂「吾國左翼の基礎的戰術」の一である「帝國主義戰爭の必然論」を消滅せしむる爲に、帝國主義戰爭の必然性をも消滅せしめようとする一の先驗的觀念から出發した

のである。かゝる先驗的觀念は事實の正しい認識を完全に同君から奪ひ去り、帝國主義國家間の矛盾に充ちた、いつでも戰爭へ發展し得る所の勢力均衡を、一の永久的平和の保證とする幻想に同君を導いてゐる。

(四)

フランスの社會主義者ジョーレスは熱烈な闘士であつた、けれども、平和主義の空想家であつた。彼は一八九九年に佛露同盟を讚嘆する論文を書いた。彼は各國政府間に協約又は協調の締結される毎に平和の保證として歡んだ。殊に彼が一九一一年十二月に議會で行つた、佛獨協約に關する演説は平和主義が如何に正しい認識を誤らしむるかの好標本である。彼はつぎの如く言つた。曰く、今日、平和のために働き得る力が三つある。第一の平和的要素は萬國労働階級の國際的團結である。第二の平和的要素は近代資本主義であつて、特に銀行家の國際的共同利益は世界を恐慌の恐怖から救ふであらう、第三の平和的要素はピュリタンの古き理想に燃ゆるアメリカ合衆國である、と。これは、世界戰爭爆發の際に排外愛國主義の凶徒から暗殺された社會主義者の言として、殆んど信ずることのできぬものである。彼が三つの平和促進力として數へたものゝ中で

眞に其名に値するものは第一のものだけであつて、あとの二つ——金融資本家とヤンキー帝國主義——は却て根本的な平和破壊力である。熱烈な理想家であつたジョーレスはその平和主義的幻想のために徹底的な過誤に陥つた。彼の言の背理であつたことは後の出來事が證明した。私はいかに明敏な人と雖も平和主義的泥濘に落ちる時は救ふべからざる邪路に入るものであることを示すために此例を引用した。

ジョーレス流の平和主義が日和見主義と結びつく時、その害悪は莫大である。世界戦争になつてからマルクス主義を公然捨てたカウツキイの代表する中央派の主要なイデオロギーはそれである。カウツキイは「インターナショナルは平和の機關であり、平和時代の階級闘争の機關だ」と言つたが、更に理論的に發展して所謂超帝國主義論となり、帝國主義が資本主義の一段階であることを否定したのみならず、超帝國主義的なる國際ブルジョアジの團結を以て平和のための一モメントだとした。かくの如き立論は公然の反動的理論よりも有毒である。

(五)

我々は眞の平和を欲求する。眞の平和は………始めて客觀的な社會的經濟的根據を持ち得る。しかしマルクス主義は平和主義でない。………

それは反動的戦争に對してのみ勇敢に反對する。同時にマルクス主義は労働階級を去勢する平和主義の説教に反對する。今、高橋君は戦争を胎内に持つ帝國主義平和を永久の平和に見せかけてゐる。我々はかゝる欺瞞を無産階級のために全部的に暴露しなければならぬ。

五 「プチ帝國主義」の新概念とその所謂「解放政策」の正體

(一)

高橋君は帝國主義戦争の消滅の第二理由として、「プチ帝國主義國の解放政策」なるものを擧げる。彼はいふ。

「帝國主義候補國乃至は後進帝國主義國（以下私は便宜のため之をプチ帝國主義國と呼ぶ）はその帝國主義的進出に全く行詰つてしまつた。こゝに於てこれらの國に於ても従來の侵略政策は「唯物辨證法」的に變質展開して新なコースを採らざるを得なくなる。その新コースは即ち大帝國主義既得の繩張りに對し「侵略」戦争をなす代りにその「解放」運動を起すことである。」

「この種の解放運動は先づ米國のアジヤ進出政策に於て試みられた。」（アメリカは高橋君のため

にプチ帝國主義國にされてしまった！ 筆者）

「侵略政策」から「解放」政策に轉じた劃期的な一里塚はワシントン會議である。」

「以上の如き列國（こゝではプチ帝國主義國がいつの間にか消えて列國になつてゐる。筆者）の解放政策を日露戰爭前における支那分割論の横議と對比せよ。列國の「侵略」より「解放」に轉ぜる有様を最も鮮かに想見し得るであらう。」

「プチ帝國主義國は必然に被帝國主義國の「反帝國主義運動」を直接間接、援助することがその利害と一致するものなることを發見する。斯様にして大帝國主義國及プチ帝國主義の弱小國に對する從來の共同一致の利害はこゝに分裂して逆に利害相反するに至る。」

彼の以上の論證は論理的には矛盾を極めて居り、事實的には明白に虚偽である。彼はブルジョアジの代表者として、排外主義を基礎付けるために、こゝでも先驗的構成を以て臨んでゐる。彼は日本をプチ帝國主義國なるものゝ範疇に入れ、日本のブルジョアが先進帝國主義國家と戦ふことがいかに「正當」であるかを證明しようとし、.....

CII

彼はこゝで「プチ帝國主義」なる新概念を提供した。しかしそれは毫も學問的概念でなくて、彼れ自身、「便宜のため」に此概念を設定することを告白してゐる。彼は彼の所謂帝國主義候補國及び後進帝國主義國を總括して斯く呼んでゐるが、具體的には日本及びアメリカを指すらしい。此二者は異つた概念であるべきだが、彼は日本を以て或時は帝國主義候補國と呼び、或時は後進國とする非論理を取へてしてゐる。アメリカは彼に依つて後進帝國主義國にせられた。この「プチ帝國主義」なる概念は理論的に一顧にも値しないものである。だがそれは排外主義的幻想を喚起する社會的效果を有し得るから、こゝに其虚偽を排撃する。（「帝國主義の變質」の一文にはプチ帝國主義の概念の説明が少しもない。太陽四月號の同氏の「日本資本主義の帝國主義的地位」なる一文は未讀のもので茲に論及し得ない。）

第一にプチ帝國主義なるものは具體的事實を見ざる純抽象的概念である。凝結した年代記的頭腦より見れば、アメリカは確かに「後進」帝國主義國である。しかし世界戦争後に於てアメリカが恰も十九世紀半ばにイギリスが占めたが如き優越した地位を占むるに至り、世界經濟の、そして又世界政治の指導者となつたことは高橋君も知つてゐるだらう。アメリカはメキシコをもチリ

しをもブラジルをも更にカナダをも其經濟的支配の下におき、「歐羅巴の平和」の直接の指導者ともなり、アジアでは支那に積極的進出を試み、更に印度にすら着眼してゐる。高橋君は「後進國」なる年代記の捕虜になつて、世界の狀勢の生きた推移に眼を閉ぢてゐる。日本を以て帝國主義候補國とすることは明白に嘘である。又、日本は年代記的には「後進國」であつても、現在では世界の帝國主義國の一つである。

第二に高橋君は純經濟的範疇と政治とを分離してしまつてゐる。資本の蓄積、原料地、技術等が他の帝國主義國に比し相對的に豊かでないことが、日本を以て所謂「プチ帝國主義國」とする所以であらうと思はれるが、こゝに彼の單純なる拜物教信者の本質が現れてゐる。彼は帝國主義國家間における對立關係を正當に分析することができなくて、先進帝國主義國と後進帝國主義國といふ機械的な非歴史的な對立關係を以て満足して居るのみならず、しかも此對立を絶對化してゐる。しかるに帝國主義國家間の對立關係は常に相對的であり、可動的である。今日の情勢の下に於ては、アメリカとイギリスとの對立、アメリカと全歐羅巴との對立、アメリカと日本との對立の觀點のみが帝國主義國家間の諸關係を分析する上に具體的であり、生々としてゐる。

第三に唯物辯證法的に言へば、高橋君のプチ帝國主義國は特殊と普遍との關係、質と量との關

係について全く盲目である。日本とアメリカの帝國主義が歐羅巴の帝國主義に較べて遅れて發達したといふことは特殊的事情である。しかし兩國の帝國主義が帝國主義一般の普遍的事情に依つて規定されてゐるのは動かすことができぬ。日本の帝國主義は量的に先進諸國のそれと差異があるが、それは質的關係を變更することのできるものでない。日本は帝國主義的機構の下において生産力の發展を、階級關係を、政治關係を、いつ抛棄したであらうか？ 高橋君はプチ帝國主義國即ち日本の如き帝國主義國は先進帝國主義國とは絶對的に異つた範疇に屬するものであり、むしろ支那の如き被壓迫民族と利益を共同にするものだと論證しようとしてゐる。しかし日本は世界經濟の、そして世界政治の網のなかで果して支那の如き被壓迫民族と同じ社會的經濟的根據に立つものであるか？ 私は高橋君に向つて斯かる苦しき詭辯を弄するよりも寧ろ大アジア主義を唱へることを勸める。

要するにプチ帝國主義なる概念は、凝結した年代記的頭腦の產物であり、生きた具體的事實を無視した、流動する世界の現實を分析することのできない純抽象語であり、政治と經濟とを勝手に切り離す拜物教信者の空想であり、ブルジョアジーの利益の防衛を意圖するために先驗的構成を以て作り上げた詭辯であつて、科學的認識の範疇概念として全く許すことはできない。

(三)

次に「侵略政策から解放政策へ」といふ高橋君の論綱——これは彼に依れば帝國主義戰爭必然性の消滅の一素因である——を検して見よう。さきに引用した文章に見ゆる如く、この解放政策なるもの主體が「プチ帝國主義國」であるか「列強」であるか、高橋君自身も明かになつてゐない。同君はかゝる不精密な概念規定又は諸概念の混同から出發して帝國主義の必然性を抹殺しようとしてゐる。同君の「解放政策」なるものは單純にブルジョア的意味における門戶開放政策を意味するに過ぎない。それは決して眞實の意味における平等の確立、諸民族の對等の關係の確立被壓迫民族自身の欲求する解放とは、何等の關係を持つてゐない。これは何よりも我々の指摘しなければならぬことである。こゝにも概念の混沌があり、高橋君の論理的頭腦の程度を表現してゐるのであるが、彼はかゝる曖昧なる用語を使用して、無産階級に向つて、恰も帝國主義國家が被壓迫民族の解放運動を援くるかの如き錯覺を與へようと企圖してゐるものとも受け取られる。

高橋君の「解放政策」とは單に全然帝國主義的なる「門戶開放政策」の略語にすぎぬ。それは被壓迫民族を帝國主義の重壓から解放することを意味しない。我々の主張する諸民族の獨立、その政治的權利の確立、諸民族間の眞實の平等關係の設定といふが如きものを意味するものでない。

門戶開放とは帝國主義的搾取の一形態に外ならぬ。具體的に歴史的に考へて見よ、門戶開放とは遅れて帝國主義的に立ちあがつたアメリカが支那の搾取に割り込むための一手段といふ以外の政治的意味を持つてゐるか？ かゝる意味の「解放政策」はいつにても「侵略政策」に轉移するのである。兩者は同一の經濟的政治的内容の異つた發現形態に外ならない。こゝでも高橋君は兩者を絶對的對立物として眺めてゐる。

(四)

高橋君はワシントン會議を以て、かゝる「解放政策」の一表現物だと考へてゐる。しかし此會議の眞の意味はそれがアメリカの世界政治の指導者としての地位を確立する一過程に外ならなかつた事に在る。アメリカがそのアジア進出に有利な條件を強奪したことが此會議の眞性質である。アメリカは此會議に於てイギリス海軍の優勢なる地位を切り崩した。日本をして日英同盟を抛棄せしめた。これはアメリカがアジアに活動するために其妨害物の力を弱めたことに外ならない。ブルジョア國家間のいかなる會議、いかなる條約に於ても最後の決定者、審判者は力に外ならない。國際聯盟、軍備縮少、ワシントン會議に甘い自由主義的夢想を残すことは、ファシスト的排外主義へ轉移する前の（若くは轉移した）高橋君にとつて彼の本質を隠蔽するための外被で

ある。

アメリカの銀行家がイギリス貴族風のガムシヤラな野蠻な政策を支那に於て採ることを其政府に禁してゐるのは事實である。しかし、それは高橋君の解するが如く「好意」又は「援助」ではない。アメリカ銀行家とイギリス貴族とは帝國主義的搾取の渴望者として何等本質的に異つたところは無い。

更にアメリカのみならず、殘餘の大帝國主義國家が支那に對して武斷的政策を中止してゐることは事實であるが、それは彼等が善人になつたからでない。それは實に支那の革命的民族運動の發展の壓力のためである。高橋君は帝國主義國家からのみ物を考へるが、被壓迫民族の側については何等の考慮を拂はない。かくの如き片面的な思考方法から事物の本質を把握することのできないのは言ふまでもない。今や被壓迫民族殊に支那の民族運動は世界政治の重要な契機であるが、これを無視して世界政治の全面性を知ることがは絶対に不可能である。

(五)

高橋君は「プチ帝國主義國は必然に被帝國主義國における「反帝國主義運動」を直接間接、援助することが其利害と一致するものなることを發見する」といふ破天荒の發見をしてゐる。この

「プチ帝國主義國」は日本を指し「被帝國主義國」とは支那を意味するらしい。高橋君のこの論綱は明白に虚偽であり、且つ幾多のブルジョア的成心を含んでゐる。帝國主義者たる日本のブルジョアと支那の「反帝國主義運動」の主要々素たる労働者、農民、小ブルジョアの大衆とは階級的に全く相容れることができぬ。支那の勞農小ブルジョア大衆と握手し共同に進行し得るものは、高橋君の代表する日本のブルジョアではなくして、日本の勞農大衆あるのみである。

帝國主義國家と高橋君の所謂被帝國主義國家との關係に於て、いかに階級關係が深刻な交互作用をするか、從つて如何に階級的觀點が國際政治の分析に當つて必要であるか、を論證するため、支那の「反帝國主義運動」に表はれつつある是等の點を一言する。

經濟形態が階級形態を規定する。支那は對外的には半植民地として各國から慘酷な搾取を受けてゐる。支那内部の經濟形態は、家長的農民經濟、封建的土豪經濟、原始的手工業等から外國帝國主義の直接間接の支配を受くる近世的機械工業や金融資本がある。これから生ずる階級として軍閥、土豪、劣紳、金融資本家は純然たる反動の群團を形成し、外國帝國主義と直接間接の關係を結んでゐる。外國資本の支配を脱しようとする産業資本家がある。この外に廣汎なる労働者、農民、小ブルジョアの層があつて支那の被壓迫人民層を形成してゐる。支那革命の段階は略々三

段に分れる。第一段階は國民主義ブルジョアが指導力を握り、労働者、農民、小ブルジョアが補助力であつた時代、第二段階は後者が指導力となり、前者が補助力となつた時代、第三段階は労働者、農民、小ブルジョアの團結が確實となり、指導権が確立し、ブルジョアが反動化しつつある時代である。これが政黨に表現されて前者は××××及國民黨左翼となり、後者は國民黨右翼の形成者となつてゐる。(以下七行抹殺)

かくて高橋君の「プチ帝國主義國は必然に被帝國主義國の反帝國主義運動を直接間接、援助することがその利害と一致する」といふ論綱が一の虚偽であり、詭辯であり、ブルジョアの欺瞞であることが分かる。

(六)

高橋君の頭腦のなかには現代における民族戦争と歴史上における民族戦争との區別がない。この兩者と帝國主義戦争との區別も彼の認識し得ないところである。

歴史上に於て、十八世紀末のフランス大革命より一八七〇——七一年の普佛戦争に至るまでの間に行れた戦争は、殆んど民族的戦争であり、そして進歩的戦争であつたのである。それは民族的獨立のための戦争であり、中世紀の封建的殘物を破壊する民主主義のための戦争であつた。人

類が封建制の舊衣を脱ぎ捨てて資本主義へ移るための戦争であつたのである。この期間は資本主義の第一次發展段階であつたので、これ以後、資本主義は次第に帝國主義の段階へ近づいた。これらの戦争を行つた國々は民族國家として結成し、其後の資本主義の平和的發展時代に於て殆んど帝國主義國家に發展した。(以下七行抹殺)

(七)

この下劣なる欺瞞振りには「帝國主義末期と人口問題の擡頭」なる項に至つて愈々激しくなつてゐる。彼はそこで日本の「人口過剩」を慷慨しつゝ、「(日本の人口過剩は)日本が帝國主義的搾取(！)に悩んでゐることに外ならない」「人口問題を基因とする領土擴張戦争(！)は金融資本の發展のためにする戦争とは其性質を全然異にするものであつて、寧ろ「國民戦争」の部類(！)に屬すると見るべきであるからだ」といふ大詭辯に到達して居る。

マルクスは教へる、「各個の特殊の歴史的生産方法はその特殊な、歴史的に妥當な人口法則を有してゐる。抽象的な人口法則は人間が歴史と交渉せざる限りに於ての動植物に於てのみ存する」と。更にマルクスは具體的に資本主義的社會の人口法則として、労働生産力の進歩と資本構成の高級化(不變資本の激増と可變資本の相對的減少)とが不斷に相對的餘剩人口を生じることを、

そしてマルクスの如き俗學者のみがこの相對的餘剩人口の増加を絶對的餘剩人口の増加と見誤まるものであることを、教へてくれてゐる。(高橋君は資本論第一卷を讀みしことありや?)
資本主義社會における人口問題は階級的觀點のみから、資本主義の變革といふ實踐的觀點からのみ解釋され得る。(以下三行抹殺)

高橋君はいふ。

「我國全體の左翼が日本國民の(日本のブルジョアの! 筆者)「人口問題」に「侮蔑的態度」をとらんか、民衆は今日の左翼的無産階級運動から離れ去つて「人口問題」戰を中心に反動的な帝國主義戰爭にまで團結するだらう。(帝國主義戰爭の必然性を否定しつつ、こゝに論理を飛躍してそれを復活させてゐる。筆者)……果して然らば其曉に於て我民衆をしてファシスト化せしめたる責任者は實に今日の我が左翼そのものであると云はねばならない。」
左翼に對する此のやぶ呟みの漫罵を見よ。

平和主義者より排外主義者へ、自由主義者よりファシストへ! かくて我がドンキ・ホーテは次第に「變質」しつつある。

(附言) 本論文は未完である。(六)帝國主義國家と國內労働者の搾取(七)民族戰爭(八)「人口戰爭」(九)日清戰爭及日露戰爭の歴史的性質、の豫定であつたが、長くなつたからこゝで一旦打ち切る。なほ本文は短い時間のうちで書いたので言ひ残した部分が多く、これらは次に譲る。

軍國主義に就て

軍國主義に就て

一

早稲田大學に軍事研究團といふのが出來て、その結果種々の紛糾の起きたのは世人の知る通りである。私達は軍事の研究そのものを否定しないが、軍閥に利用せらるゝが如き懸念のある團體の存在を希望しないから、これに對して反對した。この機會に軍國主義なるものが、近代の資本主義と離れない經濟關係の產物であることを明かにして見たいと思ふ。

軍國主義は帝國主義から生れたものである。近代の帝國主義の本質に就ては種々なる著作があるが最も秀れたものとしては、ジエー・エー・ホブソンの『帝國主義論』ヒルファディングの『金融資本論』レーニンの『資本主義の最後の階段としての帝國主義』、シュルツェ・ゲーヴァニツツの『英國帝國主義論』等の文献がある。日本にも、大西猪之助氏の『帝國主義論』と云ふのがあり、幸徳秋水氏の『二十世紀の怪物帝國主義』と云ふのは明治卅四年に出版されてゐる。

二

軍國主義は帝國主義の所産である。そして近代の帝國主義は、資本主義の所産なのである。今

日の戦争は一王妃を奪還せんが爲めに、トロヤの戦争が起つたり、帝王歴山大帝の野心を満さんが爲めに、マケドニアの軍隊が縁もゆかりもない印度へ遠征するが如き動機から起るものでなくして、露骨な利潤勘定を生存理由とする資本主義から生れて來るのである。これは敢て奇矯の言を吐くのではない。神秘らしく説明されてゐる帝國主義も軍國主義も、一皮むけば、その奥には資本が有り資本家階級があるのである。

資本主義は生産、交換、分配、消費の經濟關係を世界化する。今日、自足自給の國家若しくは民族は絶對に無くなつてしまつてゐる。エスキモー人が米國の石油を買ひ、英國人が蒙古の獸皮を買ひ、支那人が英國のメリヤスを買ふが如くである。然し後に説明する如く資本家階級は、完全に世界主義化すると云ふことは絶對にない。箇々の資本家は自己の政治的國境を楯として、世界市場に覇を争ふのである。資本主義が進めば、商品が過多となる。又、利潤率が低減する。されば各國の資本家は都合よき市場、安き原料、安き労働を求めて、世界的に鬭争せざるを得ないのである。資本主義が帝國主義化し、軍國主義化することは、最初から資本主義其物に含まれた必然である。

三

然し近代の帝國主義は、單純なる商品市場、原料地、労働供給地を争奪することのみを意味するものではない。それは資本主義の新しい傾向と、新しい攻勢から生れたものである。新しい傾向とは金融資本が發達して、少數の銀行家が全經濟を指揮命令するに至つたことを指し、新しい攻勢とは、トラスト、カルテル、シンジケート等の聯合體が、發生したことを云ふのである。生産の集中の行なはれる結果として、資本の必要量が増大し、その資金を銀行家に仰がざるを得なくなつたのである。前世紀末以來異常に發達した銀行業はこの必要に應ずるものである。他方に於て、箇々の資本家の競争の停止を妥協する爲めに組織されたトラスト、カルテル、シンジケート等は相互の競争を斷つと共に、生産量や商品價格に就て、獨占的協定を行ふに至つたが、その繼續及び發達に就て金融資本より援助されることが、甚だ大である。國內の箇々の資本家の競争を杜絶したトラスト其他の團體は、必然的に國外の資本家に對して猛烈の競争をしなければならぬ。或はダンピングの如き商品の砲彈を放ちて、海外市場を手に入れやうとする。或は關稅の障壁を設けて自國の資本家を擁護する。斯くて國際的資本家競争が激甚となるのである。

關稅の障壁に阻まれることがあつても、資本主義的侵略は決して中絶せられない。それは資本の輸出と云ふ形態をとるに至る、即ち他國に對して公債、株券、社債等の形式に依りて、資本を輸出し、利子を搾取しやうとするのである。若くは自國の資本を他國に移して、その國の鑛山、森林、交通、銀行、農業、工業等を自ら經營するに至るのである。この資本の輸出と云ふことは新しい資本主義的侵略の形態である。

四

最近代に於ける帝國主義は軍隊を以てこの資本の輸出を擁護することを云ふのである。曾てカウツキーは、帝國主義とは高度に發展したる工業國が、低級の農業國を略奪することを指すものだとなしたが、この定義は明らかに間違つてゐる。帝國主義とは海外放資國を爭奪したり、海外放下資本を擁護したりすると共に、商品市場や原料地を爭奪する爲めに、軍隊を利用することを云ふのである。大英國主義、大獨逸主義、大露西亞主義等の「大」と云ふ字は、國家とか民族とか云ふ概念と結びつけて説明せられてゐるが、其實は資本家階級の大を致さんとする主義に外ならないのである。

資本主義的帝國主義の對象となる弱小國は慘憺たる目に會ふのである。その舊社會組織は崩壊してしまふ。強國は弱國の經濟的隸屬を政治的隸屬に轉換せしめ様とする。その方が手数が省けるからである然し弱小國は決してその儘に亡び去らない。そこには必ず民族運動の烽火が上がつて来る。印度に、埃及に、小亞細亞に、 \times に漲る民族運動を見よ。又、帝國主義の結果として戦争が心然的に勃發する。又、國內に於ては階級闘争が激甚となる。何れにしても帝國主義が人類の社會生活に及ぼす影響は有難くないものばかりである。

五

金融資本によりて守護せられたトラスト其他の團結は、よく内國資本家相互の競争を絶ち得て組織的に海外市場の搾取に向ふことが出来るやうになる。各國資本家の國際競争は激甚ならざるを得なくなる。而して各國資本家の慾望は自己の手に世界市場を征服するにある。ゾムバルトの言つたやうに資本家の根本目的は、獨占と云ふことに存してゐる。世界市場の征服を達するためには武力を使用すると云ふことが手段となる。尠くとも軍隊をもつて資本主義的侵略を援護するやうになる。

各國が軍事費に投ずる豫算は、甚だ多いのであつて、大抵四割五割六割に至つてゐる。一八八八年と一九〇八年とを比較すると、この二十年間に於て大抵の國の軍事費は二倍以上になつてゐる。日本の如きは十三倍にもなつてゐる。かやうに組織的な大軍隊が生ずれば、必ずそこには軍閥なる特種の社會群が生じ資本家階級と有意無意の連帶的行動を採るやうになるのである。世界戦争は明白に、絶頂に登りつめた各國資本主義の衝突の結果である。

軍隊を構成する要素は主として無産階級の青年である。軍隊は國民の各階級から徴集せられるのであるが、無産階級の青年が大多數を占めることは言を俟ない。無産階級の青年が經濟的には最も劣弱の地位に置かれ、又、教育の機會を奪はれて居り、更に軍隊生活をする重荷を負ふて居るのである。

軍隊は海外市場を争ふ資本主義的侵略の機關となるばかりでなく、又、國內の無産者の運動の××のために××せられる場合がある。帝政時代のロシアに於ては、労働運動や、農民運動を××することが、軍隊特にコサツク軍隊の主要の任務であつたのである。然しこれから先、軍隊がこのやうな目的に使はれ出したら、とてもおさまりがつかなくなるのである。

六

以上のような軍國主義に對しては平和主義が反對の氣勢を揚げる。平和主義は倫理的見地からするものと小ブルジョアの見地からするものと革命的見地からするものとに分類することが出来るであらう。倫理的見地からするものは一般世人から歓迎せられる。革命的見地からするものは積極的に××のプロレタリア化を主張し、今日のブルジョアのための××××××、プロレタリアのための××××××、ひいては××××の成立を目標としてゐる。小ブルジョアの見地からする平和主義のなかには無政府主義の言つてゐるやうなことも數へることが出来る。彼等は徴兵忌避だとか脱走だとか宣誓拒絶だとかいふことを戦術としてゐる。しかし何れも非建設的な戦術であるといふことが出来る。

まだ色々書き度いのであるが、閑暇を得ないから他日のことにする。

権力の自然死

— 無産者國家に於ける権力の問題 —

権力の自然死

一 階級的支配の要具としての權力

權力の否定といふことを最も重大なお題目とするものは無政府主義の人々である。實際このお題目は無政府主義の教理の重要部分であり、同時にその所謂「行爲の傳道」は權力の否定といふことを具體化する重要な手段であるらしい。彼等は權力を以て萬惡の根源であるとなし、直に是れを「廢止」することを根本目的とする。權力はかく一朝一夕に「廢止」し得べきでない。其空想的にして現實味の空疎なることは論ずるまでもない。權力を否認するといふ思想は古くより空想的な、従つて現實社會に對して責任感の薄い一部の文學者、哲學者、宗教家、貴族の間に行はれてゐたところである。それはギリシア哲學以來の傳統である。無政府主義の思想史は紀元前四世紀なるストア學派の學祖ツエノーに始まると見られるが、ローマ時代にも中世紀にも權力否認の思想は絶えなかつた。近代の無政府主義は科學的らしき外觀を有するが、それは要するにギリシヤ哲學者以來の放恣な老處女に外ならぬ。私はこゝに此老處女を論議する餘裕を有しない。眞の社會主義は權力の「廢止」を、先づ第一に着手すべき直接の且つ眼前の事業と考へたことはないのであつて、たゞ其事業の結果として權力に自然の死滅あらしめるばかりである。權力は社

會主義革命がその行程の前半——無産階級の××期間——を終つた後に圓滿な自然死を遂ぐる運命にあるのであつて、是れを廢止するといふ思想は歴史法則を無視した空想である。

権力は從來、久しく神祕化されて説明されて來たものである。エジプトやバビロニアの様な古代大帝國の君主は神そのものと同視せられてゐたが、歐羅巴の政治學史上にも近く國王神權説の如きものが唱へられてゐたことが有る。然し権力は極めて現實的なものであつて、社會以外に超然たる存在を有するが如き形態を有するが、其實、階級的社會を持続するために發生し持續して來た要具である。未だ階級の存しなかつた低級な原始文化の時代には権力關係は存してゐなかつた。即ち民族や部族が社會統合の紐帶であつた時代、社會の成員が同質性を帯びてゐた時代には、権力は發生の理由を持つてゐなかつたのである。その發生してきたのは社會が治者と被治者との階級に分裂し、國家が發生した後である。

権力は階級的支配の要具である。治者階級が被治者階級を力を以て支配する時に権力關係が發生する。階級の發生は人種的鬭争や武力の優劣に原因するが最も主要な原因は經濟上の生産物の争奪戰にある。一旦階級が發生した後には、治者が被治者の勞働生産物を搾取するといふ經濟的動機が階級を持続せしめるのである。その間の關係は平和的なものでなく、敵對的である。この搾取關係を維持するものが権力である。かくて権力は政治的であると共に經濟的である。

権力は國家に固有的、内在的なものである。國家は階級的支配の組織化されたものであるから、國家と権力とが必然的關係を持つてゐるのは當然のことである。國家の権力は全人民的なものでない。古代の國家は奴隸所有者の國家であつた。中世の國家は封建君主の國家であつた。近世の國家は資本家階級の國家である。権力は階級的反對の鋭くなるにつれて、益々猛烈となる。近代國家の権力は古代國家や、中世國家の権力に比して、峻嚴の度を減じた様に見えるが、決してさうでなく、從來と比らべものにならぬ程組織化されてゐる。法律、軍隊、警察、牢獄の制度が近代のやうに大規模且つ秩序的なものになつた時代は未だ歴史上に有しない。また近代の民衆は古代や中世の民衆と比較にならぬ程、自由を慾求する念慮を高めてゐる。従つて近代の民衆の感ずる壓抑感には最も深刻である。

権力の最も原始的な内容は武力より成立つてゐる。軍隊や警察は権力と離るべからざるものである。それは内亂の鎮壓に役立つばかりでなく、帝國主義となり、殖民政策となり、戰爭となる。亦トラストの擁護となり、保護關稅となり、大銀行の保護となる。また民衆の運動の壓迫となる。我國の警察官が社會主義運動や、勞働運動に對して極めて酷烈な壓迫を加えるものは甚だ正

直に権力の本質を露出してゐるものである。

権力は力そのものとは違ふものである。力の中の畸形兒である。力は抽象的に言へば智情意の完全な發達を意味するものであるが、これを量的に測定するには他人との比較が必要となる。他人と比較するといふ事は必ずしも他人を壓倒し、支配するといふ事は意味しない。権力はこの他人を壓倒するといふ事を本質として居る。また具體的に言へば、力には智力、意思力、腕力、財力などが有るが、権力は主として腕力及び財力の結合より來る。これ等の力は進化した力に屬しない。かくて権力は力の畸形兒であると言へる。

二 無産者の権力掌握の行程

社會主義運動の根本目的は新たに無産者の階級の特權を樹立するのにあるのでなく、有らゆる階級の特權や階級的障壁を除去するにある。(以下六行削除) 従つて過去一世紀の社會主義運動は意識的、若しくは無意識的に権力の××をを目指してゐたのである。

「如何にして権力を××すべきか」といふ問題に對してヨーロッパのプロレタリア階級が長い間、議會の占領といふ答案を以つて答へてゐたのは、平和時代に於て己むを得ない過失であつた

が、結局、資本家的デモクラシーの形態たる議會は決してプロレタリア階級の新しい権力機關となるものでなかつた。議會の占領といふ標語は労働階級中の貴族に惰眠を食らせたのみならず革命的意志に燃ゆる下級労働者の大群集をして方向に迷はしてゐたものであつた。革命的な社會主義者の理論は善く了解せられずに、却て議會主義を正當化さうとする諸々の理論が流布してゐた。例へば無産者が完全に権力を掌握するのは資本主義が完全に發達した後でなければ不可能であるといふ説があつた。また資本家階級以外の人民が總てプロレタリア化して且つその全人民に革命意志の慾求が漲つた後でなければ資本主義社會より社會主義社會への進化が不可能だといふ説があつた。資本主義が完全に發達しきる迄、また人間の十分の九迄が無産者になる迄、またその人口九割の無産者が革命意志の所有者となるまで社會主義革命が實現しないといふ説は機械的解釋に過ぎない。無産者は資本主義が爛熟し切るまで、資本主義の齎らす有らゆる弊害を堪え忍ばねばならぬ理由はない。(二行削除) 更に全無産者が資本主義社會のもとに於て完全に革命意志を所有するといふ事は出來得る事でない。資本主義社會に於ける學校や新聞は常に隸屬を合理化し、服従を善化してゐるのである。(三行削除) 今日に於て、或る一國の資本主義的發達が未熟であるからといつて、その國に社會主義社會の實現が不可能だといふ事は出來ないのである。資

本主義的生産方法が採用せられてゐる限り、また今日の如く世界的交通關係の成立してゐる時代に於て、或る國の社會が特定の階段を跳躍して次の社會に進化するといふことは可能である。要するに権力の獲得は資本主義社會に於ける政治形式たるデモクラシーを必然的行程とするものでなく、資本主義の完全なる發達と資本家以外の人民のプロレタリア化を要件とするものでない。これはマルクスが社會主義運動を以つて「最大多數の爲にする最大多數の運動」と言つた言葉を故意に曲解する反動革命的詭辯であつて、眞に無産者の勝利の條件に關する所説たるものではない。

三 無産者國家に於ける権力の作用

資本主義社會が完全に社會主義社會に進化するためには、その中間にプロレタリアの××期間が存在する。無産者の××といふことは、ロシア革命以後に於て世界の社會主義者の主要論争問題となつたのであるが、資本主義社會と社會主義社會との中間に於て無産者の獨裁期間が存在するといふ事自身に就ては、殆んど異論はないであらう。然しその獨裁形態に就ては極めて反對した二個の見解がある。第一のものはプロレタリアのみの代表者を以つて組織するソビエツトの政

治形式を以つて権力を行使せんとするものであり、後者はデモクラシーの政治形式をとらんとするものである。プロレタリアの獨裁とはプロレタリア階級が資本家階級を壓抑することを意味する。然るに在來のデモクラシーは資本家階級がプロレタリア階級を壓抑することの要具を意味してゐたのである。如何に極端にデモクラチックな共和國であつても、それは要するに資本家階級の壓抑機關に外ならない。従つてプロレタリア國家の政治形態はデモクラシーたり得ない。

既に「如何にして権力を掌握すべきか」といふ問題の片付いた後には「如何にして権力を使用すべきか」といふ問題が起る。無産者國家の権力は前代社會の殘存物を整理する方面に使用せられると共に、新社會組織を創造する建設方面に使用せられねばならぬのである。

先づ無産者國家の権力は資本家階級を壓迫するために使用せられるであらう。前代社會の治者であつた資本家階級は一朝一夕に忽然として消滅すべきではない。彼等は必ず反動革命を企つる。或は國內の反動分子を集合し或は外國の資本家階級の援助に依つて、プロレタリア階級の手に落ちた権力を奪還せんと計畫する。無産者が此反動革命を壓迫するために権力を使用するのは自然である。また外國の資本家に對して権力の使用せらるゝことも有らう。而してこれ等に對して法律や軍隊が用ひられるのであるが、それが前代社會の法律や軍隊と全く違つた特質を有する

ことは言を俟たない。

更にプロレタリア階級の権力は資本家にも属せずプロレタリアにも属しない中間階級をプロレタリア化するために使用せられる。今日に於て中間階級は量的には甚だ多い。また其従事する事務は近代社會に缺くべからざるものとなつてゐるものも多い。殊に工業に携はる専門技術者のプロレタリア化に對して無産者國家の権力が使用せられねばならぬ。専門技術者は近代の機械的生産方法の發達と共に發達した新集團であつて、近代の生産組織に就て極めて重大な意義を有するものである。彼等はアメリカの社會學者ヴェブレンが常に熱心に指摘してゐるやうに、近代社會に於て獨自的な意義を有し、團結して資本家階級に對抗することも出来るのである。彼等は資本家の利潤慾を満足せしむるために發生して來た機關ではあるが、他方に於て近代の機械的生産組織の必然的所産であり、此と離るべからざる關係を有してゐる。彼等が資本家の手足となつて其搾取を助けてゐるのは、彼等が今日の社會經濟に關する智識の缺乏してゐることが理由の一つでもある。工科大学や、理科大学の卒業生は深い自意識なくして鑛山や工場に於ける勞働力の搾取行程を助けてゐる。彼等は學校に於て餘りに機械的な學問を研究し、其意識状態までが機械化せられ、心理的には畸形の發達をする。これも近代文明の生んだ一悲哀である。彼等には社會人としての

意識が殆んどない。同時に彼等は中間階級としての因循な反革命的素質を有する。以上の如くして彼等は將來の社會に於ても重要な分子であるに係らず無産者國家の生長を妨害する性質を有する。今日の勞働者が直ちに工場を管理する能力を有しない事は、獨乙の如く多くの訓練せられた職工を有する國に於ても明かな事である。従つて彼等をプロレタリア化するために権力が使用せられねばならぬ。

無産者國家の権力が其建設的方面にも使用せらるべき事は言ふまでもない。エンゲルスは生産機關の社會化に向けられる権力作用が、権力の最終的作用形態であると言つたが、「この生産機關の社會化」と云ふ一句を以て無産者國家の建設的方面の全部を包擁することが出来る。土地、鑛山、工場、機械の如きものゝ社會化のみならず、科學的智識の普及や勞働組織に關する鐵の如き規律も「生産機關の社會化」といふ標語の中に包含せられるのである。此建設的方面は前代社會の殘片を整理する事業よりも困難であり、而して一層長き期間を要するのである。

民族問題諸章

民族問題諸章

一 一般論

民族問題の重要性は、人類の歴史を通じて常に顕著である。現代の国際社会は、多民族国家の増加と民族意識の高揚によって、民族問題が重要な課題となっている。本論では、民族の定義、民族意識の形成、民族間の関係、民族政策のあり方について考察する。

民族意識の形成

民族意識の形成

「社會主義と民族運動」(大正十二年六月「改造」に發表、後、昭和三年七月「社會主義雜誌」所載)
「ロシア革命と猶太人」及「斷章」(「闘争によりて解放へ」大正十二年六月、所載)

一 社會主義と民族運動

一 序論——社會主義思想上に於ける民族問題

最近代にいたり資本主義の崩壊行程が甚だ急激となり、顯著となつたことが看取せられる。茲に最近代と云ふのは世界戦争以後、ロシア革命以後を云ふのである。各國共に資本家階級が社會統制の實力を喪ひ、資本主義社會の秩序を維持することの×××となつた兆候が歴々としてゐる。資本國家の帝國主義的侵略が露骨になつたことや、帝國主義國家のブルジョアの協調が不可能となつたことは、その一證である。フランスのルール占領はヴェルサイユ條約を破産せしめた。支那に於て帝國主義國家間の政策は協調が失はれ勝ちである。労働階級の潮の如き失業状態は停止する所を知らない。白色テロリズムの暴力團體は至る處に發生して、世界戦争以前に見られたが如き、社會のブルジョアの秩序を破壊しつゝある。労働階級の階級意識は日和見主義者の努力にも係らず益々尖鋭となり、社會主義運動が非常の勢を以て世界的に組織化されつゝある。かくの

である。それはマルクスの階級闘争説及び唯物史観説に基くものであると言つてよい。共産黨宣言を讀んだ人は、資本主義生産制度の發展と共に經濟財の生産、交換、消費が世界的となり、前代の地方的國民的の産業及び市場に代つて國際的産業と世界市場の現はれて來た歴史的過程が、鋭い、生々とした文字によりて述べられてゐることを知つてゐるであらう。ブルジョア階級は世界市場の搾取によりて、あらゆる國々の生産と消費とにコスモポリチックの性質を附與する。産業の國民的地盤が崩壊して、復古主義者の大いなる悲嘆の種となる。傳統的な國民的産業は破壊され、尙ほ日々破壊せられつゝある。この形勢に應じ、嘗つて地方的國民的であつた労働者の闘争が×××性質を帯びて來た。プロレタリアの運動は近世産業の産物であり従つて近世産業の世界化と共に労働者の運動も世界的となる。かくて「労働者は××を有せず」萬國のプロレタリア團結せよ」と云ふ結論が生れてくる。

他方に於て、當時の民族主義運動に對して盛に社會主義的批評を試みたものはエンゲルスであつた。當時、小國の政治的獨立といふ意識と運動とが甚だ盛んであつた。バクニンの如きはバルカン地方のスラヴ人を統一する運動を企てゝゐた。エンゲルスはこれ等の運動に對して斷乎として反對した。エンゲルスはポーランドの復興を希望してゐたのであるが、それは單なる一個のボ

ーランド國家の成立を意味するものでなく、ポーランド内の四個の民族をしてそれ／＼自主的權利を主張し確立せしむることを目的としてゐた。マルクスとエンゲルスとがポーランドの復興を希望したことは、「コンモンウェルス」誌上に於けるエンゲルスの論文や、兩者の書翰集に出てる。兩者の意見に依れば、ポーランドの復興はロシアの勢力とその中歐に及ぼす勢力を弱め、中歐文化の發達を迅速ならしめ、ひいて獨逸の政治にこびり付てゐる封建的要素を破壊せしめるものであつた。マルクスが一八六六年に於ける第一インターナショナルの評議員會に提出した陳述書には、「民主的ポーランドの成立は現在の中歐、特に獨逸の状態に照らして甚だ必要である。獨逸が神聖同盟の前哨たるか若くは共和國フランスの同盟者たるかは、ポーランドの再興如何にかかつてゐる。この大いなる歐羅巴の問題が解決しなければ、労働運動は不斷に攪亂せらるゝであらう」と云ふ意味を述べてゐる。要するにこの第一期の特徴は、第一にはプロレタリアの國際的團結の原理を明かにし、第二には單なる政治的獨立を獲得せんとする小國の民族主義運動を批難し、各民族は文化的單位としてのみ重要な意義を有し且つ自決の權利あることを明かにしたのである。しかしその自決は「國民」の自決でなく、「民族」の自決であつたのは言ふまでもない。

社會主義思想史上に於ける民族運動の第二期は十九世紀後半より世界戦争に至る時代である。

此時期は第二インターナショナルの時代と呼び得る。此期に於てもカウツキイの「民族心と國際心」、オットー・パウエルの「民族問題と社會民主黨」といふが如き著書が出で、マルクス、エンゲルスの思想を説いたものであつたが、しかも此期に於て社會民主主義は日和見主義に墮してしまつてゐたのであり、それは民族問題の取り扱ひにも表はれてゐる。即ち此期に於て民族問題の對象となつたものは歐羅巴の弱小民族のみであつて、帝國主義の酷薄な鞭の下に苦しむ黄色黑色の弱小民族は捨て、顧みられなかつた。又彼等は民族自決の原則を説かずして、民族自治なるものを唱道した。民族自治とは形を變へたる母國の搾取形態に外ならない。

第三期は世界戦争後の第三インターナショナルの時代である。民族問題の對象は黄色黑色の弱小民族をも含む廣汎なものとなつた。その基礎的原理は徹底したマルクス主義である。それは民族自決、民族同權、民族の獨立の國家的生存、民族聯合等の原則が民族合一の必然の過程であることを明かにしてゐるのみならず、又戰術上の多くの問題を論じて有力な鍵を與へてゐる。これに就ては後に述べようと思ふ。

二 弱小國民族と資本的搾取

民族問題と云ふ言葉は二つの方面を有してゐる。第一は民族が世界文化の單位を構成してゐることや、民族精神がいかなる要素と機能とを具へてゐるか、といふ哲學的社會心理學的方面である。第二は強大なる民族が弱小なる民族を壓迫する結果として後者の解放運動が起ると云ふ社會的政治的方面である。こゝに取扱ふものは後者である。

強大な民族が弱小民族を壓迫する現象は古代史以來、著しい現象である。凡そ民族的壓迫は二個の條件を具へてゐる。經濟的搾取及び政治的支配がそれである。壓迫の根本動機は經濟的搾取であるが、その形式は政治的支配である。民族的壓迫の歴史的形態としては、古代型及び近世型の二に分つことが出來よう。古代型の民族壓迫の心理的原因としては、暴力的な帝王の野心、異種族に對する敵對心、異教徒に對する憎惡心等を擧げることが出来る。敗者は鑿殺されるか、奴隷にされるかであつた。この時代には、人種的反感と云ふことが大いなる役目をしてゐたのである。然るに近代の民族的壓迫は、資本主義の發達と相伴ふものであつて、資本的搾取と云ふことが最大の原因をなしてゐるのである。生産、交換、交通等の經濟關係が世界化するにつれて、頑固な人種的反感が打破られて行く。近代の民族的壓迫には決して人種的反感なるものがその動機をなしてゐないのである。人種的反感を新しく復興したものは却て資本家階級である。資本家は

他國民の侵入の危険といふことを宣傳し、國民的利益の爲めに弱小民族××××××××××の有利である事を煽動する。在來の國家哲學、政治哲學がかくのごときものを容認するは勿論であるが、社會主義の陣營中よりも侵略的社會主義、國家的社會主義が飛び出して其傭兵となるのである。要するに古代型の民族壓迫は人種的反感と云ふ心理的要素が強く働いてゐたが、近代の民族的壓迫には、資本的搾取と云ふことが根本原因になつてゐるのである。

近世の民族的壓迫の對象となつてゐるものには四つある。第一は政治的に微力なる小國の群れである。例へばバルカン諸邦の如きがそうである。第二は一資本國家の政治的領域内に於て集團的單位を構成してゐる民族である。嘗つてオースタリー治下にあつたチエツク、獨逸の治下にあつたポーランド、英國の治下にあつたアイルランド人、××××××××××の如きがそうである。第三は古くより國を失ひながら民族的生命を失ふことなく各國に分散せる民族である。猶太人がそうである。第四は政治的經濟的に未開なる階段にある民族にして最も露骨なる資本的搾取を蒙り、所謂植民政策の最も殘酷な犠牲となつてゐるものである。アジア、アフリカ、印度、瓜哇、臺灣、アメリカのネグロの如きものがそうである。この四つのもので、特に注意しなければならぬことは第二に述べた植民地民族及び第四に述べた未開民族の運動の甚だ猛烈となつて來たこと

である。その何れも資本の搾取を蒙ること甚だ強きものなのである。

近代の民族的壓迫は明白に資本的搾取に基くのである。資本主義國家の爪牙は、植民政策及び帝國主義の假面の下に、弱小民族の國土を××××××××××。資本主義的生産制度の下にありては必然的に商品が過多となり、國內の購買力を超過するようになる。元來、資本主義が發達し行くためには、その周圍に非資本主義的環境の存在を必要とする。廉價にして豊富なる原料の搾取、同様に安く且つ豊かなる労働の搾取、並に過多に陥りたる無數の工業製品を販賣すべき市場の獲得、この三者は資本的搾取の根本目的である。

三 弱小民族の隷屬狀態

資本主義にとつて植民政策は其助産婦であつた。近世の資本主義は其發生當初より弱小なる東方民族を餌食として生長して來たのである。植民政策とは強き民族の弱き民族に對する資本的搾取の歴史的別名なのである。しかも今日、一層悪いことは植民政策といふ假面が帝國主義といふ素顔に變つたことである。帝國主義それ自身は資本主義の最終發達段階として現はれたのであり、各國の資本家階級がその平和の假面を捨つべく強制せられた結果として發生したものである。帝

この範疇に數へることを得るのであらう。第三は數個の資本主義國家の勢力が平衡する結果として、何れの國の植民地にも勢力範圍にもなり得ないものである。これにありては或る一國が單獨に政治的支配を行ひ得ないのであるが、しかも弱小民族自身には完全なる政治的獨立があるわけではなく、常にその國の政策は自己をとりまく虎狼の群たる資本國家の協定的政策によつて左右せられるものである。従つてかくの如き弱小國民の國土と人は資本國家の角逐場たると共に、又これ等の國家の共同的支配物と云ふことが出来る。政治的隷屬と云ふことに於ては、前二者と大いなる差異はない。

第三は文化的隷屬である。資本國家は自己の勢力下なる弱小民族に對して該民族特有の言語、宗教、慣習等×××、自國の言語、宗教を強制し、自國本位の教育機關を作る。この政策は往々にして植民地に對して同化政策若くは文化政策の美名を以て呼ばれてゐるが、却て民族が文化的單位として自己特有の能力を發揮せんとすることを×××××するものであつて、世界文化の×××ある。かくの如きものを文化政策と云ふことは×××××に他ならない。

四 社會主義と民族運動

十九世紀に於ける、民族運動は正確に言へば民族主義の運動であつた。それはナポレオンによつて擾亂せられた政治地圖を復舊するために「民族主義」若くは「民族國家」なる名の下に行はれた、政治的色彩を多量に含んだ小國の運動であつた。それはマルクス及びエンゲルスの強く排撃したる所であつた。

最近代に於ける民族運動は以上の意義に於ける民族運動とは明かに異りたるものである。世界戦争後にポーランドやフィンランドが獨立國を形成した事は十九世紀的傳統を有するものであるが、しかもそれはフランスの資本主義の人形として捏ね上げられたものに外ならぬ、かくの如きは決して最近代の民族運動の本流ではない。最近代の民族運動は、民族が世界文化の單位であると云ふ認識を意識的若くは無意識的に包含して居るのである。而して此意義に於ける民族運動に於ても明かに二個の異りたる體型の發生してゐるのが見られる。第一は小ブルジョアの改良的民族運動であり、第二はプロレタリア的革命主義的民族運動なのである。

最近代の民族運動のうち、先づ最初に起つたものは小ブルジョアの改良主義的民族運動である。弱小民族は一の全體として強大民族に依りて搾取せられるのであるが、それ自身の中に於ても強大民族の中に於けるが如くに階級的差異があり、ブルジョア及びプロレタリアの基本的階級と共

に小ブルジョア階級が存する。あらゆる社會的運動の歴史的過程に於て、小ブルジョアが其先驅をなすのであるが、民族運動に就ても此點が著しい。小ブルジョアは最も早く政治的社會的自覺に到達する。彼等はこれに必要な知識、時間及び經濟的餘裕を有するが故に、最も早く社會制度の不合理の認識に到達するのである。然しながら其認識には一定の限界が存在するのであつて、彼等の反抗精神は改良主義の極限に達し得るけれども革命主義にまでは到達し得ないのである。民族運動についても自己の被搾取状態を自覺し是に對する反抗を先づ試むるものは小ブルジョアである。其好例をなすものは印度のガンジの運動である。彼は外來文化に對する印度の固有文化、國民文化の防衛と云ふ旗印を掲げ公民的不服従、非協同の運動と云ふ消極的反抗を試みた。しかしガンジの謂ふ固有的文化なるものは機械工業前の文化であり、資本主義以前の文化である。従つて其運動は復古的色彩が顯著であつて、長く印度の民衆を惹き付けることが出来なかつた。トルコの青年黨も最初は單なる政治的獨立と云ふ國民主義的運動に満足してゐたのであつて明かに小ブルジョア的であつた。英國に反逆するアイルランド人の運動も最初は自治を中心要求となしてゐた。其目標たる共和國は勞農共和國でなくして自由主義的共和國であつた。××の運動も最初は明かに自由主義的なる政治的獨立を以て満足するものであつた。以上の如き、小ブル

ジョアの民族運動は、該民族に政治的自覺を與ふる點に於て大なる効果を有して居る。眠れる者をして目ざめしめ、絶望と疲勞と貧困との極に陥つてゐる多數の民衆の反逆精神を組織化する効果を有してゐる事を拒み得ない。然しながら民族の解放それ自身が、この意義の民族運動によりて實現せられることは到底不可能である。單に一個の資本國家より政治的に獨立しようとも、其經濟的隷屬は取り去られないであらうし、又よく該資本國家の政治的經濟的支配を脱し得たりとするも、忽ち他の資本國家が襲ひ來つて前の資本國家と同じ搾取を加へるであらう。

小ブルジョアの民族運動の到底成功し難き事が明かとなり且つ大多數の人々の階級的自覺の強度の加はるにつれて、茲に社會主義的要求を藏したプロレタリア的××的民族運動が起つて來るのである。弱小民族の内部にも搾取者と被搾取者とがある。被搾取者の利益は何れの國に於ても共通であり、總てのプロレタリアは階級的兄弟であり、資本に對する××××である。プロレタリア的民族運動は此認識の上に立つ。勿論、弱小民族のプロレタリアが自己民族を搾取する強大民族のすべての階級に對して不信と敵對との感情を有することはあり得ることである。チエツク人はオースタリーの資本家のみならず、其勞働者階級にも不信の情を有して居た。ポーランド人は、獨乙の資本家及び地主に對してのみならず、その勞働者と農民とに對しても不信であつた。

英國人に對するアイルランド人にもこの種の現象がある。然しプロレタリア的××的見地に到達し得た弱小民族間の××××は、強大民族の間に於ける××××を完了しなければ、到底自己の解放を期し得ないことを認識するに到つたのであつて、茲に兩者の××的運動が初まつて來るのである。今日の印度の民族運動の主動者はもはやガンジーでなくして農民と労働者である。その運動は最早消極的反抗にあらざりて、××、示威運動、同盟罷工等の積極的反抗である。アイルランドの運動も單なる政治的共和國の建設よりもプロレタリアの××を目的とする××××××と化した。××に於てもこの傾向が顯著ならんとしてつゝある。而して單純なる弱小民族の政治的獨立より××××の壇上に突進して來た民族運動は、單に印度、アイルランド、エジプト、^{朝鮮}××の如き國々を支配してゐるのみならず、アメリカ黑人、アフリカ、ジャバ、蒙古、トルキスタン等の未開民族にも及んでゐるのである。第三インターナショナルの世界大會にはこれ等の弱小民族中の××分子が代表者をモスクワに送つてゐるのである。

五 最近の民族運動の二體型

社會主義的民族運動が先づ最初に掲ぐる處のものは、プロレタリアが階級的兄弟である、とい

ふ前提である。英國、佛國、獨逸の如き國々と、埃及、印度、支那、アフリカ等の國々とはその文化的發達の階段に多大の間隔を有してゐるが、しかし是れ等の國々の労働階級は一樣に資本によりて搾取せられる社會階級であり、資本に對する××××である。經濟的諸關係の世界化と共に、各國の搾取者同士並びに被搾取者同士の間必然に利益の共通といふ具體的事實が發生するのである。プロレタリアの國際的團結といふ意識及び運動は是に基いて生み出される。社會主義は民族が文化的單位たることを認むるが、政治的單位たることを決して容認しない。民族は社會主義的國際社會に於て各個の文化的單位を構成するのであるが、政治的には地球一個の「××共和國」に進み入るべきことを目標とするのである。而してその民族がブルジョアの搾取者の要素を驅逐し去りたる、換言すればプロレタリア化されたる民族であるべきことは言を俟たぬ。

以上の如きがマルクス以來、社會主義思想の上に決定せられてゐる根本的見地であるが、最近代の民族運動はマルクス當時に比し、その資本主義に對する歴史的意義が明かとなり、若くは増大したのであつて、其結果として種々の現實問題が種々の現實的政策の構成を促してゐるのである。今、最近の民族運動に對する現實的政策として社會主義の容認する原則が四つある。第一は民族同權の原則である。すべての民族はその文化の階段や人種の差異を問はず、その行動上の權利が

同一でなければならぬといふ原則である。第二は民族自決の原則である。それはウイルソンの唱へた如き自由主義的のものにあらずして、何れの民族も一樣に他の民族との離合につきて徹底的な自決の権利を有するといふ原則である。言語、宗教、教育其他に亘る、自己民族に關する一切の事件も亦自己の手にて決定するといふ原則である。第三は各民族が××の××××存在を營む權利を有するといふ原則である。民族が完全に××より××し、それ××の××××を形成すべきである。しかし其の國家はブルジョア國家であるべきでない。プロレタリア國家であるべきだ。第四は民族聯合の原則である。各民族の自決とその國家生存とは孤立を意味するものでなく、その上に各民族の聯合が實現せられねばならぬ。これは「××共和國」への過渡的形態であるが、必然的に生じ來るのである。今日の世界化したる經濟關係は、必ず各民族を聯合せしめ、最後に一個の××共和國を作り上げしむるであらう。従つて民族聯合の原則は將來のプロレタリアの××の大團結を完成するための過渡的状態の促進物として、特に重大の意義を有する。

社會主義は上述の意味に於て民族問題を解決せんがために、眼前の民族運動に對して、種々の社會主義的戰術を提供するのである。今、これに關する重要部分を次に列擧して見ようと思ふ。

(1) 社會主義は一切の民族運動に忠實なる援助をなすべきである。未だ××的プロレタリア的民衆運動に進化せざる小ブルジョアの民族運動に對しても援助を惜んでならぬ。最近代の民族的壓迫が資本主義的生産制度に原因してゐる限り、弱小民族のいかなる××××も資本主義の××と××××を有する。帝國主義に××××ものである限り、いかなる民族運動をも支持せねばならぬ。

(2) 社會主義は一切の弱小民族の運動に社會主義的性質を賦與することを努めねばならぬ。未だ小ブルジョアの運動に留まれるものに對しては、プロレタリア的運動に到達するように導かねばならぬ。そのためには弱小民族の××××分子を結成せしむることが甚だ必要となる。

(3) 社會主義は弱小民族の間に於ける一切の舊要素を崩壊せしむることに力も注がねばならぬ。弱小民族が資本主義以前の社會状態に於て生活すること上述の如くであつて、特に封建的要素が土地制度の上に残つてゐる。また宗教がなほ大なる勢力を有してゐる。プロレタリア的意識に到達するために、それ等の舊要素の除去は甚だ必要である。基督教のミツション・スタイルの影響の如きも、排除されねばならぬ要素の一つであらう。

(4) 弱小の民族間に於て農民運動の勃興と發達とは大に努力せられねばならぬ性質を有する。弱小民族の社會は未だ充分に農業的社會の状態を脱してゐないものであり、従つて農民がその大多

數を占める。また經濟的大衆運動として、農民運動は唯一の可能なる方面である。されば弱小民族間に於ける農民運動の發達は舊社會的要素を崩壊せしむるものであると共に、人口の大部分を占むる民衆をして最も新しき民族運動へ導くところの大なる條件を成すものである。

(5) 弱小民族は「國家的生活を許容する」といふ強國のブルジョアジーの詭計に陥つてはならぬ。フィンランドやポーランドは此種の詭計に陥つてゐる。猶太人が故郷パレスチナに猶太國を建設せんとする企ての如きは、却てブルジョアジーの潜かに喜んでゐるところであらう。弱小民族が所謂列強の間に伍して國家を構成し得たりとするも、それによりて利益を受くるものは弱小民族の間のブルジョア分子に外ならない。プロレタリア群が搾取を被ることは依然たるものがあらう。

(6) 社會主義は小ブルジョアの國民主義と戦はねばならぬ。彼等は古代以來、猶ほ微かに殘存する人種的反感といふ、蒙昧な原始的感情を煽動するものであり、しかもこれをブルジョアジーの利益のために煽動するものである。それは被搾取民族をして強大民族のあらゆる階級に對して不信の情を抱かしむる重大の根據となる。他方に於て小ブルジョアの平和主義も撃滅せねばならぬ性質を有してゐる。平和主義運動なるものは解放が闘争を通じて行はれる原則を無視し、無闘争

によりて解放の業を遂げんとするものであつて、無理なる注文と言はねばならぬ。しかし時としてこの平和主義運動を利用することは無意義ではない。

(7) 社會主義的民族運動は大アジア主義若くは汎回教主義の如き運動と絶對に相容れることが出來ぬ。亞細亞のプロレタリアートに對する歐羅巴ブルジョアジーの搾取を排撃せんとする點に於て毫も異議はない。しかし^{日本}××が盟主として歐羅巴の壓迫より亞細亞の諸民族を解放すると號する大アジア主義は、其實に於て^{日本}××の大地主と大資本家とを利するものに外ならずして、眞のプロレタリア的民族運動の恐るべき敵である。汎回教主義もトルコの貴族と地主と僧侶とを利するに終るであらう。ジンギス汗が歐羅巴に侵入して劫掠を逞ふしたことは、搾取慾に溢れた野蠻人の文明破壊の蠻行に外ならない。東洋人は西洋人の搾取を撃滅すべきであるが、西洋人を搾取せんとする欲望にまで發展してはならぬ。大アジア主義若くは汎回教主義は××若くはトルコ特權階級を利するに留まり、殘餘のアジアの弱小民族は今日と同じき搾取をそれらの特權階級によりて加へられるに過ぎないのである。

(8) 社會主義的民族運動は必然××主義と結びつくべきである。軍國主義は帝國主義の一層露骨に表現せられたものであり、帝國主義が弱小民族に對し強力を以て資本的搾取を加ふるために

は看過しても、近世の社會特にその根幹をなす資本主義については、その有力な肯定者も否定者も、猶太人の中より多く現れたのである。ロスチャイルドの如き大資本家も、マルクスの如き大社會主義者も此種族の出である。歐羅巴の無産階級中には多くの傑出した猶太人が見出される。更に學術上に多くの偉人を生んだことはこゝに説くまでもなく、手近い例を見てもフランスの哲學者ベルグソンもドイツの科學者アインシュタインも猶太人である。

ロシアに於ける猶太人の歴史は淫蕩の惡女王カタリナ大帝が波蘭を分割掠奪した時代より始まる。それより以前の諸君主は猶太人をして一步も國內に入らしめまいといふ傳統的政策を採つてゐたのであるが、當時百萬人の猶太人を有する波蘭の併合は自ら此傳統的政策に破綻を生ぜしめたのだ。(尤もロシア建國前後にホザル族といふ猶太系の人種がゐたのであるがそれは餘り遠い昔の話であつた。つて、ロシアに於ける近世猶太人の歴史が波蘭併合に始まることは「猶太民族史」の大著を書いたグレイック博士の論ずるところである。同英譯第六卷八十八頁)しかし此時代以後に於ける猶太人の状態は慘憺たるものであつた。カタリナは波蘭猶太人が作り上げてゐたカハールと呼ぶ美しい自治組織を破壊した。次いで市民權も奪はれた。猶太人は露西亞内の諸都市の商業團體に加入することを嚴禁せられたのみならず、その住居區域も制限せられた。フランス大革命は歐羅巴の猶太人に光明を與ふるものであつたが、此一大社會的變革がロシアの人民にさしたる影響を與へなかつたが如くに、猶太人にも何等の影響を及ぼすものでなかつた。アレキサンダー一世は猶太人に對して始めは多少の好意を示してゐたのであるが、後には一轉して非常の迫害を加へた。暴王として名高き次王ニコラス一世の時代には猶太人を純粹に特殊民として取扱ふ法制が完備し、猶太人虐殺の風も始まつた。アレキサンダー二世の頃には同化政策も説かれたが反動的風潮が既に其跡に現れた。最近に至りても猶太人迫害は依然として續いてゐた。猶太人は中央ロシアから追ひ出されて、ミンスク其他の諸州に移らしめられた。また農村から追ひ出されて都市内の狭い區域に押し込められた。すべての猶太人は農村に住むことを禁じられ、たゞ宿屋の亭主のみが除外例であつたが、それも政府が一八九七年に酒の專賣をするようになってから禁ぜられた。官吏になることも禁ぜられてゐた。兵士になることは出來ても士官にはなれなかつた。警察官吏や鐵道官吏にもなれなかつた。教育にも制限があつた。中學卒業生の一定數以上は、如何に學才があり學費があつても大學に學び得なかつた。

ザア政治は誠に猶太人にとつては地獄であつた。フリーレンダーはザアが猶太人を迫害したのは其經濟的實力を恐れたのと、希臘正教の教理といふ見地よりしたものだと言ひ、「ロシアに於ける猶太人の歴史は「ザア政治の下に於ける猶太人の歴史」であつて、ロシア國民に罪はない」と

言つてゐるが（「ロシア及波蘭土の猶太人」一〇〇頁）しかしザアの宣傳はロシアの國民特に農民の間に猶太人憎惡の觀念を植へつけ、革命後の今日にも抜け難いものがある。

二 前代ロシアの猶太人

今世紀初頭の統計によると、ロシアに於ける猶太人は約五百二十萬人であつて、ロシアの全人口の四分一厘三毛であつた。これを個々の地方について言へば

カウカサス……………	〇、六三%	中部アシヤ……………	〇、一六%
シベリア……………	〇、六〇%	歐露……………	四、八一%

であつたが、更に猶太人居住地域に指定されてゐる州について、其地方の人口全體に對する割合を見ると

州名	%	州名	%
グロホノ……………	一七、二八	ホドルスク……………	一一、一五
ミンスク……………	一五、七七	キーエフ……………	一一、〇三
コウノ……………	一三、七一	モヒレフ……………	一一、九二

ウオーリリン……………	一三、三一	ウイテプスク……………	一一、八〇
ウイエルナ……………	一一、九〇	ベサラビエン……………	一一、六五
ヘルメン……………	一一、三一		

であつて、割合に密集生活をしてゐたのが分る。彼等は住居を制限されてゐるのみならず、職業をも制限せられてゐたのであるから、自ら貧困ならざるを得なかつた。今世紀初頭に猶太人問題調査會といふ官設機關が出来たが、その委員長のパールン伯爵といふのがロシアの猶太人の九割は其日暮しであると言つたことがある。ワルシャウでは全猶太人の三十分の一が納税資格のないものであつた。またこれよりも多い人間が葬式の費用をも持つてゐないと言はれた。彼女は「洗禮か、死か、移住か」を選まねばならなかつた。しかし洗禮を受けて基督教徒となるものは金持の猶太人に限られてゐた。傳染病その他よりする死は度々猶太人を見舞ふた。それは丁度、チブスがロシアの農村の過剩人口を掃蕩するのと同じ慘酷な自然作用であつた。移住する猶太人も幸福でなかつた。トルコはロシアの猶太人がパレスチナに入ることを禁じた。ロンドン貧民窟イースト・エンドにはロシアの猶太人が群集し、苦汗制度のために勞働力を極度に搾られてゐる。彼等は北米合衆國の諸都市の陋巷にも巢くふてゐる。

かくてロシアには猶太人プロレタリアなる特殊のプロレタリアの集群を生じた。而してロシアの産業が資本主義化するにつれて、また労働運動や社会主義運動の勃興につれて、猶太人の中にも社会運動が現れざるを得なかつた。

最初、ロシアに於ける猶太人プロレタリアの間にはチエウラなる結社が発生した。しかしそれは手工業者の集團であつて、鮮明な階級的意識に燃ゆる近世的労働者の團體ではなかつた。後者の意義に於ける猶太人プロレタリアの社会運動は通常、「ブンド」の略稱を以て呼ばれる「波蘭及露西亞内猶太人労働者同盟」なる團結が一八九七年に發生してからであつた。工場労働に服する猶太人プロレタリアの状態は正に他の露西亞の工場労働者と提携すべき條件たるものであつた。ロシアの社会主義運動の先驅者は常に猶太人プロレタリアの間に宣傳することを忘れなかつた。工場に労働する猶太人プロレタリアは最初より社会主義的であつた。殊にそのリーダー達はマルクス主義の信奉者であつた。一八八〇年以後に於て猶太人プロレタリアは種々の労働争議に参加して勝利を得たり敗北したりしたが、その結果として公然の、或は秘密の労働團體が作られてゐた。それが前世紀の終りに「ブンド」として結合し、純然たる社会主義的綱領の下に動くようになったのである。此ブンドは同盟罷工の頑強なことを以て聞えて居り、七週間以上、罷工を繼續

したような場合も少くなかつた。「ブンド」はマルクス主義の純粹支持者であつた。これは純猶太人的であつた手工業者の團體たるチエウラとは全く異なるところである。(サラ、ラビノフキツチプロレタリアの)かくの如きは資本主義の發達が民族の言語、倫理、宗教、法律的地位の差別を埋没する社会的作用に歸する事が出来る。ブンドは全くロシアの社会民主黨の統制の下に立つて行動してきて居たのである。

三 革命と猶太人

革命はロシアの社会組織に於て約束であつた。ロシアに於て遅かれ早かれ、革命の到來すべきことは革命家は勿論、貴族もブルジョアも豫感を持つてゐたところである。一九一七年の革命は世界最初の社会主義國家を現出した。この革命は猶太人の慘酷な法律的地位を解放するものであり、同時に多くの猶太人の参加したところの革命であつた。革命に参加した猶太人の数がロシア内の全猶太人の人口に對する割合は、同じく革命に参加したロシア人がその全人口に對する割合よりも、多いのである。グレート博士の「猶太民族史」を補遺したラインジン氏は「ボルシエヴイキ治下のロシアの六百萬の猶太人は如何なる國の猶太人よりも幸福である」となしてゐる。

しかしブルジョアの新聞が屢々誠しやかに宣傳を試みたように、ロシアの革命そのものが全く猶太人の頭脳によりて計畫せられ、その手によりて生じたといふ風説に對しては、吾人は絶対にこれを否定せねばならない。ロシアに於ける猶太人は何れの國のそれよりも慘酷な待遇を受け、その復讐心は火よりも強かつたが、ロシアの社會革命を統制し得る力は無かつた。ソビエト・ロシアを左右するものが全然猶太人であるといふ宣傳は、長い年代の間に傳統化してゐる猶太人に對する偏見を利用し、ロシア革命そのものにケチをつけやうとするブルジョア一流の詐欺的宣傳であつて、かの女子國有の流説と同一種類のものなのである。

嘗つてイギリスの議會に於てボルシエヴィズムの革命が猶太人の革命であるか否かについて論争せられたとき、マンチエスター・ガーディアンの記者グールド氏がその妄説を遺憾なく論破した。グールド氏は早くロシアに入り、ロシアが世界の神祕國視せられてゐた時分に、流麗な筆を呵して通信文を發表し、世界を騒がせた人である。彼は猶太人とボルシエヴィズムとを結びつけることは反革命者流の叫び聲に過ぎないとなし、例へば人民委員會の最高幹部たる十八人のうち、トロツキイ一人のみが猶太人であり、政府委員百十五人中、八人のみが猶太人たるに過ぎないではないかとなし、若しも是を以て猶太人の勝利とするならば、現に英國の内閣には猶太人出身の大臣

がロシアよりも多いから、英國はロシアよりも一層完全に猶太人に征服された國ではないかと論じてゐる。(一八一八年十二月二十七日發行の『ソビエト・ロシア』の「ボルシエヴィズムと猶太人」の一文参照)

革命以後に於て猶太人は全くその社會的地位が他の民族と同等となつた。しかるに依然として猶太人を憎惡し、民衆の間に舊來の偏見を維持せしめようとするものは反革命の徒輩であつた。デニキン軍は屢々「猶太人と見たら殺せ」と云ふ命令を發した。實際上、南露地方にては數萬人の猶太人が彼等のために虐殺せられた。ボルシエヴィズムが猶太人の陰謀であるといふ宣傳も多くはこの反革命軍たるデニキンやコルチャツク共の發したところである。

一九二〇年刊行の『猶太人々名録』は猶太人とソビエトなる一項の下にロシア及び匈牙利の革命に参加した猶太人の名を擧げてゐる。同書は社會革命黨の領袖チエルノフをもボルシエヴィストとして擧げるような過失をしてゐるから、全部信用し難いが、ロシアの部にはトロツキイ、カメネフ、リトヴィノフ、ヅリフィノフ、ヤコブレフなどの名が見える。匈牙利の部にては一時的ながら同國を赤化して全歐を震撼したベラ・クン、その第一の幕僚にして革命失敗後に自殺したと傳へられる、スザムエリイ、其他の有名な革命家の名が見える。匈牙利の革命の首腦者はロシアと異り、殆ど猶太人のみであつたと言ひ得る。但し彼等が猶太主義のためにボルシエヴィズ

ムを假用したのでないのは言を俟たない。ボルシェヴィズムは最も極端なるインターナショナルの精神に立つものであり、また是れを其本質的部分とするのであるから、ボルシェヴィズムを信する猶太人が夙にその猶太主義を捨て去つてゐるのは言ふまでもないことである。なほトロツキイは猶太人でないといふ説が有力であることをロシア通の某友人に聞いた。こゝにそれを附記しておく。

四 ××黨と猶太人

××黨は猶太人問題について如何なる政策を採つてゐるのであらうか。筆者はそれについて今まで特に注意してゐなかつたから、個々の具體的事實を擧げ得ないのは遺憾であるが、その基本原则だけは諸種の宣言や綱領の中に民族問題を取扱つた部分について見れば明かである。

××黨は各民族の自治といふことを民族問題の根本方針とする。弱國が強國の支配より解放され、植民地の民族がその本國の搾取より解放されることを目標とする。しかし「萬國の労働者は同一階級に屬する兄弟であつて、同時に萬國の資本家の敵である」といふ見地に立つものであるから、諸民族をして直に權利を平等たらしめ、其自決を認容するものでない。弱國にも弱民族に

も、やはり其内部にはブルジョアとプロレタリアとの對立がある。×××が認むるものは強國にせよ弱國にせよ、プロレタリアを以つて組織せられたる民族的單位を意味するのである。

以上の如く×××は民族の自決を認めるが、その内部の資本家や地主や貴族を除きたる、プロレタリアのみを以つて構成せられたる民族の自決を認むるに外ならない。此の根本方針は猶太人問題についても適用せられねばならぬ。第三インタナショナルの第二大會は此意味に於て、所謂シオニズム——猶太人が故國パレスチナに於て猶太人國家を建設せんとする運動——を否認し、これを以て、パレスチナに住めるアラビヤ人を英國の搾取に暴露せんとするものであるとなしてゐる。

ブハーリンはその『コンミュニズム入門』の中に次の如く論じてゐる。即ち前代のザア政府が猶太人を憎惡することを民衆に強ひてゐたのは、労働者と農民との革命運動を阻止せんが爲めであつた。ザア政府は民衆に對して汝等の貧乏は猶太人の存在に基くと教へてゐた。しかしそれはやがて地主と資本家との搾取を容易にせんがためであつた。かくて反セミ族運動は實に社會主義を敵とする一の鬭争形式であり、労働者と農民とを無力無能にせんとする狡猾の手段であつたと。この言葉は過去二千年の政治國家時代に於て猶太人が長き虐待を蒙つてゐた真相を説明するもの

である。猶太人たるゾムバルト教授は「戦ひは猶太人の收穫である」と言つた。今後の世界は過去に不幸なりしものゝ幸福なるべき世界である。猶太人の將來もまた希望に輝いてゐる。

—〔前衛〕大正十一年十一月—

三 斷 章

1 弱小民族の搾取と資本主義

強大の國家が弱小の民族を搾取するといふ現象は古代史以來、既に顯著なところであるが、特に近世の植民政策時代に入つてから甚だ著しい。而して近世に於ける主要の搾取者は歐羅巴の強國であり、主要の被害者は東洋諸國に外ならなかつた。この數世紀以來、わが東洋諸民族が歐羅巴人の搾取に虐げられた事は吾人の憤らざるを得ない處である。しかし吾人は此處で日本も亦歐羅巴流の搾取國の役目を小規模ながら、然し徹底的に演じてゐる事を思出しておく必要がある。

弱小民族の搾取といふことは、「搾取」といふ社會現象の特種な表現である。元來、搾取とは何かと言ふに、それは「自己の欲望を満足する爲めに他人を手段とすること」を謂ふのである。此搾取現象は一國內部の社會關係に最も明白に現れ、勞働階級と政治階級との階級的分裂の素因となる。過去の社會は何れの文明國に在りても、搾取といふ事より發生した階級對立によりて支配

い。ポーランドのプロレタリアが獨逸の地主や資本家に對してのみならず、獨逸のプロレタリアに對して不信を抱いたが如き、愛蘭のプロレタリアが英國の政治家のみならず英國のプロレタリアに反感を有するが如き、奧太利治下のチエツクのプロレタリアが奧太利の勞働者にも反感を抱いてゐるが如きは、決して理由のない事ではない。一口に搾取國と言つても其國の國民全部が搾取慾に燃えてゐる譯でない。或國をして搾取國たらしめるものは其國の資本家階級なのである。しかし搾取國に國民たるものは何者も間接に責任を免れることは出来ない。

〔要するに近世に於ける弱小民族の搾取といふ現象は資本主義の結果であることが最も大きい。従つて此現象の消滅するには資本主義×××絶對の必要條件である。資本主義と切り離して弱小民族の解放は實現せられない。一時的に實現せられても、資本主義の續く限り、再び此現象は起るであらう。従つて弱小民族の消滅する條件として第一には本國に於けるプロレタリアの運動の盛となること、第二には弱小民族の間に於ける單なる國民的運動が社會改革の要求を藏するものに變ること、第三には兩者が×××××をとること、第四には民族自決の原則が充分に認められるとを數へるであらう。〕

——「亞細亞公論」大正十二年一月——

2 將來の植民政策について

一 植民政策と資本主義

移住と人類の文明とは深き關係を有つて居る。從來の文明は或種族が早魃其他の原因に依つて故郷を出で、新しい土地に移住して先住民族を征服し、國家を建設したときから始まつて居る。是は古代史に於て頗る顯著なる所であつて、例へばアリアン人が中央亞細亞の故郷を棄てて、歐羅巴、印度、波斯、露西亞等の地方に移住してアリアン文明を展開した如き、又希臘人が小亞細亞に移住して獨特の文明を造つた如きがそうである。併し近代の植民政策は斯る文明史的意義を有することは少いのであつて、要するに強國が弱小國若くは弱小民族を經濟的に搾取することが根本の目的となつて居る。或る植民學者は植民と云ふことを以て文化の擴張といふことと同一視し、優等の文明を有する民族が劣等の民族を精神的、物質的に教化するのが植民であると言つて居るが、斯の如きは餘りに一方面のみを見た議論であつて、近世の植民史が資本主義の興隆と並

行し、その影響を最も深く被つてゐるといふ根本的方面を看過したものである。

近世の植民政策は資本主義の發達と大なる關係を有つて居る。資本主義とは資本を有する階級が經濟上、政治上に於て獨裁的權力を振つて居るのを謂ふ。歴史的に見ると是れは十五世紀頃の伊太利に起源して居る。最初伊太利の諸都市が東洋貿易の爲に冒險的航海を企てたに始まつて居る。次いで西班牙、葡萄牙、和蘭、英吉利などが植民史の舞臺に現はれた。最初、植民政策は徹底的に本國本位の重商主義を以て其歴史の第一頁を飾つて居るが、それは本國の資本主義の膨脹の結果であると共に、又其資本主義を膨脹せしめた有力なる原因であつた。植民政策を歴史的に見ると最初には本國本位の重商主義時代があり、次いで植民地の自治を許容する自由貿易主義の時代があつたが、今日では帝國主義的の新重商主義が行はれると同時に同化政策なるものも唱へられて居る。しかし要するに近代の植民政策なるものは弱小民族を犠牲にして廉き原料、廉き労働、都合好き市場を獲得することが根本的特徴である。

世界戦争前には諸國の植國政策が最高潮に達してゐた。相互に何等かの衝突をせざるを得ないやうな絶頂に上ほり詰めて居つた。其理由は本國の資本主義が漸次に膨脹して其産出する商品が夥多となり、一國內の需要若くは購買力以上のものとなり、何れかの土地に販路を求めることが絶對に必要となつて居つたことに存して居る。

二 國民的運動の勃興

歐羅巴の資本主義が其勢力を擴張したのは東洋方面であつた。東洋の經濟的發達は歐羅巴に後れて居つたから、自然に其犠牲とならざるを得なかつた。埃及、小亞細亞の如き近東地方は勿論、印度や支那までも其犠牲となつたのであるが、歐羅巴の資本主義が斯の如く弱小民族に侵入して來ると、如何なる結果を生ずるか云ふに、先づ第一の影響は其弱小民族間に於ける舊社會が徹底的に害されると云ふことである。弱小民族の社會は大抵農業を中心とする社會であるが、資本の侵入は此靜的なる社會組織を破壊するのみならず、住民をしてプロレタリアの地位に落すものである。而して資本は本國に於けるよりも一層慘酷なる所の作用を發揮することになつて、勞働力の搾取が酷しく且つ天然の資源に對しても極端なる搾取をなすようになる。斯くて植民政策を行ふ資本國は利益を占むるに反し、弱小民族それ自身は之に依つて生活資料を奪はれ、大部分劣弱なる經濟生活を營まざるを得ないのである。是が東洋諸民族が近世において擔ふた運命であつた。

併しながら近來に於て斯る弱小民族の間に國民的運動が盛に起つてきた事は注目し得る現象であると同時に、將來の植民政策に變革を促すものに外ならない。印度に於ける國民運動は勿論、埃及、波斯、支那其他の國に於て國民運動が勃發したことは近代に於ける著しき現象である。露西亞のボルシェヴィキは弱小民族に對して多大の注意を拂ひ、民族自決の見地から從來歐羅巴の資本主義の搾取に苦しんだ民族の間の國民的運動を助けるのみならず、又之を積極的に煽動せんとする政策を採つてゐる。一九一九年以來毎年大會を催してゐる第三インターナショナルの大會には土耳其、波斯、印度、埃及其外の弱小民族より代表者が出席するのみならず、瓜哇や比律賓やニグロの代表者も之に参加して居るのであつて、此の運動は歐羅巴の資本主義を脅威する大なる役目を果さんとなしつゝあるのである。露西亞の共產黨が弱小民族を援助する方策として掲げて居る所を讀んで見ると國民的運動を×けるのみならず、之を××すべきことを掲げ、又一切の××思想を植付け且つ住民を覺醒せしむることを論じて、弱小民族が眞の民族自決に近くべきを論じて居る。印度のガンヂーの運動の如きは一種の中産階級的運動であつて、ガンヂーは深き哲學思想の所持者であつても、要するに眞のプロレタリア運動でないため、ロシアの政府はこれに深い同情を有して居らぬが、印度の農民や勞働階級の間には深く宣傳をなしつゝあると傳

へられて居る。又亞細亞の回教徒に對しても同様である。斯の如くして歐羅巴の植民政策は此方面よりも脅威を感じて居る次第である。

以上觀察した所に依ると、植民政策が世界大戰前に比して著しく變調を生じて居ることが分る。即ち第一には本國の資本主義が漸次に行詰まつて居り、第二には弱小民族の間に國民的運動が勃興して、従前の如く奴隸的待遇に甘んじなくなり、多數の力を頼むやうになつて來て居り、第三には露西亞が積極的に弱小民族を××して、資本主義に對して××を企てしめて居るのである。斯の如くして植民政策なるものは舊來の儘では到底維持することが出來ないのであつて、換言すれば舊式の植民政策は崩壊し新しいものが生れねばならなくなつてゐるといふことが言へるのである。

三 民族自決と將來の植民政策

然らば將來の植民政策は如何なる新方面を開拓せなければならぬかと云ふに、それは論者の立場／＼に依つて異なるであらう。帝國主義的思想の所有者は依然として廉い原料、廉い勞働、都合好き販路と云ふ舊式植民政策の原則を主張するであらう。又自由主義的の見地を有つて居る人々